

ドスケベ♡ 盛り短編集 いろんな女の子がんほお♡ おほお♡ するだけの話。

hentai提督

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

完結済。番外編はその内書くかも。

んほお系、♡喘ぎ、♡乱舞、下品、ドスケベ、快樂墮ち。

基本脳死状態で書いてるくつそ頭の悪い話。

先輩読者のお歴々がテクノブレイクできるように頑張るからいっぱいシコるんだゾ♡

他小説一覧は←

[https://syosetu.org/?mode=user\\_novel\\_list&amp;uid=305724](https://syosetu.org/?mode=user_novel_list&amp;uid=305724)

## 目次

第1章 黒髪ロング爆乳爆尻JKがドスケベオナニーしたりする話。

#1 黒髪ロング爆乳爆尻JKがドスケベオナニーする話。

1

#2 黒髪ロング爆乳爆尻JKがおじさんちんぽの匂いに即負けする話。

8

#3 黒髪ロング爆乳爆尻JKがエロ蹲踞ドスケベフェラする話。

16

#4 黒髪ロング爆乳爆尻JKがパイズリしながら長乳首で雌イキする話。

20

#5 黒髪ロング爆乳爆尻JKがガニ股ドスケベポーズで尻コキされる話。

24

#6 黒髪ロング爆乳爆尻JKがドスケベアナル舐めパイズリする話。

30

#7 黒髪ロング爆乳爆尻JKがドスケベセックスする話。

36

第2章 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキをちんぽ臭で屈服させたりする話。

#1 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキをちんぽ臭で屈服させる話。

42

#2 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキにチンしゃぶを仕込む話。

50

#3 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキのロリボディに快楽を仕込む話。

54

#4 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキに極太ちんぽをねじ込

む話。

58

#5 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキを腹ポコにする話。

62

第3章 世話焼きドMエロJKに癒されたりスケベしたりする話。

#1 世話焼きドMエロJKに癒されたりスケベしたりする話。

66

#2 世話焼きドMエロJKに諭されたり種付けセックスしたりする話。

75

#3 世話焼きドMエロJKにはようフェラされたりダメにされたりする話。

83

#4 世話焼きドMエロJKの親友に詰められたりいきなりキスされたりする話。

87

#5 世話焼きドMエロJKの親友2人に煽られたり即イキさせたりする話。

95

#6 世話焼きドMエロJKの親友をイラマチオで屈服させたり発情させたりする話。

100

#7 世話焼きドMエロJKの親友にドスケベポーズさせたりガチハメしたりする話。

105

#8 世話焼きドMエロJKとお風呂でイチャイチャしたりする話。

110

#9 世話焼きドMエロJKと精液ボテセックスしたりする話。

115

#10 世話焼きドMエロJKを虐めたり逃げられなくなったりする話。

120

#11 世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4Pする話①

120

160	最終話	世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4Pする話⑦
154	#16	世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4Pする話⑥
149	#15	世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4Pする話⑤
141	#14	世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4Pする話④
134	#13	世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4Pする話③
131	#12	世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4Pする話②
126		

第1章 黒髪ロング爆乳爆尻JKがドスケベオナニーしたりする話。

#1 黒髪ロング爆乳爆尻JKがドスケベオナニーする話。

(今日から高校生かあ……)

学校指定の鞆を胸に抱き、なるべく目立たないように、縮こまって帰りの通学バスに揺られる一人の少女。

彼女、小暮優菜(こぐれゆうな)という女子高生はとにかく人目を惹く。

今日から3年間、都内でも有数の進学校に通う彼女には悩みがあった。

その悩みとは、16歳という、まだ高校に入りたての少女にしては不釣り合いにも程がある美貌と恵体の持ち主であるということだった。

陽の光を受ければ美しく輝き、艶のある、まるで絹糸のように流れる黒の長髪。

気の弱そうな、伏し目がちの大きな瞳。人形のように整った鼻立ち。潤いに満ちた唇。

ただ歩くだけでぶるん♡ と音が聞こえてきそうな、それでいて決して形を崩すことのない、グラビアアイドル顔負けの爆乳。

スカートを尋常ではなく持ち上げてしまう、肉がたつぷりとのった安産型の爆尻。

サイハイソックスに押された太ももが、得も言われぬ肉感を生む肉付きの良さ。

ただそこにあるだけで、雄の性欲を無限に掻き立てるような得體。

この、100人が目にすればその全てが渴望の眼差しを向けるであろう美と淫らさこそ、彼女を悩ませていた根幹であった。

身体に変化が起こったのは、小学5年生の頃。

ももとの整った顔立ちもあり、非常に愛らしかった彼女だが、第二次性徴を迎えたことによる変化が他の女の子たちとは一線を画していた。

胸とお尻の異常ともいえる発達。小学6年生になる頃には、周囲の男の子を精通させ、大人の男ですら勃起させてしまう身体に成長してしまっていた。

そして中学生になると彼女の身体はさらに成長し、学校でも街中でも浴びせられる男からの下碑た視線に怯え、酷いイジメを受けることはなかったものの、女子からも遠回しに敬遠されるようになっていた。

家庭内では、エリートである両親からの一方的な期待に応える為、ひたすら勉強をするだけの毎日。仕事ばかりの両親は夫婦仲も冷え切っており、引つ込み思案の彼女には相談など夢のまた夢であった。

そんな孤独な毎日を一変させたのが、中学3年生となった際に持たされたスマートフォンだった。当時、通学中の学生が襲われたり、街中での突然の凶行がニュースで騒がれていたことと、学校と家庭間でのSNS使用が校則で規定されたためだった。

優菜の両親は、成績が落ちさえしなければ他はどうでもいいという有様で、面倒な手続きを嫌って特に制限もかけずに彼女に買い与えた。臆病で男嫌いの、自分達にただただ従順なだけの娘が、スマホを使って遊ぶなど思いも寄らなかつたのも要因だった。

(はやく……はやく着かないかな……我慢……がまん……っ♡)

スマホを手に入れた彼女は、勉強の合間の少ない時間を使って、ネットで自分の身体について調べ回った。なぜこんなにも自分は他の子たちと違うのか、それを知りたい一心で。そして、彼女は偶然見つけてしまった、出会ってしまったのだ。

(今日は、昨日見つけたあの動画でするって決めてるんだから……♡)

男なら誰もが世話になる、アダルトサイトの数々に。

(しかも、今は一人暮らしだし……♡ 成績、落とさないでいられるかな、私……)

若くして順調に出世しているらしい両親は、今回二人とも海外への長期赴任が決まっていた。赴任先はそれぞれ別。当然彼等は優菜を

連れて行く気などなく、優菜自身も着いていく気などさらさらなかった。その為、これはチャンスだと珍しく、彼女は自分から両親に願っていた。

一人暮らしがしたい。成績は今まで通り落とさないと、住む場所も引越しも自分でやるから、と。

両親は二つ返事で了承した。あまりのあつけなさに拍子抜けし、こういう人達だったと空虚な気持ちを押し込み、彼女は勉強と新生活への準備に追われ、そして自分の完全なプライベートスペースを手に入れたのだった。

「あつ♡ はあつ♡ んっ♡ おっ♡ すごっ♡ これすっ♡」

優菜は部屋に帰ってくるなり靴を脱ぎ捨て、鞆も放り投げてオナニーに耽っていた。

両親のいない、自分だけの空間という格別な解放感が、彼女の理性を日に日に削り落としていく。

スマホの画面に映る女性は、優菜には劣るが、それでも男好きのする淫猥そのもののような身体を惜しげもなく晒し、乱れ、雄を誘惑して、カリ太の大きなちんぽに容赦なく犯され喘いでいる。

「おっ♡ おっ♡ こんなっ♡ すけべなからだしてっ♡ んおっ♡ スケベ♡ このひと♡ スケベすぎるよお♡ ふおっ♡」

優菜にとって、こうしたアダルトサイトの存在を知った時の衝撃は、それはもう計り知れないものだった。

それまでの彼女は、自分の発育の良すぎる身体に散々悩まされてきた。これのせいで、多感な中学生生活において親しい友人ができたこともない。電車で痴漢に遭ったことなど一度や二度ではない。まるで自分だけがおかしな存在であるかのように、彼女は信じ込んできた。

なのに、アダルトサイトの動画内の女性は、優菜には劣れども十分にいやらしい身体をしているのに、セックスに溺れ、皆一様に幸せそうな顔をしていた。それだけではなく、漫画や同人誌といった媒体と

もなれば、自分並に卑猥な身体に描かれたキャラクター達が、まるで動物の交尾の如くセックスしながら、獣じみた喘ぎ声をあげ、とろけきった表情を見せる。

優菜にとつて、最初はあまりにも理解の及ばない内容だった。しかし、終わりのない抑圧された生活と孤独の中に身を置く彼女にとつて、それらの持つ異様な妖しさと魅力、なによりあまりに強烈に過ぎたその光景が脳裏に焼き付いて離れず、次第に彼女は魅入られていった。

「おほっ♡ おっぱいつぶすのきもちいい♡ なつがいちくびも♡  
んおっ♡ きくっ♡ つねるのきつくう♡」

こうしてスマホの中の他人に自分を重ね、淫猥極まりない汚い声をあげて、オナニーに没頭できるこの瞬間が、優菜の心の隙間を埋める為の、なくてはならないものとなっていた。

ありのままの自分を曝け出すかのような解放感と、脳を犯す麻薬のような快樂に依存し、あれだけ嫌いだった自分の身体も、今ではそれほど悪いものでもなかったとすら考えるまでになっていた。

「ふーっ♡ ふーっ♡ こ、こんないやらしいおっぱいとちくび♡  
おっ♡ まんがにもないよお♡ スケべっ♡ わたしのからだ♡  
なんでこんなにえっちなのお♡ んおっ♡ こんなの♡ おとこの  
ひとならおかししたいにきまつてるよお♡ おほっ♡」

男向けのアダルト作品ばかり見てきた優菜は、彼女のスケベな身体をいやらしく盗み見てくる男たちの感情を、多少なりとも理解できるようになってしまうていた。

動画や漫画の男たちは、優菜のようにドスケベな身体に欲情し、ぶっといちんぽをばきばきに勃起させ、雄の本能丸出しで雌を犯す。例え雌がやめたと懇願しても、満足するまで絶対にやめてくれない……。

そんな倒錯的な妄想とともに、作品内の女性に己を投影してオナニーに勤しむ彼女にとつて、男は下碑た視線をよこす怖い存在から、自分にオナニー以上の快樂をもたらしてくれるかもしれない存在へと書き換わっていた。

「はっ♡ はっ♡ 今日初めて会った男の子も先生も、みんなエッチな目で私をみてた……♡ や、やっぱり、私とエッチしたいのかな？♡ 頭の中で滅茶苦茶に犯されて♡ たくさん精子♡ 中に出されちゃってるのかな♡ んっ♡ ふう♡」

優菜は、頭に沸いては止まらない妄想に身震いしながら、既にぐちやぐちやのショーツを脱ぎすて、愛液で濡れそぼったおまんここと、もはや摘まめるほどに大きく育ててしまったクリトリスを擦り上げる。

「おっ？♡ おぎゅっ♡ やっぱりしゅご♡ ほおっ♡ おまんこ♡ くりとりすも♡ きもちい♡ きもちいよお♡ おうっ♡ おほおっ♡」

だらしなく、まるでカエルのように股を開き、そこから湧き上がってくる快感の波に腰をへこへこ♡ と揺すられながら、優菜は憑りつかれたかのようにドスケベオナニーに没頭する。

「ほっおっ♡ おう♡ あーいく♡ これいっく♡ でもがまん♡ もうちよつと♡ もうちよつとだけがまんするの♡ おっ♡ そしたらもつときもちいいから♡」

熱に浮かされ、誰とも構わず声を上げ、快楽をむさぼる優菜。

そんな彼女は上体を起こすと、ベットの脇に置いておいた100均の洗濯ばさみを手に取り、これから得られるであろう強烈な刺激に心を躍らせる。

「ふっ♡ ふうっ♡ 今まで怖くてできなかったけど♡ だ、大丈夫だよ♡ もう高校生にもなったんだし♡ こ、これぐらい♡ みんなやってるよね♡」

明らかにおかしな認識を得てしまっている優菜だが、その正誤は今の彼女には関係ない。ただただ、これから襲い来るであろう暴力的な快楽に期待してよだれを飲み込み、口元をゆがませる。

「じゃ、じゃあいくよ……♡ 最初はゆっくり……♡ ゆっくりと……—くおおっ?!♡ ふおっ♡ やっぱ♡ これすごいっ♡ おっ♡」

まず卑猥に伸びた右の乳首に狙いを定めた優菜は、慎重に慎重に洗

濯ばさみで乳首を挟み込む。

バネの力で潰されていく乳首の快感に、背をエビ反りに反らせた優菜は甘イキし、おまんこからぷしゃっ♡と潮を吹いてしまう。

「ふーっ♡ ふーっ♡ つ、次は左を……ほおおっ♡♡ うおっ?♡  
きつく♡ これきくうっ♡」

続けて潰した左の乳首でも軽く絶頂し、頭を仰げ反らせ、天井に向かって舌を突き出しながら快楽を貪っていく。

「ほっ♡ ほっ♡ さ、さいごはあ……♡ く、くりとりす♡ ふいつ♡ い、いつちやうの?♡ これえ♡ こんなのでくりとりすつぶしちゃったら……♡ わたししんじやうかも♡ ううん♡ ぜったいしんじやうよお♡」

期待と不安が混ぜこぜになり、涙と鼻水と涎で可憐な顔を台無しにしながらも、優菜は手を震えさせながら、その凶器を痛いくらいに勃起させたクリトリスに向かわせる。

「ひっ♡ こわい♡ えへっ♡ こわいよお♡ で、でも♡ ぜったいきもちいいよね♡ ちくびでこんだったし♡ だ、だいじょうぶだよ♡ ゆっくり♡ さっきみたいにゆっくりやれば♡ そーつと♡ そーつ……あつ——」

もう少しで凶器がクリトリスをとらえようとした瞬間、優菜は手の震えと甘イキによる筋肉の弛緩から手を滑らせてしまった。

抑える力を失った洗濯ばさみは、バネの力の赴くままにバチンっ♡と音を立て——

「——ふつぎいいいいいつ?!♡♡♡ うおおっ?!♡♡ おっほおおおっつ?!♡♡♡」

想像を遥かに超える衝撃と痛み、そして脳天まで一瞬で突き抜けた異常な快感に、優菜は獣ですらまだ理性があると思えるような絶叫をあげ、腰を天高く突き上げて潮をまき散らし、白目を向いて舌を放り出しながらいきまくってしまった。

その後数分の間、汚声による絶叫を響かせながら、優菜は腰をカクカクカクっ♡と揺らし続けては激しく絶頂を繰り返し、最後には失神してからも甘イキを続け、漸く収まった頃には、まだ引つ越しの荷

物が散乱する部屋中に性臭をこびりつかせながら眠ってしまった。  
た。

そして優菜は気付かなかった。ベランダに続く窓を、ほんの少し閉  
め忘れてしまっていたことを。

これが、後の彼女の人生を、大きく変えてしまうことになる――。

## #2 黒髪ロング爆乳爆尻JKがおじさんちんぽの匂いに即負けする話。

「うおっ♡ おふっ♡ あいつ?♡ しゅご♡ これしゅごっ♡ ぶるぶる♡ くり♡ くりとりすいじめ♡ ふおっ♡ すぐいく♡ いっぐ♡ おっほっ♡」

優菜が100均の洗濯ばさみにガンギマリアクメを決めてから1ヶ月。

起きたらあまりの惨状に唾然とし、しかもベランダの窓が少し開いていることに気づいて盛大に焦ったのだが、そんな失態を犯しながらも日課のドスケベオナニーを辞められるはずもなく。

むしろ、加速度的に希薄となっていく理性と羞恥心。

代わりに増していく、それこそ天井知らずと言っても過言ではない性欲の高まりに一抹の不安を覚えつつも、心の隙間を快樂で埋める彼女が抗えるはずもなく、今日も今日とて、ネットで買ったマツサージガンとかいう電動マツサージ器でクリトリスを潰しながら盛大によがっていた。

この1ヶ月、はつきり言つてロクに勉強もせず、学校では今日のオナニーのおかずと相手(道具)の事ばかり思案し、やっとの思いで部屋に転がり込んで気済むまでオナニーに耽る。

まるで男子中学生特有の猿のような盛りっぷりに優菜自身驚き、戸惑いしつつも、快樂依存の兆候すら見せる程のドハマりっぷりであった。

「おっ?♡ くるっ♡ おっきいのくるう♡ いく♡ いくいくいっぐ♡ いっ——っっっ!!♡♡」

まだ使い始めて5分も経っていないのに、簡単に雌イキしてしまう優菜。

防音対策もしてあるマンションなのだが、優菜はあの時のような大声を出さないよう、出来る限り声量を我慢しながらいくようにしてい

た。

優菜のマンションはそれなりの物件で、建物を正面に見て左から右に階段のように、階層が段々と増えていくタイプだった。

優菜の部屋は2階の一番左端の部屋で、真上とその右隣に部屋は無く、下もまず人のいない共有の交流スペースが1階左端から二部屋分広がっている。

さらに、優菜の隣の部屋は現在空き部屋で、人は住んでいない。条件から考えれば、余程の事がなければ大丈夫のはずだが――。

「――やっぱり、窓を開けてたらまずいよね……。  
でも……っ♡」

いくら防音が良かろうと、窓が開いていてあれだけの絶叫をあげてしまえば、外に音は漏れるだろう。

優菜はその事に焦ったと同時に、別の感情も抱いてしまっていた。

「も、もし誰かに聞かれてたら……♡ あんな、き、汚い喘ぎ声を……

♡ 男の人に、聞かれちゃってたら……♡」

優菜の思考回路は、この1ヶ月で完全にスケベな方向に振り切ってしまった。いた。

まさしくエロ動画やエロ漫画の見過ぎ状態ではあったが、今の彼女の心はそういったアダルトコンテンツが大半を占めている。

さらに、被虐的な妄想でオナニーをするといつも以上の、頭の中と子宮を直接いじられるかのような快感が襲い、満たしてくれることを優菜は知ってしまった。

「お、襲われたらどうしよう♡ 私の力じゃ絶対勝てないし♡ き、きつとエツチなことさせられちゃう♡ 恥ずかしいことも、いっぱい……♡ んっ♡ つはあ♡ わ、私って、ドMなのかなあ……♡」  
イったばかりにも関わらず、優菜はマゾな妄想を膨らませながらもオナニーを始めてしまう。

あの日から1週間の間は、怯えと興奮の板挟みにあいなながらも、結局何事もなく日々が過ぎて行った。

その安堵と、少しくらいなら問題ないのでは？ という学生特有の危うい思考、さらにMに目覚めかけていた事実が重なってしまい、そ

の後の優菜は、スリルといつも以上の快感を味わうため、窓を開けてオナニーをするようになってしまっていた。

「ふっ♡ ふうっ♡ ダメなのに……感じちやう♡ おっ♡ おなにー♡ やめらんない♡

こ、これじゃあお猿さん♡ わたし♡ えっちなお猿さんになっちゃった♡ おっ♡ おっほ♡」

暇さえあれば、ひたすらオナニーを繰り返す正真正銘のオナ雌猿。

そんな己のスケベっぷりを流石にまずいとは思いつつも、今の優菜に歯止めをかける者などここにはいない。

「うっ♡ おっ♡ やっぱりこれきくっ♡ このマッサージ器♡  
買って正解♡ ほおっ♡ おっ♡ おっ?♡ まらいぐ♡ い♡

いっ♡」

あつという間に2度目の絶頂に達しようとした、その時――、

「いっくう♡ ——!?! ——えっ、だ、だれ?」

部屋にチャイム音が鳴り響いた。

今日はもう配達もないはずなのに。

(ど、どうしよう……出た方が良いか……でも)

居留守を決め込もうとも思ったが、チャイム音と、さらにドアのノックの音がなり続ける。等間隔に、無機質に。

だんだん怖くなってきた優菜は仕方なく立ち上がり、備え付けのテレビドアホンを確認する。

画面の向こうにいたのは、人の良さそうな顔をした、いつも管理室にいる恰幅の良い中年の管理人さんだった。

正面玄関を通る時に挨拶ぐらいしか交わしていないが、私の胸ではなく、いつもしっかりと目を見て声をかけてくれるこのおじさんに、優菜はそれほど警戒心を抱いていなかった。

いくら今の優菜がDMで倒錯的思考の持ち主だとしても、それは妄想の中でだけだ。現実ともなれば、性的好奇心よりも防衛本能の方がまだ勝っている。

しかし優菜は、お腹の奥がきゆう♡ と疼くのを確かに感じ取っていた。制服は帰宅時のまま着ていたが、今はショーツをはいていな

い。そんな状態で男性と、画面越しとは言え会話をするという事実  
に、優菜は身体を震わせ、愛液を溢れさせていた。

「はい、すみません、小暮です。はい……、はい？ え、あの……わ、  
わかりました」

用件だけ伝えると、管理人は玄関の郵便受けに何かを入れてすぐに  
立ち去ってしまった。

”建物の管理上不都合となる事が起きてしまったので、郵便受けに  
入れた物を確認してください。”

管理人の言葉はたったそれだけ。声も話し方も、いつも通りの優し  
そうな管理人そのものだった。特に気にすることも無いようだが――  
。

「なんだったんだろう。でも、ちよつとドキドキしちゃったかも……  
♡ こんな、パンツもはいてないのに、男の人と喋っちゃうなんて  
……エッチだよ♡」

相変わらずのオナ猿思考にすぐに振れ戻りかけながらも、優菜が郵  
便受けを確認すると、あつたのは極普通の封筒だった。

入っていた封筒をベッドまで持っていき、ハサミで丁寧に開けて中  
身を確認する

中には折りたたまれたA4用紙と、黒くて軽くて、小さく薄い長方  
形の物体だった。

「なんだろう、これ。ちよつと大きなUSB？ あ、紙に書いてある  
……、ボイスレコーダー？」

A4用紙には簡潔に、

”入っているのはボイスレコーダーです、イヤホンを差して再生し  
てみてください。内容をご確認され、必要だと思われましたら、当マ  
ンション管理室までお越しくください。本日は朝まで待機しておりま  
す、いつでもどうぞ。”

とだけ書いてあった。

何が何やらさっぱりな優菜であったが、もともと生真面目な性格の  
彼女である。マンションの管理上不都合が出た、などと言われてしま  
えば、確認しない訳にはいかなかった。

「と、とりあえず聞いてみよう。何かあつたら困っちゃうし……」

一人暮らしを始めて、まだ1ヶ月。両親は海外で、頼れる人間はない。そんな状況下で、ここを追い出されるようなことがあつたら大変……。

そこまで考えて、優菜は今まで自分がどれほどとんでもない事をしていたのか、漸く理解した。頭から血の気が引く思いだった。

そうだ、ここを追い出されたらどうするのだろう。いや、最悪、今は誰もいない実家のマンションに戻ればいいのだが、正直良い思い出もなく、一人で住むには広すぎるし学校からも遠いので、絶対に戻りたくはなかった。

「も、もう絶対窓を開けたまましない。うん、そうしよう……」

そう心に決めて、少しばかり大人になった優菜は、騒いだ心を落ち着かせると、何はともあれ聞いてみようといやホンを差し、耳にはめて再生ボタンを押す。

「……え？」

もう夜も更けた頃、優菜は大きな瞳から涙を溢れさせ、一糸纏わぬ姿で震える全身を抱き締めながら、マンション管理室奥にある従業員用の休憩スペースに立っていた。

目の前には、普段通りに笑顔を浮かべる管理人が、パイプ椅子に腰掛けて優菜の卑猥な裸体を眺めている。

(まだ……まだなの……？ もうやだ……早く終わってえ……)

ボイスレコーダーには、優菜が窓を開けて行っていたオナニーの喘ぎ声が録音されていた。

イヤホンから聞こえてくる自分の下品極まりない声に血の気が引き、ただひたすら後悔し、己の愚かさに絶望しきった優菜は、この世の終わりのような顔でこの管理人に会いに来るより他になかった。

この男が音声データを他にも持っていて、それをばらまかれてもしたら……。

許しを乞う優菜に男が命じたのが、裸になってただじつと立っていること。優菜には、最早この男の命令を聞く以外に道はなかった。

(ああ、ほんとにじつと見られてる……。私のいやらしい身体……。全部……。こんな、こんなのも……。お願い、何か言っただけ……。)

永遠にも思える時間を耐えながら、優菜は流れる涙を拭うことも、比較的小柄な身体には不釣り合いな爆乳も、大きくぷっくりと膨らんだ乳輪も、下品極まりない長乳首も、微かに生え始めた性毛も隠すことを許されない。唯一おまんこだけは、太ももが豊か過ぎるがゆえに、股を擦り合わせてなんとか見えていない状態であった。

「あ、あの……。もう……。許してください——」

『おっ♡おっ♡いつぐ♡これ♡すごっ♡ちくびもおまんこもすごいのお♡んほお♡♡』

「ひっ!? や、やめて! いや、いやあ……。ごめんなさい、ごめんなさい……。」

堪らず優菜が口を開いた瞬間、管理人が彼のスマートフォンを操作して、優菜の獣じみた喘ぎ声を流す。

これには優菜も半狂乱になり、頭を振って壊れたテープのように謝り続けるが、管理人は微動だにせず彼女の喘ぎ声を流し続けた。

『あぎゅっ♡おっ♡うおっ♡ゆび♡ゆびはいつちやったあ♡  
ほっ♡ほっ♡ごご♡おまんこのうえ♡くりとりすのう  
らっかわこするのきつく♡ふおっ♡いつぐ♡』

己の動物にも劣る淫猥な喘ぎ声をひたすら聞かされ続け、無言の男に裸を見続けられるという異常極まりない状況に、優菜は正気と理性を限界まで蝕まれ、ほとんど狂いかかっていた。

頭が思考を放棄し、全身の感覚が麻痺し、壊れる寸前まで追い詰められた優菜の心は、1年前と同じように、唯一信号を送ってくる快樂に縋りつくことで決壊しそうな自我を保とうとしていた。

『おっ♡いぐ♡いぐいぐいぐ♡すごいくりゅ♡と、とまん  
な♡おまんごゴシゴシとまんないのお♡ほおおっ♡いっぎゅ  
♡いっぎゅううっ♡♡んほおお♡』  
「ひっ♡ひっ♡やっ♡こ、こんな♡なんれ♡こんなひどい  
こと♡され、てえ♡わたし♡わらひい♡」

自分の喘ぎ声に脳と耳を、管理人の舐めるような視線に胸を、乳首を、脇を、臍を、痴毛を犯され、もじもじと擦る太もはおまんこから溢れ出る愛液でべっちやべちやに濡れ、くちゆくちゅ♡とはした  
ない音を立て続ける。

ついに優菜は、足腰が立たなくなってへたり込んでしまった。

そんな優菜にようやく満足したのか、管理人が不意に立ち上がり、意識を朦朧とさせ息も絶え絶えな優菜の前に立つと、徐にベルトを外し、ズボンとトランクスを脱ぎ、そして――

「ふーっ♡ふーっ♡?..♡――な、なんのにお、い――?」

えぐいくらいにエラの張ったカリ太で、竿の腹がでっぷりと太り、大量の我慢汁でコーティングされた、恐ろしく饅えた雄の匂いを撒き散らすちんぽを――

「おっ?..♡♡♡」

あろうことか、優菜の鼻の穴にべちや♡と押し付けてしまった。

「――っっっ?!♡♡♡んっほおおおおっ?!♡♡♡ほひっ?♡♡♡

おっおっ?♡♡♡んおおおっ♡♡♡」

雄の放つ強烈な性臭が優菜の鼻から直接脳みそに注ぎ込まれ、彼女は一瞬で頭の中を天国にブツ飛ばされてしまった。

管理人は嬉しそうに頷き、そのまま優菜の顔でずっしりと太ったデカマラを扱き、亀頭で鼻の穴を押し広げて汁を流し込み、愛らしい顔全体に我慢汁を擦り付けながら、ただ匂いを嗅ぎ続けろと命令する。

「ふびっ?!♡♡♡おっぎゅ♡♡♡ほっ♡♡♡ほっ♡♡♡おっっ♡♡♡  
うおっ?♡♡♡ほぎよおおっ♡♡♡♡♡」

初めて味わう暴力的なまでの雄の臭気は、壊れる寸前だった優菜の心と理性を完全にこそぎ落とし、ただただ匂いを嗅いでイキ狂うだけの雌犬に仕立て上げてしまった。

その後、優菜の顔で散々楽しんだ管理人は満足そうに息をつくど、脱いだ自分のトランクスにダメだらけの精液を大量に吐き出し、失神してひっくり返ったカエルのような姿で痙攣している優菜の顔に放り投げた。

「——お♡ おひゅ♡ ——??♡ あぎゅっ!?!♡♡ お♡っ♡♡ん  
ほお♡っ♡♡ くほおおおっ♡♡♡」

目をひっくり返らせ、口を輪にして舌をレロン♡ と投げ出し、カックカク♡ の腰、そして股から潮を吹き出して管理人を汚しながら、優菜は幸せそうに絶頂を繰り返していた。

### #3 黒髪ロング爆乳爆尻JKがエロ蹲踞ドスケベフェエラする話。

「ぶっぽっ♡ じゅる♡ ぐっぽ♡ ずろろっ♡ おっぐ♡ ぐえ♡  
ごきゅ♡ れろれろれろお♡ ふっ♡ じゅるるるるっ♡」  
薄暗い部屋を、品性の欠片もない音が響く。

「ぐっぽ♡ じゅっぽ♡ ぐっぽ♡ じゅっぽ♡ ぬっちよおお♡  
べろべろべろべろお♡」

玄関に腰を落とし、股と脚を限界まで開いた雌が、雄のちんぽにむしやぶりついている。

「んふっ♡ じゅりゅりゅりゅ♡ おぼお♡ んべっ♡ んべろお♡  
にゅろ♡ ちゅううう♡」

卑猥そのもののような爆乳をぶるん♡ ぶるん♡ と揺らしまくり、スカートの丈を押し上げてすぎて半分以上見えてしまっているドスケベな爆尻を媚びるように震えさせながら、優菜は一心不乱に管理人の極太ちんぽをしゃぶりまわっていた。

「ぐおっ♡ おえっ♡ おっ♡ うっ♡ ごっちゅ♡ ちゅご♡ ぐぼっ♡  
ぶびっ♡ ぶほほほほっ♡」

異常にエラの張ったカリ太ちんぽを、自ら喉の奥までぶち込んではいけないような音を、何の躊躇もなく廊下にまで響きそうなほどに立てまくる姿は、普段の伏し目がちで臆病な彼女とはとても似ても似つかない。

「ぶっぽ♡ ぶっぽん♡ れろお♡ んべえ♡ んぎゅ♡ おっ♡  
ほっ♡ ふおおっ♡」

喉をデカマラに犯され、顔をゆがませながらも、その表情は苦しそうなどころか、目をとろけさせて鼻ちようちんを作り、涎と先走りのブレンド汁で泡を噴きながら、甘イキを繰り返す。

「ふーっ♡ ふーっ♡ んふーっ♡ おっ?♡ んおっ♡ おっ♡

おっっ♡ ぶぎゅっ♡」

顎が疲れてドスケベフェラを止めれば、口内の大量の我慢汁と陰毛、精液がぎっしりと詰まっていそうな金玉から発せられる強烈な雄の性臭に神経が集中してしまい、それだけで優菜は下品な長乳首をさらに勃起させ、心底嬉しそうに腰をへっこへっこ♡ と揺らして管理人に媚びながら、びちゃびちゃに潮を撒き散らしてしまう。

今や優菜は、完全に管理人の都合のいいオナペットへと成り下がっていた。

優菜の恥ずかしすぎる痴態がばれ、管理人のちんぽの匂いだけで獣のような雄叫びをあげ、情けないにもほどがあるクソザコっぷりを曝け出してしまったあの日。

優菜の顔に己の精液を沁み込ませた下着を放り投げるといふ、弁舌に尽くし難い行為に及んだ管理人だが、なぜかそれ以上は優菜に対して何もせず、気絶した優菜がカエルのように伸びてイキまくる光景をたっぷり楽しんだ後、休憩室にある備え付けのシャワールームで彼女を綺麗にして、部屋に送り届けていた。

「あ……え……、あ、あれ……？」

自分のベッドの上で目を覚ました優菜は、もう何が何やら訳が分からなかった。

あれだけの事があって、どうして自分は普通に自室のベッドで眠っていたのか。なぜあれだけ汚された身体は、何事もなかったかのように清潔そのものなのか。

もしかして、あの出来事は質の悪い夢だったのか。例え夢だったとしても質が悪すぎるが。

あまりの落差に頭の処理が追いつかず、混乱の極みにあつた優菜だったが、既に遅刻ギリギリの時間であることに気づき、最低限の準備だけ整えて部屋を出た。

恐怖と不安と、夢であつて欲しいという期待がぐちゃぐちゃに頭の

中をかき回しながら、優菜はエントランスにある管理人室に恐る恐る視線を向けた。

おはようございます。お気をつけて。

怖いくらいにいつも通りの管理人が、いつもの人の良さそうな笑顔で、いつものように優菜の目をしっかりと見て挨拶をしてきた。

(やっぱり、夢……だったの？ う、うん、そうだよ、きつとそう。あの管理人さんが、あんなことするはず、ない、よね……?)

それから1週間、管理人には何の変化も見られず、いつも通りの日常が続いたことで、優菜はあれが本当に夢だったのだと思ひ込むことで心を保っていた。

「管理人さん、届け物ってなんだろう——う？」

あの夢と同じように、テレビドアホン越しに伝えられ、郵便受けを確認すると、中に何かが入っているビニール袋。

そして、それを開けた途端に漂う破滅的な雄の性臭が優菜の鼻を、脳を襲い——、

「——おっ？！♡ おうっ?!♡ ふぎっ?!♡ んぎゅっ♡♡ ——  
んっほおおおおおっ?!♡♡ こっこりえっ♡ あのときのお  
いいいっ♡♡ くっさ♡♡ きっっ♡♡ きっくうううっ♡♡♡」

それ以来、優菜は管理人の雄の匂いに異常な程の執着を見せるようになってしまった。

さらに、毎日管理人室に呼び出されるようになり、彼女の口はまるでオナホールのように扱われながら唇、舌、頬、喉、涎の使い方を散々に仕込まれ、ついでにフェラをするときはエロ蹲踞で雄を盛らせ挑発して媚びるドスケベお口マンコに調教されてしまっていた。

「じゅろぞぞおっ♡ めびゅ♡ めっほおっ♡ おぼっ♡ おっ?!♡♡  
♡♡ ごおおおええっ?!♡♡ ごきゅ♡ ごきゅ♡ ごっきゅ♡  
ちゆるるる♡ んっぽ♡♡ んれろお♡ ぐふっ♡ げえっぶ♡♡

か、管理人さん♡ ごめんいっぱいぬきました♡ ぜんぶのみま  
した♡ あー♡ ゆうな♡ ちゃんとおくちまんこできてますよね  
?♡♡」

管理人の腰に両腕をまわしてちんぽを貪り、下品極まりないげっぷ  
をしてまでザーメンを飲み干し、口を開け、舌を動かして全部飲めた  
とアピールする、ひたすら雄の性欲を煽る優菜。

自分の理想通りの雌に仕立て上げる征服感に大いに満足しながら、  
管理人はこの雌の被虐心を煽り、いつもの餌を与えてやるために口を  
開く。

「やつ♡ ちがう♡ ちがうの♡ ほんとはこんなこと♡ したくな  
いの♡ 管理人さんが脅すから♡ 私のドスケベオナニーボイス♡  
ばらまくって言うから♡ しかたないの♡ しょうがないの♡  
逆らっちゃだめなの♡♡」

管理人にとって優菜が都合の良い肉オナホであるように、優菜に  
とつてのあのデータも、最早管理人のちんぽをしゃぶり、ザーメンを  
飲んでイキ散らかすための、都合の良い言い訳でしかなくなってい  
た。

管理人は、全身余すところなく男の情欲を煽り、挑発し、ちんぽに  
くるこのドスケベ女子高生を壊れるまで犯し尽くしたかった。

だがまだ。まだ早い。この雌犬が自分から犯してくれと懇願する  
までは。

この我慢もまた楽しく、とっておきのスパイスに違いないのだ。

「だから管理人さん♡ つぎは何をすれば許してくれますか?♡」

## #4 黒髪ロング爆乳爆尻JKがパイズリしながら 長乳首で雌イキする話。

「へっ♡ へっ♡ 管理人さん♡ 優菜のだらしないおっぱい♡ ド  
スケベばいずり♡ 気持ちいいですか？♡ ね？♡ きもちい？♡  
こうやってずりゆずりゆ♡ たぱたぱ♡ たっぽたっぽ♡ おち  
んぽにきますか？♡ えへっ♡ うれしいです♡」

学校中の男子のオナネタであり、街中にいればあらゆる雄の視線と  
性欲を吸い寄せる優菜の爆乳。

白磁のように美しく、それでいてどこまでも下品。若く張りのある  
弾力は、歩くだけでぶるん♡ ばるん♡ といやらしく揺れ、胸の大  
きさとその品の無さに比例したのか、薄いピンク色の乳輪も特大サイ  
ズで、ぷっくりと膨らみを帯びた見事なまでのパフィーニップルが、  
淫蕩さをこの上なく際立たせる。

そしてなにより、厭らしく盛り上がる乳輪に隠れた陥没長乳首の存  
在が、まるで優菜をSEXと雄の繁殖欲の為だけにあるかのような錯  
覚に陥らせる。

「んふっ♡ ふーっ♡ おっふ♡ ふおっ♡ つ♡ か、管理人さんのお  
ちんぽの匂い♡ あいかわらざきっ♡♡ くっさ♡♡ 匂いで脳  
みそ犯されてまひゅ♡♡ ほっ♡ すう♡♡ つ♡ おっ♡？♡  
んおっ？♡ これいつく♡ いつぐう♡ ちんぽのにおいで即甘  
イキ♡ 腰へこして媚びる♡ お潮吹いちゃう♡」

腰を無様にイキ跳ねさせながら、まるで壊れた蛇口のように、優菜  
はおまんこから潮をぷしっ♡ ぷしゃっ♡ とひり出しては管理人  
の足を汚す。

管理人と初めて関係を持ったあの日と、1週間後に追い打ちを掛け  
られた出来事による強烈な性体験。その後も管理人の暴力的なまで  
の性臭に躡けられ、屈服し、散々己の雌としての立場をわからされた  
優菜は、こうして少し匂いを嗅いだだけで条件反射のように情けなく

イキ散らかすようになっていた。

何より救いが無いのが、優菜自身、このちんぽの匂いが好きで好きでしようがないという点に尽きる。

「んひゅ♡ すう〜っ♡ はあ〜っ♡ おつぎゅっ♡ ほっ♡  
ほっ♡ ほおおっ?♡ ご、ごめんない♡ ちゃんとぱいずり  
しましゅ♡ いっぱいしこしこ♡ 涎も♡ んべえ〜♡ れろお  
〜♡ だからあ♡ 優菜のおっぱいに管理人さんのくっさいおち  
んぽ臭♡ いっぱい擦り付けて♡ 洗っても落ちないくらいこ  
びりつけて♡ あっ♡ 我慢汁すっご♡ どぼどぼ出てる♡  
おっぱいぐつちやぐちや♡ これすっご♡」

甘イキの連続で白目を剥き、恥の欠片もなく鼻の下を伸ばしてちんぽの匂いを貪る優菜に、管理人が奉仕を催促する。

どこまでも堕ちていく破滅的な被虐心と快楽を享受しながら、優菜は主の命令に嬉々として応え、ただひたすらに媚びへつらっていた。そんなペットの姿に征服欲を満たしながら、それでもなお膨れ上がる優菜への歪んだ愛情に己を昂らせる管理人。

肥大していく数多の欲求を異常な自制心で飼い慣らしつつ、彼は生意気にも飼い主に対して要求してくるこの雌犬を、少しきつく躡けてやることにした。

「あっ♡ 管理人さん♡ 優菜のおっぱい使っていただけなんですか?♡ どうぞ♡ 優菜は♡ 管理人さんには逆らえませんか♡  
しようがないんです♡ 脅されて、仕方なくなんですよ?♡ ほんとなんです♡ だから♡ いっぱい♡ 気の済むまで♡ おっぱいをパンパンして——?」

少し優しくし過ぎただろうか。

管理人はそう考えつくつと、主人に対して随分と甘えたことをぬかす雌の下品な爆乳を、思いつき握り潰してやった。

「——ほっぎよおおおおっ?!♡♡♡ うっおっ?!♡♡ ふぎっ♡  
♡ ふんぎいっ?!♡♡ かっ♡ かなりにんさっ♡ おっ♡♡  
おっ♡♡♡ つつよ♡♡ ちからつよっ♡♡ おっほ♡♡  
おっぱいにぎるのつよいっ♡♡♡ ほおっ♡♡ つぶれるっ

♡♡ おっぱいつぶされりゅ♡♡ んほおっ♡♡♡♡

雄の大きくゴツゴツとした手で卑猥な乳を鷲掴みにされ、太く堅い指に万力の如き力で締め上げられた優菜は、激痛とそれを超える電撃のような快樂信号が一瞬で脳みそを直撃し、人間が出しているとは思えないような汚声で喘ぎ狂う。

「いいっ!?!♡♡ うっぎいいいっ!?!♡♡ こんどはシコシコ♡♡♡♡  
おっぱいしこしこおっ♡♡♡♡ やめっ♡♡♡♡ やめへえっ♡♡♡♡ つつ  
よ♡♡♡♡ きつく♡♡♡♡ おっ?♡♡♡♡ のびるっ♡♡♡♡ おっぱいの  
びるううっ♡♡♡♡ もつとすけべになりゅううっ♡♡♡♡ ふぎゅっ?♡  
♡♡ ふっほ♡♡♡♡ ふおおおっ♡♡♡♡」

管理人は腕に血管を浮かび上がらせながら、握る力はそのままに、優菜の爆乳をまるでちんぽでセンズリを扱くかのようにしごき始めた。

おっぱいをおまんこに負けず劣らずの性感帯に開発されてる優菜にとつて、この刺激と快感は優菜の頭の許容値を遥かに飛び越え、彼女の視界は真っ白に塗り潰されていった。

「くおおっ♡♡♡♡ あいつ♡♡♡♡ ふひっ♡♡♡♡ ひぎいっ♡♡♡♡ おっ?  
♡♡♡♡ おしだされりゅ♡♡♡♡ わらひの♡♡♡♡ なっさけないがちく  
び♡♡♡♡ くそぞこちくびい♡♡♡♡ ふっぎゅ♡♡♡♡」

興奮と絶頂で濃いピンク色に染まった乳輪から、ぷりゅん♡♡ と音を立てたかのように、乳首と呼ぶには随分と大きく長い、淫靡な肉芽が飛び出す。あまりの刺激に目を白黒させながら、優菜は果てしなくイキ狂い、無限に潮を吹き続ける。

「でたあ♡♡♡♡ でちゃったよお♡♡♡♡ はずかしがりやのちくび♡♡♡♡  
おっひ♡♡♡♡ くうきになでられていくっ♡♡♡♡ ぶるぶるするだけで  
いっぎゅっ♡♡♡♡ んほっ♡♡♡♡ おっおんっ♡♡♡♡」

普段が外気に触れていないのと、これまでに散々管理人にいじられ、抓られ、こねられ、潰され、調教し尽くされた乳首は、優菜が震えて先っぽをぶるん♡♡ とさせるだけで達してしまうほどのクソザコっぷりであった。

「ひー♡♡ ひー♡♡ し、しぬ♡♡ おっぱいだけでしんじや——んお

おおおおつつ?!?♡♡♡」

漸く優菜が一息ついたところを見計らって、管理人は一切の容赦なく、その情けない乳首を思いつきり抓りあげた。

クリトリスも同然な性感帯を捻り潰され、目をぐるん♡ と裏返し、口で輪っかを作って舌を限界まで放り出し、気が触れたかのように腰をへっこへっこ♡ と振りまくりながら、優菜は地獄の快楽を味わっていた。

「んぎゃっ?!?♡♡♡ ひっぎ♡♡♡ ふぎゅ?♡♡♡ んおっ♡♡♡ つほ♡♡♡ ほごっ♡♡♡ ふひゅっ♡♡♡ くおおっ♡♡♡ いっぐ♡♡♡ いぐいぐいぐいぐ♡♡♡ いっでる♡♡♡ ずっひよいつへるのにひい♡♡♡ またいつっつぐううううっつ?!?♡♡♡」

優菜が汗という汗を全身から撒き散らすのを楽しそうに眺めながら、抓りあげている長乳首を今度は引つ張りまわし、バッキバキに昂ったちんぽをみっちり詰まった乳肉に叩きこんでいく。

「くっほおおおっ?!?♡♡♡ か♡♡♡ かなりにんしゃん♡♡♡ やめっ♡♡♡ ふぎゅ♡♡♡ やめへっ♡♡♡ ぐおっ♡♡♡ うごいちやらめ♡♡♡ おっひよっ?♡♡♡ ひっばっちやらめえ♡♡♡ ちくびとれりゅ♡♡♡ おっばいまんごごわれるうううおっ♡♡♡ つっ♡♡♡」

狂ったように頭を振り乱し、獣も逃げ出すような雄叫びをあげ続けながら、優菜はひたすら雄の猛り迸る性欲を受け止め続ける。

——管理人が優菜の爆乳を真っ白く染め上げる程に射精しまくった頃には、全身が空気に触れるだけでカックカク♡ にいき跳ねて潮を吹く、無様極まりないオナドールが床に転がっていた——。

## #5 黒髪ロング爆乳爆尻JKがガニ股ドスケベポーズで尻コキされる話。

「んぼっ♡ ぐぼっ♡ じゆる♡ じゆるろろお♡ れろれろろお♡  
♡ むっちゅ♡ むっちゅ♡ ちゅぷ♡ ちゅろちゅろちゅろおん♡  
♡ ごっちゅ♡ おぼっ♡ んぽおおっ♡ ごっちゅごっちゅごっちゅ♡  
♡ ちゅごっちゅん♡♡♡ おっ♡ ふほおおおっ♡♡♡」

まだ陽も落ちていないこの時間。彼は当然勤務中なのだが、帰って来たと思っただけなんの遠慮もためらいも躊躇もなく管理人室に入り込み、股の間に滑り込んで蒸れたちんぽを引き摺り出し、その濃厚な性臭に感極まった吐息とイキ潮を漏らしてむしゃぶりついてくる彼女に、管理人は少しやり過ぎたかと後悔するほど、優菜は骨の髄までこの雄との淫行にはまり込んでいた。

彼女がここまでこの冴えない中年の男に入れ込んでしまったのは、優菜にとつて、この男が父性を感じさせてくれる初めての年上の男性であることも大きかったのかもしれない。

優菜の父は幼い頃から優秀で容姿も整っており、頭脳明晰スポーツ万能な麒麟児だった。そしてまた、プライドが異常なまでに高い男でもあった。そんな男にとつては結婚も、妻も娘も、己のステータス以外の何物でもなく、妻——優菜の母も似たようなものであった。

優菜は容姿に関して言えば、両親の良い所を何一つ欠かす事無く受け継いでいたため、この一点に関してはまさに非の打ちどころがなかった。

問題は勉強の方だった。

優菜は、彼女の両親が望むほどの頭脳を持ち合わせてはいなかった。

誤解のないように言えば、優菜は世間一般で見れば普通に成績優秀な優等生である。現に都内でも有数の進学校に通えているのだから、

それは明らかだ。まあ、今は勉学を恐ろしく疎かにしてはいるが、それでも最近（管理人の叱責という名のお仕置きもあって）授業中ではならんとか内容が頭に入るようにはなっていた。たったそれだけでも優菜は、全国的に見ても高レベルな授業内容についていくことができる知性を持っている。

だが、彼女の両親から見ればそれは、あまりに低次元な代物だった。よって彼らは早々に優菜の事を見限っており、優菜は父と母が自分に向けて笑顔を見せている所など、ついぞこれまでの人生で見たことがなかった。

父親以外の周囲の男達、接点があると言えば学校の教師だが、そんな彼等も教職者とは言え所詮は男。優菜を見る目は欲望に濁り、彼女が安心できる相手とは到底言える者でもなかった。

「ぐっぷ♡ ふお、っ♡ ぐえ♡ ぐっえ♡ ぐっぼん♡ ぷおっ♡ くっほお♡♡ げええっぷ♡♡ 管理人さん♡ 管理人さん♡ おちんぽ♡ おちんぽお♡♡ んっほ♡ こんなにおつきくなりました♡ 優菜♡ ゆうなえらいですか？♡ 前より上手になつてますか？♡ えへっ♡ えへへっ」

この管理人も、優菜を脅して関係を迫ったような下賤な輩に過ぎない。見るだけで何もしない他の男達よりもよっほど質の悪い男だ。

しかし、元来優菜は、生真面目で従順な娘だった。物心がついて此の方、当然の如く彼女は、両親に褒められたことが一度ですらなかった。

幼少期から思春期にかけて、人間の根本的人格を形成する最も大事なその時期に、実の親に認められたことも笑顔を向けられたことも無いという事実は、まさに致命的であった。

この、子ども達の自己肯定力の欠如にともなう帰結は、主に二つ。親の気を惹くために非行に走るか、従順な振りをして殻に閉じこめるか。

優菜は完全に後者の典型例だった。

例のボイスレコーダーの件も、元はといえば自分があんな不用心な

ことをしなければ済んでいたのに、などと考えてしまいうくらいには自虐思考で、奥手で、自信なんて欠片もない、相手の方が悪いなどは考えもしない、己の殻に閉じこもりがちの、触れればすぐに壊れてしまいそうな、小さく気の弱い少女でしかなかった。

「管理人さん♡ 次は♡ えへっ♡ 今日は何をすればいいですか？♡ 優菜♡ なんでもしますから♡ 頑張ります♡ ドスケベなこと♡ もっともっと覚えます♡ だから♡ だから♡ もっと優菜を見て♡ 感じて♡ いっぱい愛して♡ たくさんたくさん♡♡♡ 可愛がつてください♡♡♡」

故に優菜は、この男のことを怖いと思うことはあつたが、憎いと思つたことはなかつた。

むしろ、普段は優菜の淫猥な身体に目もくれず、しっかりと彼女の目を見て話してくれる貴重な存在とさえ認識していた。

そして何より、優菜が自分という存在を思い切り曝け出すことのできる、そして、そんな彼女を多分に他意はあれど、それでも褒めるときは本心から優しく、そしてたつぷりと愛してくれる、唯一の他人だった。

優菜は、この男がもたらしてくれる至上の快樂に完全に依存し、溺れている。無論である。

だが、それと同じくらいに彼女は、この腹の突き出た冴えない中年男にも、どつぷりと依存しているのだった。

「ほっ♡ ほっ♡ か、管理人さん♡ こ、この格好♡ だめです♡ いひっ♡ えっち♡ こんな♡ 下品すぎます♡ おっっ？♡ くおっ？♡ っ？♡ 見られていぐっ♡ ドスケベわんちゃんガニ股ぱーず♡ おっっほっ♡♡♡ 管理人さんに視姦されていぎゅっ♡♡ 無様に腰へこしまくっていっぎゅううん♡♡♡」

なんだかんだで優菜に甘い管理人は、現在巡回中と立札をかけて最近ヤリ部屋と化してる奥の休憩スペースに移動していた。

そこで優菜に四つん這いになるよう命じ、それからさらにそのデカすぎる淫尻を限界まで持ち上げさせ、つま先立ちの脚を思いつきり開かせて無様極まりないドスケベポーズを堪能していた。

そして、見られただけで勝手にイキ散らかす雌犬に、ちよつと最近この娘に対して無意識に甘すぎやしないか、という苛立ちも乗せて、絶頂してぶるんっ♡ ばるんっ♡ と揺れるむっちむち♡ のケツを――

「ご、ごめんなしやい♡ またかつへにいつちやいまひ――つたあああつ?!?♡♡♡♡」

――思いつきり引っ叩いてやった。

「うおおっ?!♡♡♡♡ ぴっ♡♡♡♡ ぐびっ♡♡♡♡ へっ♡♡♡♡ へっ♡♡♡♡ ぴぎゅっ?!♡♡♡♡ んによおおおっ?!♡♡♡♡ かつ♡♡♡♡ かんりにんしやんっ♡♡♡♡ たたきすぎ♡♡♡♡ ひっ♡♡♡♡ ひひっ♡♡♡♡ いだっ♡♡♡♡ いだいいいいっ♡♡♡♡ ひぎいっ♡♡♡♡」

平手でぶつと綺麗に波打つ、極上の爆尻。とても女子高生が持つべきではない代物を己の自由にするという達成感と、尻だけではなくだぱん♡ だぶん♡ と暴れる爆乳、打てば響く優菜の嬌声に、叩くたびにぶしっ♡ ぶしよっ♡ と吹き出す潮が面白く、管理人は愉悦に心を躍らせながら優菜の尻を虐め続ける。

「くおおっ?!♡♡♡♡ ぐぎっ♡♡♡♡ ひどいい♡♡♡♡ こりえ♡♡♡♡ こんにやひどいこと♡♡♡♡ いたいのにい……♡♡♡♡ んおっ♡♡♡♡ たたかれるときもちいの♡♡♡♡ おっ?!♡♡♡♡ ほひゅっ♡♡♡♡ しきゅうもゆすられて♡♡♡♡ んほお♡♡♡♡ きもちいいのおっ!♡♡♡♡ おっへ?!♡♡♡♡」

まるで出来の悪いおもちゃを扱うかのような仕打ちに脳みそをふやけさせ、舌をだらしなく垂らし、端正な顔を涎と鼻水で汚しながら絶頂しまくる優菜。

散々に叩かれ続けたせいで、ただでさえ大きな爆尻は真っ赤に染まって腫れ上がり、へっこへっこ♡ と情けなく腰を揺すりながらも、優菜は命じられるままに下品なガニ股の体勢を必死に維持していた。

「ふーっ♡ ふーっ♡ かんりにんしやん♡♡ つらい♡ つらい  
のお♡♡ このぽーじゅ♡♡ おしりもひりひり♡♡ えへっ♡♡  
きつつ♡♡ で、でもお♡♡ きもひいいのお♡♡♡♡」

ここまでされてなお、幸せそうに顔をト口けさせる優菜。

そんな優菜の淫靡さに充てられたのか、管理人はビキビキにいきり  
立ったデカマラを優菜の爆尻の間に沈みこませると――、

「ふおっ?..♡ あっっ♡♡ おしりあっづい♡♡ これ♡♡ おちん  
ぽ♡♡ かんりにんさんの♡♡ ぼっきばきちんぽお♡♡ うお  
っ♡♡ はさんでる♡♡ ひりひりしゅりゅ♡♡ わらひのおし  
り♡♡ おちんぽさんどしちやってる♡♡♡♡ おおっっ――?♡♡  
♡」

——そのままぐっちゅ♡♡ ぐっちゅ♡♡ と尻扱きを始めた。

「——くおおおっっ?!♡♡ おっほ♡♡♡♡ ほっひゅ?♡♡♡♡ お、おし  
り♡♡ けっっ♡♡♡♡ ぐちよぐちよ♡♡♡♡ おちんぽでけずられてる  
♡♡♡♡ っほ♡♡♡♡ おほおお♡♡♡♡ びごっ♡♡♡♡ びごっごりごりい  
♡♡♡♡ しっぽもけずれてゆの♡♡♡♡ きつつ♡♡♡♡ これもぎちゅいい  
♡♡♡♡」

柔らかで肉厚のむち尻肉が管理人の極太ちんぽですら飲み込み、動  
くたびにぐにゅぐにゅ♡♡ と卑猥に形を変える爆尻を楽しむ。

「ほっ♡♡♡♡ ほっ♡♡♡♡ きっく♡♡♡♡ しりこききっく♡♡♡♡ うおっ  
?♡♡♡♡ おし♡♡♡♡ おしりのあにや♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡ おちんぽの  
おなかでこりこり♡♡♡♡ っいっ♡♡♡♡ こりゅこりゅされてりゅ♡♡♡♡  
これもしゅご♡♡♡♡ ふおっ♡♡♡♡ けちゅあにやきっくう♡♡♡♡」

ちんぽが優菜の尻を往復するたびに、興奮してぷっくりと膨らんだ  
ケツ穴がちんぽにちゅうちゅ♡♡ と吸い付こうとする。

「おっっ?..♡♡ うそっ♡♡♡♡ ケツ穴媚びてる♡♡♡♡ ひっ♡♡♡♡ うんち  
のあななの♡♡♡♡ きたないの♡♡♡♡ えへっ♡♡♡♡ おちんぽに  
ちゅう♡♡♡♡ おちんぽきす♡♡♡♡ ケツマン媚びちやってるよお♡♡♡♡  
んほおおおっ♡♡♡♡」

本来は排泄の為の穴ですら見境なく媚びる事実が、優菜をさらに被  
虐に煽り、淫靡さに拍車をかけていく。

「くおっ♡♡♡ はやい♡♡♡ おちんぽぴすとん♡♡♡ おっ♡♡♡  
しりこきはやいの♡♡♡ ふおっ♡♡♡ おちんぽいく?♡♡♡ お  
っ♡♡♡ せーしでる?♡♡♡ かんりにんさん♡♡♡ ゆうなのげひ  
んなしりこき♡♡♡ きもちい?♡♡♡ えへっ♡♡♡ うれしい♡♡♡  
だして♡♡♡ いっぱいっばい♡♡♡ ほっ♡♡♡ ほっ♡♡♡ どすけ  
べじえーけーにぶちまけて♡♡♡」

煽られている。

生意気にも主人を煽る雌犬をわからせなければならぬ。

そう心に決めた管理人は、限界まで押し留めていたどろっどろの精  
子を――、

「――ほへっ?」

クソ生意気にも物欲しそうにパクパク♡ とひくついているアナ  
ルに亀頭をぶち込み、大量に流し込んでやることにした。

「おひよ?♡♡♡ ――っおっ♡♡♡ ぎっ?!♡♡♡ ほっぎよお  
おっおおっ?!?!♡♡♡ けっけっうっ♡♡♡ ぐおっ♡♡♡ あな  
るっ♡♡♡ ケツマンコひろがっつてりゅっ♡♡♡ ぎーめんおなかに  
どぼどぼぐるううっ?!♡♡♡ おっひよおおおっ♡♡♡ いっ  
ぎゅ♡♡♡ こんなのいつぐ♡♡♡ んっほおっ♡♡♡ おなかは  
れっしゅりゅうううっ♡♡♡」

挿入時にぼちゅっ♡♡♡ と音がし、次から次へと精液を排泄腔に排  
泄していく。

いきなり亀頭をアナルに押し込まれ、カリ首に入り口をこそぎ落と  
されながら、それでも腸壁がちゅうちゅう♡♡♡ とカリ首に吸い付き、  
腹が膨れる程の精液を流し込まれ続ける。

目をぐりん♡♡♡ とひん剥いて、伸ばした口から舌をぴんっ♡♡♡ と突  
き出し、全身からあらゆる体液を撒き散らしながらも、四つん這いの  
ガニ股ポーズだけはやめない優菜。

長い長い射精が漸く終わった頃には、腹をカエルか妊婦のように膨  
らませ、それでも真っ赤な爆尻を持ち上げたまま、無様に開ききった  
ままの股の間から精液を排泄する優菜が、幸せそうに失神していた。

## #6 黒髪ロング爆乳爆尻JKがドスケベアナル舐めパイズリする話。

「管理人さん、喜んでくれるかな。喜んでくれるよね。お弁当、いつも綺麗に食べてくれるし、たくさんおいしいって言ってくれし」

近頃優菜は、管理人に毎日のように手作り弁当を差し入れていた。ニンニクやら根菜やら肉類やら、特に精力がつきそうな食材をメインに、しかし栄養バランスもしっかりと考えられた、優菜特製のお弁当を。

事の発端はある日の事、やつとこさまンションに帰宅したと思ったら、なにやら気難しそうに紙切れと睨めっこをしていた管理人の股ぐらに、いつものように速攻で潜り込んではおちんぽに吸い付いて舐りまわし、しゃぶりついていた時の事――。

「んっふうっ♡ ちゅぷ♡ ぐちゅ♡ れろれろろ♡ ちゅぴ♡

おっっ♡ ふおっ♡ ぶっぽ♡ ぐっぽ♡ じゅろろろお♡

ふあんりひんひゃん？♡ ふあっひふあらひゃひれひゅんれふか

?♡」

相変わらずの周りに対する警戒心のなさに管理人が苦言を呈しつつ、モノを口に入れたまま喋るんじゃないやありません、などと至極真つ当なことをこの男の口から聞いた優菜は、なにやらおかしくなっていくすすと笑ってしまった。もちろんちんぽを啜えながら。

そんな小娘に溜め息を吐きつつも、管理人は珍しく困ったように笑い、彼女に持っていた紙切れを見せる。優菜は亀頭をちゅっぽちゅっぽ♡ と舐めしゃぶりながら、書いてある文字と数字を器用に読み取っていく。すると次第に口の動きが緩慢になっていき、終いにはフェラチオをするのも完全に忘れて内容に釘付けになっていた。

それは管理人の健康診断書で、殆どの数値への評価が軒並み悪く、下から数えた方が早い有様だった。この男の健康状態の悪さが、一目

で理解できるほどには酷いレベルの――。

「こんなためです管理人さんっ!! ――あ」

己の健康診断の結果を見せると完全に沈黙してしまつた優菜に不覚にも戸惑っていたら、今度は急に立ち上がつてとんでもない大声をあげて詰め寄ってきたのでかなりビビつた。目がマジだった。ついでに優菜自身も相当ビビつた。エッチをしている時以外で、自分がこんな大声を出せるものだとは、思つてもいかなかったのだから。

「あの時の管理人さんの顔、可愛かつたなあ。写真、撮っておけばよかった」

最近の優菜にしては非常に珍しく、帰つて来て管理室に直行するのではなく、弁当箱だけ受け取つてすぐ自室に戻り、少女らしく可愛らしいピンクのエプロンを制服の上に身に纏い、可視化できそうな幸せオーラを部屋中にばらまきながら料理に勤しんでいた。

手際よく下拵えをこなしながら、優菜は自分も随分と変わったと実感していた。

こうして料理をするのだから、本当は嫌いだった。

まだ中学1年の頃、家庭科で料理実習があり、優菜の組はクッキーを焼いた。

評判は上々で、いつも帰りの遅い両親にこれなら褒めてもらえるかもしれないなどと、幼稚な思考に浮かれて帰宅し、ついでに軽く食べられそうな夜食まで用意して待っていた。

帰つてきた父親に手渡した時の第一声は、そんなことをしている暇があつたら勉強しろ――。あの時の父の目を、優菜は一生忘れられないだろう。

優菜は自室で静かに泣いた。悲しくて辛くて、なにより父に余計に嫌われたのが怖くてしようがなかった。

そんな消し去ってしまいたい過去を持つ彼女だが、管理人の為に一念発起して料理に励み、そのスペックの高さを遺憾なく発揮し、瞬く

間にモノにしていた。

もう二度と誰かの為に料理なんてできない。そう思っていたのに、彼の為を思えばなんら苦にならず、むしろ栄養バランスを考え、エツチの時にさらに激しく可愛がってもらえるように創意工夫するのが楽しく、そしてなによりも、毎回おいしいと言ってくれるのが最高に嬉しかった。

そんな優菜は、もう弁当だけでは飽き足らず、自室で夕食も振る舞うと管理人に迫ったのが昨日。

これまで散々管理室とその奥で優菜にアレなことを仕込んできた割に、優菜が誘っても、管理人は彼女の部屋に入るのは拒んできていた。

人目につくとまずいだのなんだののたまい、優菜がそもそも管理室でだって十分やばいだろう、バレそうになっても自分が上手いこと言うから大丈夫だと言いついて聞かせた。いや、言いくるめた。監視カメラにはダミーも仕込んでおいた。己の悪知恵の逞しさに驚愕した。管理人も驚愕した。

そもそも管理室にあっても危ない場面は何度かあったのだが、その度に優菜が無駄にそのスペックの高さを発揮して難を逃れていた。あることないことを？八百と並べ立て、まくし立ててはうやむやししていた。

あの時も、自分はこんなにも口の回る人間だったのかと、内心かなり驚いていた。管理人も驚いていた。開いた口が塞がらないくらいには。

そして冒頭のセリフに戻るのである。

味も栄養バランスもばっちり。特に精力増強に関しては抜かりない、渾身の出来だった。

「管理人さん、早く来ないかな……♡」

「管理人さん♡ 管理人さんのお尻の穴♡ ぷつくりとしててえ♡  
はあく♡ えつろ♡♡ えへっ♡ すつごくエツチです♡ それ  
じゃあ…：食べちゃいますね♡ んべえ♡♡ んれろお♡♡  
んぶう♡♡ ちゅぶ♡♡ ちゅれろお♡♡ おっ♡♡ んっほ♡  
♡ のうみそくるう♡♡」

食事も終え、期待通りの反応を管理人から得た優菜は、気分も最高潮に彼を風呂に誘い、彼女の目の前で四つん這いの恰好をとらせていた。

当の本人は、あとでめちやくちやのグチャグチャにしてやるこのドスケベ雌め、と内心でのたまいながらも、

『管理人さん♡ 管理人さん♡ えへへっ♡ アナル舐めぱいずり♡  
したいんです♡ 管理人さんに喜んでもらえるように♡ いっぱ  
い勉強しました♡ 練習もいっぱいしました♡ 良いですか？♡  
良いですよ♡ お風呂に行きましょう♡ お湯も沸かせてありま  
すから♡♡』

などとまくし立てられ、しかも親指と人差し指で口の前に輪っかを  
作り、瑞々しい唇を突き出し窄め、なっがい舌をれつろれつろお♡♡  
と舐める仕草を見せつけられてはたまったものではなかった。

ついでに恐ろしく旨い飯を食わせてもらった後である。管理人の  
胃袋は、着実に優菜に武力制圧されつつあった。

「んぶちゅう♡♡ ちゅろ♡♡ ぶっちゅ♡♡ れろれろれろおん  
♡ おっ♡♡♡ ほおっ♡♡♡ つ♡♡♡ しゅつご♡♡♡ かんりに  
んさんのおしり♡♡ あにやる♡♡ けちゅあなあ♡♡ えつろ♡  
♡ おっ♡♡♡ おいし♡♡♡ おいひいのお♡♡♡ んぼお♡♡♡ ふ  
おっ♡♡♡ ずろろろおっ♡♡♡」

目に♡マークを浮かべ、まるで憑りつかれたかのように管理人のア  
ナルにえぐいディープキスをしまくる優菜。

雄の尻に美しい顔を埋め、陰毛が口や鼻に入ろうと一切気にせず、  
口に含んではちゅうちゅ♡♡ と吸い付き、入り口を舐め回し、長い  
舌で腸壁をこそぎ落とすかのようにねぶりながら。恍惚とした表情

でござ奉仕を続ける優菜。

「ちゅっぽ♡♡♡ ちゅっぽ♡♡♡ んべろお♡♡♡ ほっ♡♡♡ んほおっ♡♡♡ すっご♡♡♡ これすっご♡♡♡ あたまとしきゆうにもきゅんきゅんきちやう♡♡♡ あっ♡♡♡ おちんぽもですよね♡♡♡ はい♡♡♡ 優菜の下品でだらしないおっぱい♡♡♡ 管理人さんに伸ばされちやった長乳オナホに♡♡♡ いっぱいパンパン♡♡♡ ぴすとんください♡♡♡」

自分のアナルを品性など微塵も感じない汚声と水音とともに蹂躪され、怒りと天上の如き快樂、さらには優菜の媚びまくりのトロ声に挑発され、管理人は己の股下に用意された極上長乳マンコに容赦なくぶち込んでいく。

「あぎゅ♡♡♡ ほっぎ♡♡♡ んぶふう♡♡♡ じゅぞぞぞ♡♡♡ んぼお♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ むっふう♡♡♡ ぬっちよおおっ♡♡♡ んっべ♡♡♡ にゆるん♡♡♡ じゅぼぼおっ♡♡♡ んっほおお♡♡♡ これきつくう♡♡♡」

差し出したおっぱいまんこをぐっちやぐちや♡♡♡ に扱き捨てられ、雄のケツ穴を顔面に押し付けられ、人間の出してはいけない音を風呂場に響かせながらむしゃぶりつき、エロ蹲踞のガニ股から延々とイキ潮を撒き散らす優菜。

「ふおっ♡♡♡ おっ♡♡♡ べろん♡♡♡♡♡♡♡ べっろ♡♡♡♡♡♡♡ んべろおおん♡♡♡♡♡♡♡ くおっ♡♡♡ ぶっぽ♡♡♡♡♡♡♡ ぶっぽん♡♡♡♡♡♡♡ おっふう♡♡♡♡♡♡♡ 甘イキ♡♡♡♡♡♡♡ ずっとあまいきしてりゅ♡♡♡♡♡♡♡ おっおっ♡♡♡♡♡♡♡」

優菜が甘イキするたびに胸を抑える力に絶妙な強弱がつき、乳オナホを犯す極太ちんぽを射精へと追い立てる。

あまりの快樂に獣のような唸り声をあげながら、管理人は一心不乱に腰をふり、優菜の顔でケツズリしながら欲望を爆発させた。

「ふおっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっぎゅ♡♡♡♡♡♡♡ んほおお♡♡♡♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡♡♡♡ あぢゅい♡♡♡♡♡♡♡ ちちまんこあっづ♡♡♡♡♡♡♡ にんしん♡♡♡♡♡♡♡ おっぱいはらむう♡♡♡♡♡♡♡ ぐぶおおっ!?!♡♡♡♡♡♡♡ きつつ♡♡♡♡♡♡♡ いきできな♡♡♡♡♡♡♡ ほっぎよっ♡♡♡♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡♡♡♡」

っ?♡♡　　っ♡♡♡」

一度射精したくらいでは到底収まらず、優菜の顔面を尻で壁に押し付け、全力でだらしない長乳を押し潰しながらその柔肉をちんぽでぶち抜きまくる管理人。

尻をつき、脚を放り出して、管理人の尻と壁に顔を潰され、窒息で死にかけながらも優菜は腰へコイキが止まらず、幸せそうに雄のアナルを舌でほじくり、舐めしゃぶり続けていた。

## #7 黒髪ロング爆乳爆尻JKがドスケベセックスする話。

お互いに休日である今日、事前に朝から部屋に招かれていた管理人を玄関で迎えたのは、オープンバストのスケスケレオタードに身を包んだ優菜だった。

色は清楚な純白。だが、その色のイメージからは程遠い、セックスアピールに過ぎる淫蕩極まりない装い。弄られ過ぎてだらしく伸び、それでも張りを失わない長乳を一切隠さず、下乳の部分にのみ胸を盛り強調するようカップが配されており、ぷっくりと膨らむ乳輪にはハート形のニップルシールが貼られているがその全てを覆うことができず、ドスケベ爆乳っぷりに拍車をかけてしまっている。レオタードなのでカップからショーツまでが繋がっており、腰の両側は細い紐で結ばれ、あろうことかオマンコとアナルの部分には切込みが入っており、本来隠すべき役割の下着を、ただ雄の繁殖欲を煽り倒す為だけの、極上のスパイスへと仕立て上げていた。

普通に制服を着ているだけで周りの雄を勃起させる優菜がそんなモノを身に着けたらどうなるか。あまりにも淫奔なその姿。管理人は呆然と優菜の淫乱ドスケベボディに魅入りられながらも、ズボンの上からでもはつきりわかるくらいに凶悪デカマラをギンギンにいきり立たせ、睨丸は全力で精子を生産し続けていた。

そんな意中の雄の有様に随分と気を良くしたのか、普段の人となりからは想像もつかないほどに妖しく微笑み、口元を歪め、唇を舌でなめずる。淫靡に全身をくねらせながら腰を深く落とし、ゆっくりと脚を限界まで大きく開いていく。

「おはようございます管理人さん♡ どうですか？♡ この恰好♡

管理人さんが躡けた♡ 淫乱JKのドスケベランジェリーショーですよ♡ えつろいですか？♡ ちんぽにきますか？♡ えへへっ♡」

ショーツ部分の切れ目から顔をのぞかせる、既にぐちよ濡れのおま

んこを管理人に見せつけながら、誘うようにくいつ♡くいつ♡と腰を上下に揺らし、ちんぽを挑発しまくる。

「あっ♡もうぱんっぱん♡勃起ちんぽ♡すごいです♡かつこいいです♡えへっ♡管理人さん♡優菜♡今日はもう我慢しないって決めてたんですよ♡」

まるで雄を喜ばせるために、セックスするためだけに生まれてきたような身体を、管理人の見下ろす先で淫らに躍らせながら、愛らしく小さな顔を傾げて媚びていく。

「今日はあ♡一日中♡朝から晩まで♡管理人さんのえつぐいカリ高極太おちんぽでえ♡めっちゃくちやに♡らぶらぶレイプ♡♡してください♡♡ゆるしてって言っても♡♡ぜったいやめないで♡♡失神してもオナホとして使って♡♡管理人さんの濃ゆくてくっさいザーメン♡♡子種♡♡孕ませ汁う♡♡子宮パンパンになるまで排泄してえ♡♡♡♡」

天使のような可憐で可愛い優しい優菜。その口から飛び出してくる、全力で雄に媚びて媚びて媚びまくる、ギャップというには限度を超えた淫語の数々。

その全てが管理人の脳を揺さぶり、心を乱し、既に爆発寸前のちんぽをさらに膨張させ、睾丸に蓄えられた精子をイライラさせる。

「あはっ♡♡管理人さん♡♡やっと♡♡やっと犯してもらえますね♡♡優菜♡♡うれしい♡♡はやくっ♡♡はやくおちんぽぶち込んで♡♡処女膜破って♡♡完っ全に管理人さんの女にし——ふごっ?♡おっ?♡♡??♡♡——ふんぎゅううううっ?!♡♡おっふ♡♡うっおっ♡♡おっ♡♡おっ♡♡んっほおっ?♡♡♡♡」

あまりのクソ生意気な雌ガキっぷりにブチ切れた管理人は、1周どころか4周5周と巡りに巡って却って冷静になっていた。優菜の鼻の穴にイライラMAXのちんぽを擦り付け、大量の我慢汁を流し込みながら。

——このクソザコマンコをわからせる。管理人の思考はただただそれだけであった。

「ふうっ♡ふっ♡ぐむっ♡ひゅ♡ふひゅ?♡♡っお”お”  
♡♡ふうんっ♡♡こほっ♡♡ひゅー♡ひゅー♡すんっ  
♡♡くんっ♡♡むお”っ?♡♡ふほっ♡♡ほっ♡♡ほ  
ひよおっ♡♡」

目隠しされ、ギャグボールを噛まされ、淫靡なランジエリーを身に纏い、ベッドに両手両足を縛られた優菜が、その卑猥な肉体を惜しげもなく晒し悶え、苦しきすら快楽に変換して発情していた。

だがイケない。あれから甘イキ軽イキはすれども、優菜の大好きな深い深い気が飛びそうな絶頂にまでは達していなかった。

今朝、頭のネジがぶっ飛んで散々つばら挑発した優菜は、これでも裸足で逃げだすぐっちよぐちよ♡な交尾ができるかと踏んでいた。

管理人は、優菜が煽れば煽るほどにその内にある獣性を発揮し、発狂しそうになるほどの快楽を与えてくれると深く学習していたからこそ、今朝もそうしたのだった。

だが、結果はこの有様だ。

管理人は怖いくらいに感情をなくして目を据わらせ、ちんぽの匂いで優菜を骨抜きにするとこうしてベッドに縛り付け、視覚を奪い、声を奪い、乳首とクリトリスに極微弱にしか震えないローターを仕込んで何も言わなくなってから、ひたすら我慢汁を垂れ流し続けるちんぽを鼻に押し付けられていた。

どれだけ時間が経ったのか。顔と上半身を我慢汁でべつとべとにされ、腰を持ち上げてはカックカク♡にへこらせながら、優菜は発狂寸前にまで陥っていた。

（くほおお”っ♡♡つらい♡♡もうほんとにつらいのお♡♡いきたいっ♡♡お”っ♡♡こんなかるいのじゃなくて♡♡もつとやばいの♡♡うお”っ♡♡えっぐいのがいいのお♡♡かんにんさん♡♡おねがいしますう♡♡ひっ♡♡たすけて♡♡







第2章 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキをちんぽ臭で屈服させたりする話。

#1 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキをちんぽ臭で屈服させる話。

「えー、やだよママ。」

なんでこんなおじさんと一緒にいなきやいけなの?」

「ダメよみゆ、ちゃんと言うこと聞きなさい。」

前から何度も言ってるでしょ? ママ、今日から婦人会の旅行に行くって。

パパもずっと出張でいないんだから、一人になんてしておけないわ」

「二人で大丈夫だもん。ていうか、こんなおじさんと二人きりにする方がおかしいでしょ! 変だよ! みゆが襲われたらどうするのママ!」

「なんてこと言うのよこの子は……。本当にごめんなさいねオーナーさん、思春期なのかませちゃって。みゆだって、凄く優しい人だって知ってるでしょ? もっと小さいときはたくさん遊んでもらってたじゃない」

「そんなの知らない。みゆ覚えてないもーん」

なにやら朝からもめているのが、目の前の天音親子。

見るからに穏やかそうなたれ目に、透きとおるかのように美しい肌、ゆつたりとウェーブのかかった艶のあるセミロングの黒髪、衣服を窮屈だと押し上げる程に自己主張する胸と尻。

夫が度々の出張で長期間家を空けることがしょっちゅうなので、女手一つでやんちゃな娘の面倒を見ている、天音ゆみ。

生意気そうな釣り目気味の大きな瞳と、鼻立ちの整った可愛らしい小顔、活発な印象を与える栗色のツインテール、まだ○学5年生でありながらもそれなりに膨らんでいる胸と、それと比べて随分と豊かに

実ったむつちりとした尻と太ももの持ち主であり、学校でも人気者の天音家の一人娘、天音みゆ。

そして、この一家の部屋があるマンションのオーナーである、少々腹の膨らみが気になりだした、とてもイケメンとは言い難い中年のおっさん。見た目はともかく、自分のマンションの住人とはコミュニケーションを欠かさず逐一気に掛ける、中々に有能で金もある男なのだが、みゆのお気に召さないらしい。天音家とは十年來の付き合いで、昔はあんなに懐いてくれたのに、なんてノスタルジックな悲しみを胸に秘めながらほろりと涙をこぼす。外面に見合わず感傷的な男である。

「とにかく、オーナーさんには良く気にかけてもらえるよう頼んでおいたんだから、迷惑をかけないようにね。わかった？」

「はいはい、わかりましたよーだ。ママは一回言い出したら聞かないんだから」

「みゆ、はいは一回」

「はい」

「もう……。それじゃあオーナーさん、お手間ですけどお願いしますね」

申し訳なさそうに頭を下げるゆみに対してお安い御用だと頷き返し、オーナーはみゆに視線を向けるが、途端にそっぽを向かれてしまう。苦笑しつつも、所詮相手はまだまだ生意気盛りのお子様である。当然だが人としての年季が違うので気にする素振りも見せず、オーナーは事前にゆみと打ち合わせてリスト化していた天音家の決まり事やルールを印字された用紙で最後の確認を行う。

中年太りの冴えない男となんだか楽しそうに話す母の姿に、みゆはますますもって”私是不機嫌です”というオーラを、オーナーに対して向けていくのであった。

今回オーナーがみゆの世話を請け負ったのは、天音家の事情もよく

知っていたし、今回ゆみと旅行に行く他の面々からも相談されていたからだった。

前述の通り、ゆみの夫は出張続きで殆ど家におらず、ゆみはみゆの子育てにこの10年かかりつきりだった。ゆえに長い間禁欲的な生活を強いられていたようなものだったのだが、そのことをゆみが珍しくママ友にぼやいたのだという。

たまには温泉で羽を伸ばすくらい、バチも当たらないのではないかと。

それがきっかけで、ママ友の面々は揃ってオーナーに相談した。ただ旅行に行くというだけでは、真面目なゆみは快く引き受けないだろう。

なのでオーナーが出した提案は、マンション内の婦人会で企画として旅行に連れて行くとういうものだった。婦人会には希望者のみが毎月積み立てをし、ある程度貯まればマンション内の住民の交流を兼ねたイベントを企画するのに使われていた。天音家もこれまで積み立てはしていたものの、終ぞゆみがこれを使ったことがなかったで、それを理由の一つとした。さらに、ゆみと特に仲の良いママ友も今回はこぞって参加できるし、みゆもまだまだ不安は残るが成長したし、オーナーもサポートするというので、今回の旅行の参加に踏み切れたのだった。

そうして緻密な準備のもと、なんとかゆみを送り出すことができ、ほっとしていたオーナーだったが――、

「ねえおじさん。みゆ、自分の事は自分でできるから。家に来なくていいから。もし来たら警察呼ぶから。防犯ブザーも鳴らすから」

ゆみが出て行って第一声がこれだった。釣り目がちな瞳をさらに釣り上げて威嚇してくる。

とはいえ所詮は子ども。臆病な猫が一生懸命強がっているようにしか見えなくて可愛らしい。

しかし、これは思ったより嫌われてるなど再確認したオーナーは頭を掻き、みゆを説得しようとする。

「うるさいなあ。みゆは頭良いし、運動だつてばっちりだし、お掃除も

お料理だってできるし、お風呂にだって一人で入れるんだから。さつさと出てつてよ」

取り付く島もないとはこのことか。呑気にそんなことを考えながら、しかしゆみから聞いた情報と違うので、そこは一応指摘しておく。みゆはあまり家事を手伝ったりしないらしいので、一人で家の事を全部できる筈がないのだ。ゆみが少々甘やかし過ぎる気もするが、まあ一人娘であるし、精々一〇歳かそこらの少女に家事の全てをやれというのも、それはそれで酷な気もする。そのために、食事の用意と部屋とトイレ、風呂場の掃除、ついでにみゆの口からは出て来なかったが洗濯も頼まれていたのだが――、

「あーもう！ いいから出てつてよ！ もうすぐ彼氏が遊びに来るんだから！ おじさんみたいなのがいたら邪魔なの！ 令くん嫌われちゃうでしょ！ほんとにブザー鳴らしちゃうんだから！」

この年でもう彼氏がいるのか、最近の子はませてるな、なんて殊更呑気なことを考えながら、ブザーの紐に小さな指をかけるみゆに、オーナーは両手を挙げて降参し部屋を後にした。

まあ、初日くらい一人で色々やってみるのも良い経験になるだろう。明日来てフォローしてやれば良い。失敗は成功の母、為せば成る、万事塞翁が馬。なにかあればこのマンションのシステムならすぐに警報が届くようになっていいるから、そうそう大事になるようなこともない。

可愛い子には旅をさせよ、親の甘いは子に毒薬、Spare the rod spoil the child. だ。

翌朝、管理人が天音家を訪ねインターホンを鳴らすが、何の反応もない。

これは本格的に嫌われたかと、最悪マスターキーを使うことも考えながらドアノブを引いてみるとあっさりと開いてしまった。

不用心にも程がある、と軽く冷や汗を流しながら玄関をくぐり、み

ゆに呼びかけるが反応なし。

溜め息をつこうとしたら、何やら微かに焦げ臭い匂いがあるので慌てて中に飛び込んでいく。

「……なごよ」

キッチンに駆け込むと、随分と目の周りを腫らせて覇気の欠片もないみゆが流し台の前に立っていた。

キッチンはもうぐっちゃぐちゃで、フライパンからは僅かに黒い煙が立っている。これで良く火災探知機が作動しなかったな……あ、一応換気扇は回していたらしい。

とりあえず汚れまみれのみゆを風呂場に放り込み、腹の虫がうるさかったみゆの為にさっさとキッチンを片して軽く朝食を用意してやる。

白いキャミソールとピンクのショートパンツ姿で出てきたみゆはろくに髪も拭いておらず、朝飯に食いついている所をバスタオルで丁寧に拭いてやった。

人心地ついたらしいみゆは、リビングのソファにオーナーと並んで座って、オーナーが淹れたホットココアをふうふうしながらぼつぼつと話し出した。

令くに良い所を見せようと、彼の前で料理を頑張ってみたものさっぱりうまくいかず、からかわれてしまったこと。それでケンカしてしまったこと。彼が帰ってしまい、見返してやろうとまた料理をしたが、余計に滅茶苦茶になるばかりで途方に暮れたこと。疲れてそのままキッチンで寝てしまったら、オーナーが入ってきたので慌てて起き上がったこと。おじさんの料理がおいしくて悔しくてしようがないこと。

最後の最後で意地を張る少女に笑ってしまうオーナーにムツとして、なにか勝てる物はないかと思いつく彼女の視線の先にあったのは――、

「おじさんよっわ〜い♡ 今時こんなのもできないなんて遅れてるよ

く？ さつきからぜんぜんダメダメじゃん。くそよわだよくそよわ  
♡ ゴーこざーこ♡」

現在オーナーは、やったことのないゲーム（大乱闘なやつ）でひた  
すらこのクソ生意気な小娘にマウントをとられ続けていた。

元気づける為にまあいいかと始めたが、まさかここまでとは思わな  
かった。自分ができないことをこんなおっさんができたことに対す  
る仕返しのもりだろうが、流石に度が過ぎる。基本温厚な方だが、  
3時間もぶっ続けてこの調子では頭にも来るというものだろう。と  
いうより単純にイライラする。

「おじさんこんなクソザコじゃ女の子とチューしたこともないんじや  
ないの？ みゆはねーあるんだよー♡ 令くんとしたよー♡ 今  
ちよつとむかつくけど」

本当に最近の子はませてるんだな、そうか、うん、と努めて冷静に  
流すオーナー。

「あとねー……令くんのおちんちんも見ちやっただー♡ すごいん  
だよー♡ ぴくぴくしてー♡ かわいくつてー♡ やっぱり今はむ  
かつくけど」

……少子高齢化の解消も早いかもしれない。今時の子は凄いなと  
流す――

「おじさーん、おじさんのも見せてよ」

……ちよつとだけわからせてやろう。どうせ見たらビビって  
逃げ出すだろう。後の事は知らん、なんとかなる。

オーナーは極めて冷静にそう考えた。

「どーせどーてーでちつちやいんでしょ。令くんはかつこいいけどお  
じさんはちよつとねー♡ くそよわだしくそぎこだし？ きつと  
ポークビツツみたいな――？」

心底馬鹿にしながらオーナーのズボンとトランクスを脱がしたみ  
ゆの目の前に現れたのは、勃起はしていないながらもみゆの想像を遥  
かに超える大ききの肉の塊だった。

「え……なに、これ……」

彼氏のより何倍も大きく、太く、黒くグロテスクで全くもって可愛



全身をビクつかせながら腰は既に制御不能らしく、この年の少女が  
してはいけない程浅ましくなっさけない腰振りへっ♡♡へっこ  
♡と繰り返しては口リで尻をふるん♡ふるん♡と揺らし、脚  
は完全に開き切って快感を味わっているのか耐えているのかピーン  
♡と爪先立ちで、濃厚なちんぽ臭を嗅ぎまくるみゆ。

「おっ♡♡おぼっ♡♡ふぎゅ♡♡んっぎゅ♡♡ぴ♡♡ぐ  
る♡♡なんかぎぢやう♡♡おう♡♡おまたぴりぴり♡♡  
おっっ♡♡やっっ♡♡やだっ♡♡くおっっ♡♡おしっこ  
でりゅううっ♡♡♡♡」

ぷしっ♡ぷじゅ♡と可愛らしく潮を吹き、元の面影もなくなるとろ  
ん♡とふやけさせた大きな瞳は軽く裏返し、くっそ情けないガニ股  
でむち尻を限界まで突き上げながらおちんぽ臭アクメを決めるみゆ。

この年でちん嗅ぎしただけでここまで達するみゆに感動すら覚え  
ながら、オーナーはひたすらこの生意気口リガキのクソザコっぷりを  
スマホに収め続けていた。

## #2 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキにチン しやぶを仕込む話。

「おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡  
♡ んぎゅ♡♡♡ やっぱこのおちんぽお♡♡♡ くっさすぎ♡♡♡  
ふーっ♡♡♡ ふーっ♡♡♡ ふおっ♡♡♡ きつく♡♡♡ こりえ♡♡♡ お  
まんこにくりゅのお♡♡♡」

ゆみが旅行に行つて二日目の朝。

昨日散々みゆに雄とちんぽの恐ろしさを教え込んでやったので、流石に今日は怯えて声も出せないだろうと若干ゲスい思考で天音家を訪れたオーナーを迎えたのは、

『あつは♡ クソザコおじさん今日も来たのお？♡ 昨日みゆにゲームでぼっこぼこにされたからつてえ♡ あんな酷いことしといてさあ♡ 性犯罪者だよせーはんざいしや♡ みゆがけーさつに言えば一発なんだよ？♡ テレビで全国デビュー♡ しちやうんだよー？♡ そんなこともわかんないの？ わっかんないよねー♡ おじさんはロリコンでー♡ 変態でー♡ 変質者でー♡ よっわよわのクソザコおちんぽ♡♡ だもんねー♡♡ ——あつ♡♡』

開口一番にクツソ生意気メスガキムーヴをかましてきたこのちんぽ臭狂いの雑魚ロリに久しぶりにキレちまったオーナー（昨日以来）は、いつもの笑顔を張り付けたままに無言でみゆの頭を片手で鷲掴みにすると、そのまま力任せに己の股間に押し付けてやった。

結果は冒頭の有様である。

まさかこのクソガキ、自分にこうさせる為になんか煽る様なことを言つたんじゃないや、と訝しむオーナー。もしそうだとしたら末恐ろしい小娘である。これは徹底的に躰けなければならぬ。

これ以上性犯罪者を増やさないためにも。

「おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡  
♡ おまんこっつらい♡♡♡ つらいよお♡♡♡ ずぼんごしやだ♡♡♡

ばんつもいららないの♡♡ そのまま♡♡ ちよくせつくんくん♡  
♡ きのうみたいいに♡♡ おっ♡♡ いっぱいぴゅっ♡ ぴゅっ♡  
♡ ってしたいよお♡♡」

……この子は天才かもしれない。まだ小〇5年生のくせにたった1日ちんぽ臭を嗅がせ続けたくらいで腰をなんの恥ずかしげもなくへこらせ、脚はみつともないガニ股ポーズを決めて寂しそうに鼻をひくつかせ、教えた単語もしつかり覚えていて。まさかここまで墮ちるとは。

なにやら薄ら寒いモノを感じつつ、それでもオーナーはバツキバキに勃起した大人ちんぽからカウパーを垂れ流しながら、みゆに邪魔な布切れを脱がすよう指示を出す。

まるで餌を待ち侘びた犬のようにデカイロリ尻をふりふり♡と揺らして雄に媚びながら、心底嬉しそうにズボンをずらしていく。

「あっは♡♡ おじさんのばんつもうぐっちよぐちよじゃん♡♡ 1

〇才のこーんなちちやくて可愛い女の子に♡ えっぐくてえ♡♡  
くっさくさのちんぽ臭♡♡ 嗅がせてこーふんしてるのお？♡

っ♡♡ うっわきつも♡♡ ありえないんですけどー♡♡ まじ  
サイテー♡♡ おっ♡♡ ほっ？♡♡ ふーっ♡♡ ふーっ♡♡」

どうやらオーナーを煽るとちんぽの臭いを嗅がせてもらえるという習しているらしい。

可愛いのは可愛い、そもそもみゆは半端じゃなく美少女だ。だが、大人を本気で見下して小馬鹿にする小賢しいこの態度、異常にイライラを誘う舐め腐った目付きがオーナーを煽る煽る。

そんなみゆに余計にイライラを募らせたオーナーは自分でトランクスを脱ぎ捨て、ぶるんと飛び出た極太カリ高ちんぽでみゆの可愛らしい頬つぺたをビンタしてやった。

「おふっ♡♡ きたっ♡♡ おちんぽ♡♡ すっご♡♡ がっちがち♡♡  
♡♡ やっぱくっさ♡♡ くさいよお♡♡ ふおっ♡♡ うそ♡♡  
♡♡ すぐいきゅ♡♡ おっ♡♡ つっおお♡♡ きっく♡♡

腰へこしながらいつぎゅ♡♡ んっほおっ♡♡」

生ちんぽが顔に触れた途端にイキ散らかすみゆの、あまりに年不相

応なドスケベっぷりにさらに極悪ちんぽをイキり立たせると、舌を放り出してひゅー♡ ひゅー♡ と息をするみゆの愛らしいお口に、凶悪な亀頭を押し込んでいく。

「ぐぼっ?! ふおっ?♡ おっぶう?♡♡♡ つ?♡♡♡ ??♡♡♡」

いきなりのごとに目を白黒させるみゆを、やはりスマホのムービーに収めながら、この背徳極まりない光景に心を踊らせるオーナー。この男も大概ゲスである。

「ふぼっ!♡ ひよっひよ!♡ ふあひひれっ——ふぎゅっ♡♡♡ んっひゅ♡♡♡ つ♡♡♡ ちゅ♡♡♡ ちゅう♡♡♡ ちゅぱっ♡♡♡ ちゅっぽ♡♡♡ ちゅっぽ♡♡♡」

流石に頭に来たのか、みゆが上目遣いにオーナーを必死に睨みつけてくるが、頭を鷲掴みにしてやると途端にしおらしくなり、黙ってしゃぶれ、と低い声で命令してやると身体を震わせて目をとろけさせ、愛おしそうにちんしゃぶを始めるみゆ。

あまりのちよろさとみゆのスイッチを知ったオーナーは機嫌を良くしたのか、掴んでいた右手で優しくみゆの頭を撫でてやる。

「んみゅ♡♡♡ ふゅ♡♡♡ ちゆるるる♡♡♡ ちゅっぽん♡♡♡ れろれろ♡♡♡ んれ♡♡♡ んべっ♡♡♡ ずろろろっ♡♡♡ じゅっぽ♡♡♡ じゅっぽ♡♡♡ じゅぞぞぞおっ♡♡♡♡♡」

途端に幸せそうに腰をへっこ♡♡♡ へっこ♡♡♡ 尻をまるでしっぽのようになりたくりながら、とても初めてとは思えないフェラテクを披露するみゆ。

天賦の才能に脳を震えさせられながら、オーナーは亀頭を舐ってはしゃぶりまわしてくるみゆの顔を両手で掴むと、軽めのピストンでおくちまんこの使い方を教え込んでいく。

「ふぼっ!?!♡ おいっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ ??♡♡♡ ほぎゅ♡♡♡ ぷおっ♡♡♡ おっぎゅ♡♡♡ ふほおおおっ?♡♡♡ ごちゅ♡♡♡ ごっちゅ♡♡♡ ぐえ♡♡♡ ぐっえ♡♡♡ ふぎよおおおっ♡♡♡♡♡」

手加減しているとはいえ初フェラでイラマチオまでいき、オーナーのエグいカリ太亀頭を顎が外れそうになりながらも啜え込んで舌



### #3 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキのロリボデイに快樂を仕込む話。

「ふっ♡ふっ♡ オーナーさんつてさあ♡ 自分よりこゝんなに小っちゃくてえ♡ か弱い女の子にしかイキれないの？♡ みゆじゃオーナーさんの力には絶対に勝てないもんね♡ ほんと大人の男のくせになっさけな♡♡ みじめ♡♡ かわいそ♡♡」

人生でも五指に入ろうかというレベルの快感をみゆの小さなお口マンコにぶちまけて賢者モードのオーナーに対し、息を整えたみゆが早速煽り出し始める。

この小さな体のどこにそんな体力があるんだ、とオーナーを呆れさせつつも、それでも未体験の性行為と大人の雄がもたらす暴力的な快樂に囚われつつあるみゆの瞳は、淫蕩一色に染め上げられていく。

「いい年して女の子の扱い方もわかんないとかさあ♡ ほんつとおちんぽしか能がないんだね、オーナーさん？♡ ——んっ♡ やっ♡ ふう♡♡ みゆを捕まえてどうするの？♡ 汗でべたべたしてキモいんだけど♡ このロリコン♡ へんたい♡」

この子は本当に、雄を煽ることに関しては天才だ。オーナーは誘われるがままにゆつくりみゆに近づくと後ろから羽交い絞めにし、生意気にもキヤミソールを押し上げている、胸のサイズの割には随分と大きな乳首をぎゅうっ♡ と太くゴツイ指で抓り上げた。

「おっ♡♡♡ 薄い布切れ一枚隔てられた敏感な2つの突起を、成人男性の大きな指で虐げられるという未知の刺激に、みゆは喉から汚い喘ぎ声を絞り出し、腰は快感を逃がそうとピストンのような情けない前後運動をへっこ♡ へっこ♡ と始めてしまう。

「っっっ♡♡♡ ふおっっっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡」  
みゆから発せられる、まだ幼い少女とは思えない程の甘ったるい性臭と嬌声に頭をやられながら、まるで挑発するかのようによこしまに勃起してい

く乳首を振り上げ、こねまわし、摘まみ上げ、押し潰していく。

「お、オーナーひゃんっ♡♡♡んいつ♡♡♡つよい♡♡♡ちからつよ  
いよお♡♡♡ほっ♡♡♡ほっ♡♡♡つぶれちやう♡♡♡みゆのちく  
び♡♡♡へんひゃいおじさんに♡♡♡つぶされちやうう♡♡♡んお  
っ♡♡♡」

上半身をオーナーに抑えられているが為に、乳首からくる津波のよ  
うな快楽を下半身で受け止めざるを得ないみゆは、発情期の猿のよう  
に腰をへこらせ、豊かに実ったロリ尻がオーナーの肌を叩くたびにペ  
ちっ♡♡♡べちっ♡♡♡と音を立てて形をむにゅ♡♡♡ぐにゅ♡♡♡と歪ま  
せる。

ようやく10才になったばかりの少女が晒すにはあまりにも淫猥  
なその光景に雄としての征服欲を満足させつつも、さらなるドス黒い  
欲求がオーナーの思考に鎌首を傾げてくる。

「??♡♡♡えっ?♡♡♡あっ♡♡♡やっ♡♡♡やだっ♡♡♡おーな  
さん♡♡♡やら♡♡♡ふおっ♡♡♡おっふ♡♡♡これ♡♡♡あしだ  
め♡♡♡おっ♡♡♡あいつ♡♡♡きつつ♡♡♡これきつつい♡  
♡♡♡うごけにや♡♡♡ふおおっ♡♡♡うごけないのつらい♡♡♡  
つらいのお♡♡♡おっぎゅ♡♡♡」

オーナーはみゆを抱きかかえたままソファに腰を沈ませると、右足  
でみゆのむちっ♡♡♡とした太ももを抑え込み、左足はみゆの脛の辺り  
に絡ませて動きを封じてしまった。

自分より一回りも二回りも身体の高い雄に背中を預け、全身を  
オーナーに抱き締められてぴんっ♡♡♡と気を付けの姿勢をとらされ  
たみゆは、逃がしたくても逃がせない快樂信号が濁流となつて全身を  
駆け巡り、脳を焼き切られていく。

「ふぎゅっ?♡♡♡んぎゅ♡♡♡おっ♡♡♡いぐっ♡♡♡これ  
いつぐ♡♡♡ちくび♡♡♡ちくびつぶされていつぎゅ♡♡♡  
ふおっ♡♡♡おっ♡♡♡び♡♡♡ぐるじ♡♡♡おーなーしや  
ん♡♡♡ちからゆるめてえ♡♡♡うごけないときちゅい♡♡♡  
おっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡  
ふっほおっ♡♡♡」

ぷしっ♡ ぷしゅっ♡ ぶしゅっ♡♡

まだ産毛すら生えていないにも関わらず、淫靡な音を立てながら潮を撒き散らすみゆのこどもおまんこ。

みゆのお願いに全く聞く耳を持たない、逆立ちしたって勝てない雄に羽交い絞めにされ、抑えつけられ、びんびんに勃起したいやらしい乳首をいじり倒されていき狂い、慣れ親しんだ自宅のリビングにみつともなく汗を噴き散らかす快感。

それら倒錯的な行為全てが、みゆの幼い身体の奥底から被虐で淫乱な性質を引き摺り出していく。

「っ♡♡ うあ♡♡ おっ♡♡ ひゅー♡♡ ひゅー♡」

白目を剥き、舌を放り出して小さな身体をひくつかせるみゆを眺めながら、オーナーはおもむろにみゆの股間に手を伸ばす。

すでに色を変える程にぐしゃぐしゃになったショートパンツの中にゴツイ手を滑り込ませ、それだけでくちゅくちゅ♡ と卑猥な音を奏でるみゆのぷにまんをなぞり、擦り上げる。

「——??: ふえっ?♡ ふみゅっ?!♡♡ んによお♡♡ ひよつと♡♡ まっへ♡♡ どこしやわってえ♡♡ ふおっ♡♡ くおおっ♡♡ りやめ♡♡ しょんなど♡♡ なでなでしないで♡♡ おっ♡♡ おおっ?♡♡」

乳首だけで十分火照らされた身体に追い打ちを掛けられるかのように、自身の一番恥ずかしい部分を大きな手で弄られ、目を白黒させるさせるみゆ。

母親以外の誰にも触れられたことのない大事な場所を無遠慮に撫でまわされる羞恥と、そこから湧き上がる乳首を超える快楽にみゆは全身を震わせ、頭が茹で上がっていく。

「おっ♡おっ♡♡♡ ふほっ♡♡♡ んおおっ♡♡♡ おまんこ♡♡♡ みゆのおまんこさわっちゃだめ♡♡♡ しょはれいくんの♡♡♡ おーなーさんなんかさがさわっちゃだめなの♡♡♡ おっひ♡♡♡ んぎゅっ♡♡♡ はなしえ♡♡♡ このっ♡♡♡ ばっ♡♡♡ かつ♡♡♡ くずっ♡♡♡ へんたい♡♡♡ ろりこ——ひゅぐ?♡♡♡ いぎっ♡♡♡ やっ♡♡♡ ごめんなさい♡♡♡ つよい

♡♡♡ かてないの♡♡♡ ほおおゝっ?!?♡♡♡  
なにやら急に騒ぎ出したメスガキのぷにろりボディをさらに締め上げるオーナー。

それだけであつという間に降伏宣言するクソザコまんこを嘲笑うかのように、ぴつちりとどじたすじまんを好き勝手に弄繰り回し、ぽつんと主張してくる可愛らしいクリトリスを摘まみ上げる。

「んぎよっ?!?♡♡♡ ふほおっ?!♡♡♡ しよれ♡♡♡ いまのだめ♡♡♡ ひい♡♡♡ ぎゅ♡♡♡ んっほ♡♡♡ おおゝっ♡♡♡ きくっ♡♡♡ おまんこきつくう♡♡♡」

面白いくらいに身体をビクつかせ、さらに力を込めて締め上げてやるオーナー。

みゆは異常なほどの快楽に口の端に泡まで噴きながら、逃げることも自由に身体を動かすことも許されず、ひたすらその小さな身体で破滅的な快感を受け続ける。

「ゆるして♡♡♡ もうゆるじてえ♡♡♡ こわれる♡♡♡ みゆ♡♡♡ おーなーしやんにごわされるう♡♡♡ んほお♡♡♡ きつ♡♡♡ ぎづいい♡♡♡ おゝっ♡♡♡ おゝっ♡♡♡ やらっ♡♡♡ ほんろにちゅらいのお♡♡♡ まま♡♡♡ ままあ♡♡♡ たしゆけ♡♡♡ たしゆけてえ♡♡♡ しんじやう♡♡♡ こんにやのお♡♡♡ ほんとにしんじやうよおおっ♡♡♡ んほっ?♡♡♡ おっほおおおおゝっ♡♡♡」

クソ生意気なメスガキがなっさけないアへ顔を晒して自分に許しを乞うさまを存分に楽しみながらもオーナーは手を緩めず、みゆの幼い身体に一生モノの快楽を刻み込んでいく。

その後、みゆが絶頂から帰ってこれなくなり、リビングがみゆの汁と性臭で満たされ、ついには失神するまでオーナーの容赦ない責めは続いた。

## #4 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキに極太ちんぽをねじ込む話。

「っ♡♡♡ いっ♡♡♡ うあ♡♡♡ はへっ♡♡♡ あいつ♡♡♡ ふおおっ  
?♡♡♡ ひっ♡♡♡ ひっ♡♡♡ おっほ♡♡♡ ひゅー♡♡♡ ひゅー♡  
♡」

まだまだ未発達で成長途中の柔らかい身体を散々に弄繰り回され、絶頂に次ぐ絶頂による快楽を延々と味あわされ、息も絶え絶えなみゆ。

愛らしい小さな顔は体液まみれで見る影もなくアへり、大きな瞳は全く焦点が合っておらず、失神して弛緩した全身を完全にオーナーに預けたまま、もう何度目かしのれない失禁をちよろちよろと垂れ流してはその快感に浸っている。

元気で活発、小生意気な少女の面影はもうどこにもなかった。

自分の良く知る一家のリビングで、その一人娘に汁という汁を撒き散らかせ、幼い性臭で満たすという背徳感がオーナーを襲う。

これは後始末が大変だな、などとまるで他人事のように頭の隅で考えながら、みゆを拘束し続けていた力を漸く緩めていく。

「ふゆ?♡♡♡ あっ♡♡♡ やっ♡♡♡ やあだ♡♡♡ んっ♡♡♡ ぎゅっ  
て♡♡♡ もっろぎゅってひて♡♡♡ んうっ♡♡♡ さみしい♡♡♡ さ  
みしいの♡♡♡ みゆ♡♡♡ ぎゅゝされるのしゅきい♡♡♡」

…口を開けばクソ生意気なことしか言わない小娘も、ただの年相応な寂しがり屋だったのか、それとも、オーナーが与えてやった力に屈服する快楽に溺れた一匹の雌なだけか。

自身をすり潰しかねない力からやっとな解放されたというのに、それがイヤだと駄々をこね、自分の胸に必死に縋りついてくるみゆに、得も言われぬ感情の波に襲われるオーナー。

果たしてこの子は本気でそう思っているのか。

はたまたこれすら、オーナーを挑発するための行為に過ぎないの

か。

まったくもって年にそぐわぬみゆの妖艶さと淫らな気配に思考がぐらつき、己の視界が揺らぐ錯覚すら覚えながら、オーナーは限界にまで張り詰めカウパーを垂れ流す極太ちんぽをみゆのイカ腹に押し付け、柔らかな肉を歪ませ、腹の上からみゆの子宮を撫で擦る。

「ふおっ?..♡♡ えへっ♡♡♡ オーナーさん♡♡♡ だめだよ?♡♡  
♡♡♡ んっ♡♡♡ わたしまだ10才だからあ♡♡♡ ふっ♡♡♡ アレだつてまだきてないしい♡♡♡ エッチしたつてあかちやんできな  
いよ?♡♡♡ いひっ♡♡♡ それにい♡♡♡ こくんのおつきくてぶつとくてエグいおちんぽ♡♡♡ おっ♡♡♡ みゆのおまんこに入るわけないでしょ?♡♡♡ ほらあ♡♡♡ ぜくんぶはいつたらおっぱいのしたまでくるとか♡♡♡♡♡ ふおっ♡♡♡ っ♡♡♡ っ♡♡♡ っ♡♡♡ みゆ♡♡♡ しんじやうよお?♡♡♡♡♡」

ぽっこりと膨らむ少女特有のお腹で凶悪なデカマラをぷにゅむにゅ♡♡ と押し返しながら、蠱惑な瞳をオーナーに向け、自分がまだ初潮すら迎えていないことを告げるみゆ。

それだけでも更に脈動し、太さと雄の性臭を増していく怒張をその小さな手で愛おしそうに撫でながら、まるで物差しのように根本をぴっちり閉じたおまんこに合わせ、それがどれだけ暴虐な代物かをオーナーに見せつけていく。

挿入しては本気でこの子を殺しかねない。

異様な空気と背徳感に溺れているオーナーでも容易にそう思えるくらいに、この男の男性器は大きく、少女の未成熟の性器はあまりに小さい――

「あっは♡♡♡ おーなーさんこわいの?♡♡♡ こわいんだあ♡♡♡ さつきはあんなにイキりちらしてみゆのことめちやくちやにしたくせに♡♡♡ でもお♡♡♡ そうだよねえ♡♡♡ こわいよねえ♡♡♡ こんなのいれちゃったらあ♡♡♡ みゆのなかはもっつとぐつちやくちや♡♡♡ になっちやうもんねえ♡♡♡♡♡」

己の身体を本気で破壊しかねない未来に恐怖するどころか、瞳の奥に♡マークすら浮かべる勢いで発情し、娼婦の如く腰を躍らせ、しと

どに愛液を垂らしては媚を売るみゆに、オーナーの崩れかけの理性と倫理観は容赦なくこそぎ落されていく。

「ほらぁ♡♡♡ みゆのおまんこ♡♡♡ くっふ♡♡♡ やわらかいでしょ?♡♡♡ きつとすっくきもちいいよ♡♡♡ おっ♡♡♡ むにゅむにゅのお♡♡♡ ぷにぷにだよお♡♡♡ ふっほ♡♡♡ ね、オーナーさん。みゆのおまんこに……挿れちゃお?」

オーナーの膝に手をつき、突き出した腰をへこらせ、すじロリまんこでオーナーの極太ちんぽをまんずりまでしだしたみゆ。

柔らかで弾力のある極上のメス肉がちんぽに吸い付き、物欲しそうに涎を垂らしてビクつくちんぽにマーキングを施していく。

最後の一押しとばかりに、いっそ恐ろしいほど素に戻ったみゆの悪魔が如き囁きに、オーナーは頭の中で何かが切れる音を確かに聞いた。

「あっ♡♡♡ くるっ♡♡♡ きちやう♡♡♡ オーナーさんのぶっ  
とおちんぽ♡♡♡ おかされる♡♡♡ みゆおかされちやうよお♡♡♡ ままぁ♡♡♡ れいくうん♡♡♡ みゆ♡♡♡ ほんとに  
ころされちやうかもお♡♡♡ ——うっぎっ?!♡♡♡ がっ?!♡♡♡  
ふぎゅっ?!♡♡♡ はっひゅ?!♡♡♡ ふっうっ♡♡♡ つオ?♡♡♡  
♡♡♡ ——ぶぐうううおおおっ♡♡♡ あっぎゅ♡♡♡ ぐ  
ひっ♡♡♡ んによ♡♡♡ ぴぎい?!♡♡♡ んほおおおお  
っ♡♡♡♡♡♡♡」

みゆのむっちむち♡ の太ももを鷲掴みにし、目の前で淫猥に挑発するロリオナホに己の剛直をあてがうと、ミチミチ♡ と音を立てさせながらみゆのおまんこをこじ開けていく。

裂けてもおかしくない程に凶悪なオーナーの龟头を、驚くほどの柔らかさで限界以上に広がりながら呑み込んでいくおまんこの感触に、みゆは身体を弓なりに仰け反らせ、両足をピーン♡ と伸ばしながら白目を剥く。

「くっほおおおっ♡♡♡ つっ?♡♡♡ はいりゅ♡♡♡ はいってぐりゅうう  
っ♡♡♡♡ おーなーしゃんのおちんぽおおっ♡♡♡ うぎっ?!  
♡♡♡ ぐえっ♡♡♡ おごっ♡♡♡ これだめっ♡♡♡ やっぱ

しぬ♡♡♡　　こんななじぬうううっ♡♡♡　　おっぎゅ♡♡♡  
ほっ♡♡♡　　ふっほオっ♡♡♡♡♡

異常にえらの張った雌殺しの亀頭を、瞬く間に呑み込んでしまった  
みゆのぷにロリおまんこ。

それだけで下腹部をぽっこり♡　と、一目でわかるほどに押し上げ  
られてしまったみゆは、この世のものとは思えないほどの快楽に喘ぎ  
狂い、腰をガツクガク♡　に飛び跳ねさせてしまう。

まるで痛みを感じていない、それどころか己の規格外な男根を啜え  
込み狂喜乱舞するみゆに歪な笑みを向けながら、オーナーは内なる獣  
性を解き放つていく――。

#5 クソ生意気ドスケベむち尻メスガキを腹ボコにする話。

「おっ♡♡♡♡ うおっ♡♡♡♡ くっふ♡♡♡♡ うぎゅ♡♡♡♡  
ひゅっ♡♡♡♡ ふーっ♡♡♡♡ ふーっ♡♡♡♡」

まだ幼い少女にとってはあまりに凶悪であるはずのカリ高亀頭を、綺麗な一本筋口りまんこで啜え込んでしまい、痛がるどころか痙攣を起すほどに悦び、快樂に打ち震えるみゆ。

一頻りの連続絶頂を味わったところで全身からは力が抜けきっており、頭と脚をだらんと垂れさせ、目はひん剥き、舌も情けなく放り出して失神してしまっていた。

それでもみゆのぷりっぷり♡ の膣壁は呑み込んだ亀頭を休むことなくじゅるじゅる♡ としゃぶり上げ、纏わりつき、まるでフェラチオをしているかの如く卑猥な粘着音を立てて舐りまわしている。

下腹部に己のエグい亀頭の形がはつきるわかる程浮かび上がらせ、気を失っているにも関わらず貪欲に快樂を欲するみゆの規格外さに戦慄すら覚えながらも、留まることを知らない射精欲と征服感に息を荒くするオーナー。

腰が引けそうなほどに吸い付いてくるみゆの極柔メス肉の快樂に酔い痴れながら、じつくりと味わうように少しずつ、くちゅ♡ にちや♡ と蠢く幼い蜜壺を掻き分けていく。

「ふおっ♡♡♡♡ ほひゅっ♡♡♡♡ くっほ♡♡♡♡ オっ♡♡♡♡  
んっぎゅ♡♡♡♡ あひっ♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡  
♡♡ ほおおおっ♡♡♡♡」

本来はしっかりと閉じ、異物の侵入を拒まなければならぬ膣内はまるで待ち侘びたかのようにあっけなく道を開き、確実に雄を迎え入れ、媚びへつらうかのように甘く、そしてきつく、己を貫く肉の槍を導いていく。

「いゅっ♡♡♡♡ んみゅ♡♡♡♡ くおっ♡♡♡♡ ほっ♡♡♡♡ ほっ



しよ？♡♡♡ おっ♡♡♡ いっぱいちゅーちゅー♡♡♡ してあげるから♡♡♡ しよこでとまってえ♡♡♡ みゆのこともういじめないでえ♡♡♡ おねがいします♡♡♡ もうゆるしてえ♡♡♡♡ んオっ♡♡♡」

全力で雄の象徴たる男根に媚びへつらい、許しを乞う上の口とは裏腹に、みゆの腰は抑えつけられているにも関わらず押し返すようにくいつ♡ くいっ♡ とオーナーの生殖欲を煽り立てる。

雄に屈服を宣言する度に幼い膣内はちゅう♡ ちゅう♡ と吸い付き、乳首とクリトリスは限界まで勃起してピクつき、口とおまんこからは際限なく涎を垂れ流して歪み爛れる期待に満ちた視線をオーナーに浴びせかける。

「ぐひいっ?!♡♡♡ んごっ?!♡♡♡ ふぎゅ♡♡♡ うおおオっ♡♡♡ いぎっ♡♡♡ いだっ♡♡♡ いだいっ♡♡♡ やぶれちや♡♡♡ ぶちぶち♡♡♡ しよじよ♡♡♡ わらひのはじめてえ♡♡♡ おーなーしゃんにうばわれちやったあ♡♡♡ うそ♡♡♡ なんてえ♡♡♡ ごめんなさいしたのにい♡♡♡ ふっひゅ♡♡♡ ひどいよお♡♡♡ ままあ♡♡♡ れいくうん♡♡♡ おねがい♡♡♡ たしゆけてえ♡♡♡ んっほ?♡♡♡ ほおおおっ♡♡♡♡」

もう何をされても、何を言われても、この小娘の行動は全て挑発としか考えられないオーナーはみゆの懇願も無言で無視し、柔らかな粘膜を食い破る感触を味わいながら幼い肉壺を食い破っていく。

痛いだのなんだの言いながら全身をピーン♡ と突っ張らせて被虐の悦楽に打ち震え、痛みですら快楽に変換して痴態を晒すお手軽ロリオナホを更なる深みに叩き落とすべく、オーナーはこれまでゆっくりだった動きを一変させ――、

「――おっ♡♡♡」  
——その凶悪に過ぎる極太ちゃんぽを思いつきり、みゆの子宮目掛けて叩き込んでやった。

「??♡♡♡ つっ?♡♡♡ はひゅっ♡♡♡ へっ♡♡♡ へっ♡♡♡ ほへっ?♡♡♡」

おまんこから臍を超え、鳩尾までオーナーのデカマラに貫かれ、柔らかに愛らしい筈のお腹は歪にその形を歪まされ、まるでみゆの肉体はこの雄の所有物だと言わんばかりの蹂躪っぷりであった。

臓器を押しやられ、初潮すら迎えていない子宮はひしゃげて押し潰され、ぼこお♡ と浮かび上がらされた自分の腹部のあまりの変わりように、脳の処理が追い付かない。

呆然とその異様な光景を眺めながらも、下半身からくるジクジクとした甘い疼きが次第にみゆの思考を覚醒させ、麻痺している時ですら得られる快感が急激に濃度を上げ、津波のように腹の中心から溢れかえってきた。

「——ぴっ?!♡♡♡ いぎっ?!♡♡♡ いっぎゅ♡♡♡ うオっ?!♡♡♡♡ ごれダメっ♡♡♡ はオっ♡♡♡ ぐっぎ♡♡♡ いぐっ♡♡♡ いぐいぐいぐっオっ♡♡♡ あぎや♡♡♡ ひっ♡♡♡ ひいっ♡♡♡ ごわれ♡♡♡ ごわれりゅ♡♡♡ これ♡♡♡ あっいっ♡♡♡ いっぐ♡♡♡ まらいっぐ♡♡♡ ぐぶっ?♡♡♡ ふっほ♡♡♡ おぎよ♡♡♡ んっほおおおオっ♡♡♡♡」

獣の方がよっぽどマシだと思えるような嬌声を喉から絞り出しては滑稽なアへ顔を晒し、腹の底からオーナーの極太ちんぽに屈服アクメを決め、脳みそにバチバチと電流を流されたかのように痺れ狂い、脳細胞を焼き殺されていく。

みゆの体内、膣ひだの一つ一つに至るまでが己の形をしっかりと記憶し、決して忘れることがないように、オーナーはただ沈黙して自分専用のちんぽケースとして馴染ませ、小刻みに亀頭でボルチオを開発しながら、終わらないアクメ地獄に壊れていく少女を楽しそうに眺め続ける——。

第3章 世話焼きドMエロJKに癒されたりスケベしたりする話。

#1 世話焼きドMエロJKに癒されたりスケベしたりする話。

土曜の深夜。

寒風の吹き荒ぶ中、人気の無い寂れた公園のベンチに腰掛け、缶コーヒーを両手でさすりながら生気の無い男が一人。

今朝5分でセットした頭髪は風に煽られ見る影もなく、だらしなく緩めたネクタイと、長年の付き合いでよれたコートに擦り減った革靴のコントラストが、ひどく哀愁を漂わせていた。

既に身体は冷え切っており、早く帰るべきであるのに身体はぴくりとも動かない。

このままでは風邪をひくばかりか、下手をすれば凍死しかねないにもかかわらず。

男は疲れ切っていた。

俗に言うブラック企業に勤める男は、今日で何連勤目であろうか、最早数えるのも億劫だった。

始発から終電まで休みなく働き、飯も碌に食わず栄養ドリンクで誤魔化し、客と上司にはどやされる日々。

営業が二つ返事で持ってきた無理難題を、”お客様”の為にただただこなす。

残業は当然の如くみなしで、定時にタイムカードを切るのは当たり前、ボーナスが現物支給だった時は呆れを通り越して久方ぶりに乾いた笑みが零れたくらいだった。

男は擦り切れていた。

身も心も、なにかもだ。

いつからか、目に映る世界から色はなくなっていた。

明日は——いや、日付はもう変わっているだろうから今日。  
今日は久々の休みだというのに、もうなにもやる気が起きない。

男には眠気が襲ってきていた、こんなにも寒いというのに。  
こんな状況で寝ればまずいだろうことはわかっている。  
しかし、男には妙な確信があった。

このまま瞼を閉じてしまえば、随分と楽になれそうだ——。

ふとそんなことを思っ、これ以上考えるのも面倒だと目を瞑ろう  
とした時だった。

「おじさんさ、こんなところで寝てたら死んじゃうよ?」

随分と耳障りの良い声が鼓膜を揺らしたのを、どこか他人事のように  
感じたのは無理もあるまい。

「もしもーし? こーんな可愛いJK無視するなんてひどくないです  
かー?」

再度呼びかけられ、重い瞼をどうにか開いた男の視界には、1人の  
少女が映っていた。

着崩した制服に身を包み、肩には羽織っているだけのカーディガ  
ン。首に巻かれた長いマフラー。セミロングの髪。随分と短いス  
カートからは、太ももが惜しげもなく外気に晒されている。

そんな姿を見た男が無意識に発した言葉に少女は大きな瞳を何度  
か瞬かせると、盛大にため息をついた後に口を開いた。

「寒そうだな、って……。おじさんのがよっぽど寒そうなんですけど。  
今にも死にそうな顔してるし。ほんとに大丈夫——って冷たっ!  
手めっちゃ冷たいよおじさん!」

なんの躊躇もなくこんな中年男の手に触れてきた少女に、奇妙な子  
だなど僅かばかりの感想を得た、と思つた途端、随分な大声とリアク  
ションで騒ぎ出す目の前の小娘。

とりあえず冷たい思いをさせたのなら謝らなければと声を発した  
時、久しぶりに表情筋が動いた気がしたなど、男は相変わらず他人事  
のように考えていた。

「ごめんじゃないでしょ！ これほんとヤバいってば！ なんで金づ  
る探してだけなのにこんな……。あーっもう！ ほらおじさん！  
いいから来て！ だー！ しゃきつと立つ！」

表情をころころと変えて更に激しく体をくねらせる少女を眺めて  
いると、思つたより強い力で立ち上がらされ、自分の手を引いて歩き  
始めた。

こちらに向かつてなにやら騒いでいるが、頭に靄がかかったかのよ  
うで上手く聞き取れない。

自分よりよっぽど小柄な少女にただただ手を引かれるがまま、男は  
寂れた公園を後にしたのだった。

温かくて、とても心地良い眠気に微睡んでいた。

鼻腔をくすぐる甘く柔らかな香りと、全身を包む程良い温もりが、  
男に久方ぶりの安眠を与える。

ここ何年も寝付きが悪く、漸く眠れたと思つたら夢でも仕事をし、  
怒鳴られ、汗だくで飛び起きることが多かった日々。

こんな穏やかな気分でいられるのはいつ以来だろうか――。

「おはよ、おじさん」

まるで小鳥のさえずりのように華やかな音色が、男の意識を覚醒さ  
せていく。

最近では考えられないくらいに軽い瞼を開くと、大きく透きとおる  
かのように澄んだ瞳が男を見つめていた。

「お風呂上がったら死んだみたいに寝ちやうんだもん。びっくりした

よ、こんな可愛いJKの裸見といてさ。ちよつと自信なくしたかも」。

「あーあ、おじさんのせいで傷ついちゃったー。どうしよっかなー。警察に突き出しちゃおっかなー」

「……ねー聞いているー？ まいっか。わたし、お腹すいたからルムサで頼んじやうね。おじさんの分もてきとーに頼んどくから。ちゃんとお腹すきなきやダメだよ？ わたし的にはもつと筋肉ついてる方が好みだしさー」

——え、誰。

「は?! ちよつと覚えてないの!? あんなに優しくしてあげたのに！ 全身洗ったげてさ！ お金とるよ！ いやとる気満々だったけど！」

男の意図せず出た呟きはばつちり聞こえたらしく、見惚れる程に可愛い顔があれよあれよと表情を変えていく。

怒りながら大げさな身振り手振りで昨晚のことを教えてくれる少女を眺めながら、ぼんやりと思いついてきた。

そうか、この子が助けてくれたのか。こんな見ず知らずの、緑でもない中年男を。

「ちよつとほんとに聞いているの!? 制服のままだったから結構危なかつ——へ？ ありがとう？ ……ま、まあ？ あのままほつとくのもなんかアレだったし？ タダじゃないですしー？ その分お金もちゃんともらいますしー？ これからいっぱいご飯も頼んじやうんだからね！」

男の礼に、照れ隠しなのか顔を背け、柔らかな金色の髪を指で弄る少女に対し、賑やかで見た目の派手さの割に良い子だと思った。

見ていて飽きない、華やかで、それでいて女らしい丸みはしっかりと帯びた、とても自分のような男とは吊り合わない——いや待て、とつか年頃の娘が色々ときらけ出し過ぎではないだろうか。

「——はい、それじゃできたらすぐ持つてきてくださーい。なるは

やで、ほんとになるはやで」

電話越しに早口で頼む少女は白いバスローブを纏っただけで、その後ろ姿はなんとも官能的かつ彫刻のように美しい。

セミロングの金髪は決して品を損なわず、その隙間から覗く艶やかなうなじ、動作に合わせて誘うかのように振りたくられる大きな尻、すらりと伸びる脚はまさしく白磁のように輝いて見えた。

「視線を感じると思ったらさー、おじさんも枯れてたわけじゃないんだね」

いひひ、と年頃の娘らしく笑ったと思えば、まるで獲物を品定めするかのように目を細め、愛らしい唇を長い舌で妖しくなめずりながら歩み寄ってくる。

「わたし、可愛くてエロいって結構人気なんだよ。ほら、おっぱいもおつきいでしょ？ Fカップあるんだから♡」

目の前まで来た彼女は、本当に少女かと疑うほどに妖艶な笑みを浮かべ、前屈みに胸を強調してくる。

相手は一回り以上も年下であるにも関わらず、差し出された豊かな胸元に視線が釘付けになってしまう。陰茎には溢れんばかりに血が溜まり、久しく感じられなかった性欲が沸き立ってきた。

「あつは♡ そんなガン見しちゃってさ♡ ま、現役JKの生おっぱいだもんね。さてさて、昨日元気なかつた子は今どうなっちゃって……る……う？」

乳首が見えそうで見えないもどかしさと、孕み頃の若い雌が放つ甘ったるい色香に思考をやられていたら、躊躇も遠慮もなく男の分身にか細い手を伸ばしてきた。

己の性器に触れられた感触で我に返り、相手は未成年であることを今更ながらに思い返す。

これは流石に不味いだろうと見下ろすと、隆起し切った男性器に触れたまま硬直した少女が、何やらぶつぶつとうわ言の様に呟いていた。

「え……なにこれでっか……♡ おちんぽこんなにおつきくなるんだ……うっわやっぱ……♡ 絶対やばいってこれ……♡ カレシの

倍くらいありそ……こんなの入ったら死んじゃうってば……硬  
さも……あはっ♡ すっごお♡♡」

先程までとは裏腹に、今度は少女が男の剛直に魅入られていた。  
目にハートを浮かべながらうっとりとして逸物をさすり、熱い吐息を吹  
き掛ける。

その度に男が身体を揺すって震わせると、少女は一層艶めかしい笑  
みを浮かべ、上目遣いで見上げてくる。

「あはっ♡ びくびくしちゃって♡ 撫でてるだけでそんなに気持ち  
良いの？♡ こーんなやつばいの持つてるのに♡ あっ♡ おじさ  
んもしかして童貞？♡ 確かにこれは普通の子にはきつついよねえ  
♡♡ こーんなぶつとくてえ♡♡ えっぐいのでほじくられたら  
……♡♡ おまんこもあたまも♡♡ バカになっちゃうもんね♡  
♡ うっわ♡ めっちゃカウパーでできたじゃん♡♡ もー♡  
しようがないなあ♡♡」

大好物を目の前にした幼子のような喜びようと、グロテスクな巨根  
に美しい顔を押し付け頬擦りする様が、強烈な背徳感を男に与えてい  
た。

削ぎ落されていく理性が形となったかのように、止めどなく溢れる  
先走り汗を長い舌で絡めとり、甘い蜜を味わっているかのように啜り  
上げていく。

「んれえ♡♡ ちゆる♡♡ れろれろろお♡♡ んっちゅ♡♡  
ぢゅぞ♡♡ ちゅーっぱちゅーっぱ♡♡ ちゅっぽおっ♡♡  
んーっ♡♡ おじさんさあ♡♡ カウパーなのに濃すぎだっつてば♡  
♡ これだけで孕んじゃいそうじゃん♡♡ うっわ♡♡ どんどん  
出てきてえっろ♡♡ あーもう無理♡♡ こんな我慢むりっ♡  
♡ へあ♡……っむ♡♡ んっぽお♡♡」

舌先で器用に鈴口をほじくり、亀頭を舐りまわしては淫猥極まりな  
い音を立てて我慢汁を飲み干していく。

それだけでは飽き足らず、卑猥に蠢く長舌と、極上の肉壺と化した  
口内を男に見せつけたかと思えば、今にもはち切れそうなカリ太亀頭  
を幸せそうに啜え込んでしまった。

「おっ♡♡♡いっ♡♡♡ふーっ♡♡♡んふーっ♡♡♡んっ♡♡♡りゆるりゆるお♡♡♡んっふふー♡♡♡ぢゆるるるる♡♡♡ちゅっちゅっちゅっ♡♡♡ふおっ♡♡♡おっ♡♡♡んっぽ♡♡♡んっぽ♡♡♡んっぽお♡♡♡ずろろろお♡♡♡」

唾液まみれでむしやぶりついてくる熱い口内、触手のように這いずりまわる舌、淫蕩で粘着質に過ぎる音……。それら全てが猛烈な快樂信号を男の脳天に叩きつけていく。

あまりに非現実的な眼下の光景と、淫魔ですら怖気づきそうな少女の淫乱さが、男の培ってきた常識や倫理観を欠片も残さず塗り潰していった。

「んっぶ♡♡♡おっ♡♡♡ちゅ♡♡♡ぢゅー♡♡♡?♡♡♡ほひは—  
—?♡♡♡っごおっ?!♡♡♡ぐっえ!?!♡♡♡お?♡♡♡っ??♡♡♡ふほおお?!♡♡♡」

男はやおら両手で少女の頭に触れたかと思うと、あろうことか思い切り力を込めて己の股間に引き込み、その凶悪な逸物を喉の奥深くにまでねじ込んでしまった。

「ぐお♡♡♡ひゅ♡♡♡お♡♡♡いっ♡♡♡っ?♡♡♡くっ♡♡♡ぶぎゅ♡♡♡ぴっ♡♡♡おオっ♡♡♡」

突然の暴拳に少女は目を白黒させえづきながらも、漏れ出る声から快樂の色は消えず。

それどころか被虐の快感から脚は大きく開き、腰は情けなく前後にへこって媚びへつらい、しとどに濡れそぼった無毛の蜜壺からは大きな音を立ててイキ潮まで撒き散らす有様だった。

「っっ♡♡♡こぼっ♡♡♡ほっひゅ♡♡♡ひ♡♡♡ふーっ♡♡♡んふーっ♡♡♡ぢゆる♡♡♡んろお♡♡♡んべ♡♡♡いっっえ♡♡♡んっふう♡♡♡」

許可もなく喉奥をレイプされているにも関わらず、あっという間に順応してしまった少女は食道すら操っているかのように喉を窄ませ、心底幸せそうに鼻息を荒くして男を見上げる。

愛くるしい、まだ幼さすら残っている筈の美貌を、男の精液を搾り取る為だけの下品極まりないひよっここフェラ顔に変貌させ、陰毛が

へばり付こうがお構いなしに鼻を股間に押し付けては饅えた性臭を必死に吸い込んでいく。

普通なら社会的に死んでおかしくない仕打ちをしたにも関わらず、嬉々として雄の歪んだ欲望を受け止め、そればかりか、「もっと酷いこととして♡ もっと犯して♡♡」と訴えてくるかのような期待と被虐に満ちた瞳に、男はたまらず溜め込んだ精子を吐き出した。

「っっ!?!♡ おぼっ?!♡♡ ♪っほおおっ♡♡♡ ♪オっ♡♡♡♡♡  
♡ ごきゅ♡♡♡ ごっきゅ♡♡♡ うぶっ♡♡♡ ふぎゅ♡♡♡  
んっぎゅ♡♡♡ つ♡♡♡ お♡♡♡ ふーっ♡♡♡ んふーっ♡♡♡  
♡♡♡ ぷおっ?!♡♡♡ ぐっひゅ♡♡♡ のおおっ♡♡♡ ほっ♡♡♡  
ひ♡♡♡ んごえ♡♡♡ ぢゅろろお♡♡♡ ごっきゅ♡♡♡ ごっきゅ♡♡♡  
きゅん♡♡♡」

頭を鷲掴みにされ、限界までデカマラをぶち込まれて目の前に火花が散った瞬間。

止めとばかりに嘔き出すどろっどろ♡ のザーメンを流し込まれながら、少女は目をぐりゅん♡ とひっくり返して盛大にイキ散ららしていた。

重量すら感じられる精液に胃を強制的に満たされて達し、収まりきらずに逆流した白濁液が鼻から飛び出しては絶頂し、酷いザーメン臭に全身を犯されながら潮を嘔く。

雄に都合の良いすぎるお口便器と化した少女は、それでもなお幸せそうに男の股座にしがみつき、次から次へと流し込まれる半固形ザーメンを喉を鳴らして飲み干しながら、決して離れようとはしなかった。

「オっ♡♡♡♡♡ むお♡♡♡ んっぎゅ♡♡♡ ちゅ♡♡♡ ちゅーっば♡♡♡ ずろろお♡♡♡ ぢゅ♡…:…ぼんっ♡♡♡ ん♡♡♡ |  
|っぐ♡♡♡♡ げえええっぶ♡♡♡♡♡」

尿道に残った精液すらも根こそぎ吸い取り、年頃の少女がしてはいけない間抜け面で最後までちんぽをしゃぶり尽くし、漸くちんぽから離れたかと思えば耳を疑うような、品性など微塵も感じさせない音が室内に響き渡った。

驚愕に染まる男に対し、オナホと化した口マンコを両手も使ってめ

いっぱい開き、長い舌で中空を舐め回しながら、ちやんとごつくんできた証をこれでもかと思せびらかす少女。

彼女の瞳に羞恥の色など欠片なく、己を使つて気持ち良くなつてくれた雄に対する歪な愛と、更なる快樂と被虐にまみれる期待が色濃く渦巻いていた。

「ぐっぷ♡♡♡ ちゆる♡♡♡ ——ね、おじさん。次はどんな酷いことしてくれるの?。」

## #2 世話焼きドMエロJKに諭されたり種付けセックスしたりする話。

「おじさんさー、そんな仕事さっさとやめちやいなよ」

極上のフェラチオで男を文字通り腰砕けにした少女は七緒（なお）と名乗った。

常人を遥かに超える精液を飲み干したにもかかわらず、まだまだ足りないとばかりに男に詰め寄る彼女が止まったのは、ルームサービスの食事が届いたからであった。

性欲だけでなく食欲も大変旺盛なようで、室内に備えられた大き目のテーブルには彼女の頼んだジャンキーな料理でいっぱい、幸せそうに口に放り込んでいく。

そんな彼女の様子に当てられたのか、良質な睡眠と適度な——かどうかは定かでないが——消耗が重なったからか、男も料理を次々と腹に収めていく。こんなに食事が美味しく楽しいのもまた、久方ぶりであった。

互いの食い意地に笑みを零しながら、2人はそれぞれの身の上をぽつりぽつりと話し始め、そして冒頭の言葉に行きついたのである。

「ゆうべのおじさんほんつとに死んじやいそうだったんだよ？ 顔は真っ青だし手は氷みたいに冷たくってさ。おかげで大変だったんだから感謝してよねー。ってかさ、こんなJKに助けられてるようじゃダメじゃん。ダメダメじゃん。マダオだよマダオ」

己の過ごした年月の半分しか生きていない少女に痛い所を突かれ、ぐうの音も出ないとは正にこのことであった。確かに迷惑をかけたのは事実だ。というより、先程のイラマチオなんぞは警察に突き出されたって文句など言えたものでもない。そもそも女子高生とラブホテルにいること自体、世間様にバレたら即終了である。テレビやネットで未成年淫行の不屈き者として、社会的死を丁重に賜ることとなるであろう。

この人形のように美しく、それでいて淫魔が如き奔放な少女にどれ

だけ救われているのか。全くもって情けない大人である。

「まあさ、ブラック企業っていうんでしょ、そういうの。なんでやめないの？ やめさせてくんないだけ？」

ピザに齧り付きながら心底不思議そうに尋ねてくる七緒に対し、ミックスナッツを摘まみながら男は明確に答えることができなかった。

言われてみれば、なぜあんな職場にしがみついているのだろうか。何度か辞めると言った時に人格否定なんて生易しいレベルの罵詈雑言を吐かれて委縮したからか。そもそも入社時の研修でそれまでの人格など粉々に粉碎されたからか。ただでさえ自己肯定感が昔から低かったのに、それを長い年月をかけて念入りに叩きのめされてきたからか。就職氷河期と呼ばれた当初の苦い記憶から、転職活動なんて上手くいきやしないと勝手に決めつけていたからか。

——いや、違うな。

「面倒だったから？ なにそれ、それで死にそうになってたの？

……おじさんさ、もうちょつと自分を大事にしなきゃだめだよ。せつかく立派なおちんちん持つてるんだからさ、使ったげないとかわいそうじゃん」

ちんこが？

「そ、ちんこが」

あっけらかんと言つてのける目の前の少女は、人懐っこい笑顔を浮かべてパスタとサラダを手際よく取り分けてくれる。

そのあんまりと言えばあんまりな、そしてこの上なく毒気のない彼女に男は声を出して笑ってしまいました。七緒はきよとんと首を傾げていたが、次第に釣られて笑い出した。

もちろん、面倒と一言でいえば簡単だ。実際正しくもある。

しかし、ブラック企業で最も恐ろしいのは、そんな死にそうな状況下でも慣れでそれなりになんとかなってしまう、そのまま時間と体力と精神力を搾り取られるところにある。人間なんてものは割と都合の良いようにできていて、よっぽど酷い状況下でもそれなりに適応し、順応する能力が非常に高い。それが良いか悪いかは別として。

結果として擦り減らされた心に余裕など生まれる筈もなく、家に帰っても飯を食って寝るだけの生活では仕事以外にリソースを割くことすら難儀となり、それでも逃げずに限界を迎えたと……まあ、年間3万人はいる内の一人に——、なんてことになりかねない。冗談ではなく。

「ていうかき、わたしはおじさんの恩人な訳じゃん？ そしたら、わたしの言うことも絶対な訳じゃん？ ね、そうでしょ？ ね！」

心から嬉しそうな顔して無邪気に恐ろしいことを言つてのける目の前のJKに対し、男は両手を挙げて頷くよりほかになかった。もつとも、男には逆らう気も毛頭なかったが。

「よろしい！ それじゃき、まずおじさんはすぐに今の会社を辞める事。——こら、そんな顔しないの。おじさん今32なんですよ？ わたしの倍なんだからき、おちんちん以外にもかつこいいとこ見せてよね。はい、わたしの言うことは？」

——絶対です。

頭を掻きながら苦笑いで答える男を見て、得意げに頷く七緒はご満悦だった。これではどちらが大人かまるでわかったものではない。……まあ、彼女の言葉の真意はともかく、言動や立ち振る舞いは年相応のものであろうか。

「うんうん。さらにさらに、こつちのが重要なんだけどさわたし的には」

ここまでできたらなんでもござれだ。半ば自棄になりながら、お姫様の仰せのままに、と男は答える。まあ、この少女ならそうそう野暮なことと言わないだろう。どうせ使っていない金だ。助けてもらった礼としても、本来なら一生ありえない程の美味しい体験もさせてもらったのだし、安いものだと思は考えていた。

お姫様という単語が相当気に入ったのか、七緒はむふーつ、と仰け反りかえって腕を組み——、

「おじさんの部屋にわたしも住むから！ よろしくね♡」

——大輪の花のような笑顔を咲かせて、物凄く前のめりにそう言い放ったのだった。

「いやいやいや待って待って待って。」

「え、おじさん同棲してた？」

いや、してない。

「あ、住んでる部屋が四畳一間とか！」

親父はそうだったらしいが流石にない。

「そもそも実家？　　ことおじだ！」

実家暮らしの皆さんに謝りなさい。ていうか実家良いんだぞ、金は貯まるし親孝行もできる。

「……ふーん。それはいいけどさ、なんでダメなの？　　こんなに可愛くてエッチも好きなJKと同棲できるんだよ？」

うん、いや、それはまあ、確かに魅力的ではあり過ぎるんだけどね。

一瞬表情が曇ったかに見えたが、その後すぐ本気でなぜだかわからないと頭に？を浮かべる七緒に、男は頭を抱えてうずくまる他なかった。そもそもなんで自分なんだ、他にいくらでもいるだろうに。それに彼氏はどうした。

「まあいるっちゃいるんだけど。金持ちのおっさんとかさ、色々買ってくれるし美味しい物も。でも住むってなるとな、違うんだよねー。おじさんはこう、びびっと来たって感じ！　カレシは高校生だから流石に同居は無理っしょ、タバコもやだし」

顔はちよー好みなんだけどさー。

相も変わらず平然と言つてのける七緒に、若い娘の考えることはわからんと天井を仰ぐ男。ていうか彼氏君タバコ吸ってるのか。いや、自分の頃も吸ってる奴なんていくらでもいたな。

——よく考えてみたら。いや、良く考えなくてもまずはこれを聞くべきだったと男は尋ねる。そもそも家に帰らないと親御さんが心配するだろう、と。

「——普通の家の子だったらさ、こんなことしなれないと思わない？」

伏し目がちに笑いながら、七緒はそう問い返した。

——先程見せた暗い表情は、恐らくそういうことだったのか。会社

を辞めるのと家族を辞めるのでは、大きな隔たりがあるのだろうか。所謂普通の家の子だったと考えている男に、少女の苦悩や葛藤はわかりそうになかった。

数瞬考える振りをして、しかし男の中で答えは決まっていた。帰りたい場所が欲しいのなら与えてあげればいい。こんなうだつのあがない男にもまだ価値はあったのだと、そう教えてくれたこの子の為なら、社会的死など軽いものだ。

なんとも薄っぺらな自意識と正義感に笑ってしまいながら、男は承諾した。安部屋で悪いがそれで良いなら、と。

「ほんとう!? そういうところだよおじさん! そういうところにびびつてきたんだから!」

初めて見せた不安げな表情は、一転してらしい笑顔に戻っていた。内心安堵しながら、どういうところだと聞き返すと、そそくさと近づいてきて男に抱き着く七緒。

「えっへへへ♡ 説教臭くないところ! あと、女の勘つてやつだよおじさん。んじやお腹もいっぱいになったし、まだ時間あるし、家賃の前払いしとかないと、ね?」

部屋だと思いつきり声出せないでしょ?

そう耳元で囁かれ、男の逸物は瞬時に硬さを取り戻し、深い口づけを交わしたのだった。

「んっぎ♡♡♡ ひっ♡♡♡ うぎゆ♡♡♡ ま、まつへ♡♡♡ おじひゃん♡♡♡ やっぱ♡♡♡ むり♡♡♡ このおちんぼ♡♡♡ おつき♡♡♡ ひゅ♡♡♡ お♡♡♡ おつきす——ぎ!?!♡♡♡ オっ♡♡♡ うオっ♡♡♡ ぐっぶ♡♡♡ おっほ♡♡♡ ふっほおおオっ♡♡♡」

しとどに濡れそぼった蜜壺に大きく反りのついた亀頭を押し込まれると、七緒は経験したことのない圧迫感に恐怖とともに酔い痴れていた。魚のように口を開いては閉じ、女陰からくる未知なる規模の快

樂を必死に受け止めようと藻掻く様は、男を余計に駆り立てるだけのスパイスにしかならなかった。

「おお♡♡♡♡ ふっひ♡♡♡ ひろがっ♡♡♡ お、おまんこ♡♡♡♡  
みちみちっ♡♡♡…♡♡♡ あいつ♡♡♡♡ くっほお♡♡♡♡ おじ  
ひや♡♡♡♡ ちゅー♡♡♡♡ ちゅーしへえ♡♡♡♡ ん♡♡♡♡ つふう  
♡♡♡ はっあ♡♡♡♡ んゅ♡♡♡♡♡ ちゅ♡♡♡♡♡ ちゆる♡♡♡♡ ちゅ♡♡♡♡  
♡♡♡ つお♡♡♡♡♡ ほっ♡♡♡♡♡ おオ♡♡♡♡♡」

荒く息を吐きつつも、自分を壊さぬように扱ってくれる目の前の男が愛おしく、幼子のようにキスをねだる七緒。男の首に両腕を回し、互いの唇を啄んでは吸い合い、舌に銀の橋を架け合う。そうしている間も男の剛直はきつく締め付けている筈の膣内を容易く削りながら奥へと侵入を続け、七緒は情けなく口をホの字に突き出し、喉から嬌声を絞り出していた。

「んっぎゅ♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡♡ ほおお♡♡♡♡♡ は、はいっちやった♡♡♡  
あ、あんな♡♡♡♡ おおっ♡♡♡♡♡ おっきいおちんぽお♡♡♡♡♡  
っおっう♡♡♡♡♡ じえんぶ♡♡♡♡♡ はいっへりゅう♡♡♡♡♡」

規格外の巨根を膣内に収めきった七緒は、内から来るその圧倒的な存在感に息が途切れそうな程の快楽を脳に注ぎ込まれていた。それでも彼女の肉ひだは雄を悦ばせようと必死に蠢き、しゃぶりつき、マーキングするかのよう愛液を沁み込ませていく。

「いっぎゅ♡♡♡♡ お、おじひゃん♡♡♡♡♡ らいじょうぶりやから♡♡♡♡♡ う、うごいへ♡♡♡♡♡ もっろいじめて♡♡♡♡♡ どちゅどちゅっ♡♡♡♡♡  
いっばいっ♡♡♡♡♡ おまんこ♡♡♡♡♡ ぐちゃぐちゃにして♡♡♡♡♡  
♡ ちやんとおぼえるから♡♡♡♡♡ おじひゃんの♡♡♡♡♡ おちんぽの♡♡♡♡♡  
かたち♡♡♡♡♡ ね？♡♡♡♡♡ おねがいます♡♡♡♡♡ いっばいあいして♡♡♡♡♡  
え♡♡♡♡♡ なおのこと♡♡♡♡♡ たくさんたくさん♡♡♡♡♡ かわいがっ♡♡♡♡♡  
てくださいー♡♡♡♡♡ つんっほおおお♡♡♡♡♡」

あまりの大ききで自分の腹が歪な形に浮かび上がっているのを感じながら、七緒は男の頬に手を添えて甘く囁く。己を支配し、今この瞬間を快楽で埋め尽くしてくれる雄に精一杯媚びながら、男の理性と優しい心を削ぎ落していく。もっと犯してほしい。遠慮なく、容赦な



どくつどくつ♡♡♡

「ひっ?♡♡♡ んぎゅ?♡♡♡ はひっ♡♡♡ ひっ♡♡♡ ひっ♡♡♡  
のおっ?♡♡♡ おオっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ あっつ♡♡♡  
♡♡♡ あっちゅ♡♡♡ おオっ♡♡♡ おにやか♡♡♡ し  
きゅ♡♡♡ やけっ♡♡♡ やけひやううウ♡♡♡ んっぎゅ  
♡♡♡ ひぬっ♡♡♡ ほんろにしぬううウ♡♡♡  
ほっへ♡♡♡ んっほおお♡♡♡」

まるで膣内で爆発したかのような衝撃が七緒を襲い、猛烈な量の射精があつという間に子宮を満たし、腹を妊婦のように膨らまされていく。異常なまでの快感が全身を駆け巡り、まるで潰れたカエルのような痴態を曝け出し、ようやく長い射精を終えたデカマラが引き抜かれた。それだけで潮を撒き散らし、ごぽっ♡ という音とともに大量の精子が溢れ出る感触で腰をへこらせて絶頂を貪る七緒の姿に、またも本能を刺激された男は――。

「ひゅー♡♡♡ ひゅー♡♡♡ あえ?♡♡♡ お、おじひゃん?♡♡♡  
♡♡♡ まっへ♡♡♡ まっへくりやしい♡♡♡ も♡♡♡ おにやか  
いっぱい♡♡♡ これいじょうはいりやないんれす♡♡♡ ね?♡♡♡  
♡♡♡ もうゆるひて♡♡♡ むり♡♡♡ もうむーり♡♡♡ おねが  
いします♡♡♡ もうゆるっ――っほひよおおおオっ♡♡♡」

結局、七緒は時間を伝える電話が鳴るまでの間、失神しようがお構いなしにたっぷりと、この雄のちんぽの形と味を教え込まされることとなるのであった。

### #3 世話焼きドMエロJKにおはようフェラされたりダメにされたりする話。

「うん、こんなもんかな」

カーテンの隙間からほのかに陽の光が差し込み、鳥達の心地良い歌声が1日の始まりを告げる、平日の早朝。

ありふれた1Kの狭いキッチンで、七緒は慣れた手つきで朝食の準備を手早く済ましていた。今朝のメニューはいつも通り、彼女お手製の味噌汁に炊き立てご飯、生卵に納豆と刻み葱を少々。本来殺風景を極めたような男部屋にあらざる、食欲をくすぐる豊かな香りと、花柄のエプロンに身を包んだ少女が振りまく華やかさと潤いが室内に満ちていた。ただし、エプロン以外は何一つ身に着けてはいなかったが。

「おじさーん？ もう朝だよー。さっさと起きなよー」

すぐそこでだらしなく寝息を立て続けている男に呼びかけはするが、もそもそと寝返りをうつただけで起きる気配がない。

七緒はそんないつもの様子に溜め息をつきながら洗い物を水につけ、洗濯機に衣服やシーツを放り込んでいく。もちろん、自分の下着などに洗濯ネットを使うのは忘れない。

七緒が男の部屋に転がり込んでから、既に2週間が経っていた。

当初の約束通り、男はすぐさま退職の意向を会社に伝え、七緒が持たせておいたボイスレコーダーのおかげもあってその翌日にはスピード退社となった。酷い顔で酷い額の退職金を受け取ってきた男を見て、七緒はその会社に怒鳴り込んでやろうとすら考えたが、もう二度と関わりたくないという男の言葉を聞いてやめた。なにより憔悴しきった男を放っておくことなどできず、頭を抱きかかえてやると子どものように泣きじやくる男をひたすらあやした。

そんなこんなで強烈に母性本能を刺激された為かどうか定かでないが、七緒は男に対して相当なレベルでだだ甘になっていた。もとも

と面倒見の良い性格であったし世話好きでもあったのだが、流石になんだかなあと思うことも多々あれど。

「もう、しょうがないなあ……♡」

とうの昔に雌として子宮を躰けられた七緒にとっては、些細な違いでしかないようだった。

「今日も朝から元気だねー♡ 昨日もあんなに出したのに、おじさんのスケベ♡」

朝から元気一杯の雄の象徴に恍惚としながら、口に啜えたコンドームを器用に被せていく。市販で一番大きいサイズであるにも関わらず、今にも食い破らんばかりに隆起した怒張にうっとり頬擦りしながら、七緒は毎朝の務めを果たすべく大きく口を開いた。

「んああ♡♡ はぷ♡ ふーっ♡ んふー♡♡ じゆるる♡♡  
ちゅっば♡♡ ちゅっばあ♡♡ ちゅっばちゅっば♡♡ れろお♡  
れりよれりよれりよ♡♡ ちゅ♡♡ ちゅっ♡♡ くちゅぐちゅ♡♡  
んっご♡♡ ごおえ♡♡ オっっ♡♡ ひゅ♡♡ ずろろろお♡♡」

顎が外れてもおかしくない、雌殺しの巨大な亀頭に嬉々としてむしゃぶりつく七緒。蛸のように口を窄めて伸ばし、せっかくの美少女が見る影もないおまんこ顔を晒しては、下品という言葉では到底足りない淫猥な音を奏でていく。

亀頭を舐めしゃぶるだけでも相当な労を要する筈だが、七緒はまだまだ足りないとばかりに剛直を喉の奥に引き込んでいく。えずいては涎を零し、涙と鼻水で愛らしい顔をぐちゃぐちゃにしながら、しかしそれが至福の一時であるかのように喉を開いて受け入れてしまう。

「っほおおお♡♡ っきゅ♡♡ ふっっきゅ♡♡ んぐ♡♡ んぎゅ♡♡ ちゅろちゅろちゅろ♡♡ おっ♡♡ おっ♡♡ ふぐ♡♡ ふんぎゅ♡♡ ぬおおおお♡♡♡♡ ほっ♡♡ ほっひ♡♡」

カリ首が上顎を擦る度、オナホと化した喉でちんぽを飲み込む度に視界がぼやけ、頭は爆竹が爆ぜるような悦楽で脳内麻薬を吐き出し続ける。

自ら喉を犯されながら、形の良い尻をたしっ♡ たしん♡ と布団に打ち付け、敷いたバスタオルが到底吸い切れない量のハメ潮を音を立ててひり出しながらアへ顔を晒す七緒。

「ぐっオっ♡♡♡ おぎゅ♡♡♡ ふっう♡♡♡ ふーっ♡♡♡  
フーっ♡♡♡ んみゅ♡♡♡ のお♡♡♡ じゅっぶじゅっば♡♡♡  
ぎゅっばぎゅっば♡♡♡ ちゅー♡♡♡ んっふお♡♡♡ お♡♡♡♡  
おおっ♡♡♡♡ んっぐう♡♡♡♡」

このままずっと啜えていたい。ドロドロに溶け合っていたい。

そんな倒錯的な感覚に幾度も襲われながら、それでも自分には学校があるし、彼には就職活動がある。なにより、せつかく作った朝ご飯がそろそろ冷めてしまう。それは嫌だ。七緒は、自分が作った料理を幸せそうに食べる男を見るのもまた、大好きだった。

「ずろろろお♡♡♡ ちゅーぱちゅーっば♡♡♡♡ んっぐお♡♡♡  
ごっえ♡♡♡♡ ふっぎゅ♡♡♡♡ らひて♡♡♡♡ はやふ♡♡♡♡ るるろぬ  
ろお♡♡♡♡ せーし♡♡♡♡ この♡♡♡♡ だせっ♡♡♡♡ んじゆるじゆる  
♡♡♡♡ つオっ♡♡♡♡♡ ごっきゅ♡♡♡♡♡ ぐぼおお♡♡♡♡♡」

いろいろと天秤にかけて、とりあえず朝食を優先することに決めた七緒はラストスパートをかける。サキユバスも裸足で逃げだしそうなイラマチオで肉棒に吸い付き、隙間から覗く舌で蛞蝓のように竿にカリ首に這いずり回して届けられる快感は、童貞が喰らえばゴム越しですらもうそれ以外では一生射精できなくなりそうな程の悦楽を生み出していた。

ぶびゆる♡♡♡♡ どっぽ♡♡♡♡ ぼびゆるるる♡♡♡♡ ぶりゅ♡♡♡♡  
どっくどっく♡♡♡♡  
「——ふおっ♡♡♡♡♡ がっ♡♡♡♡♡ ぐおえ♡♡♡♡♡ んっほ♡♡♡♡♡ ごっ♡♡♡♡♡  
ぐっぶ♡♡♡♡♡ ぐっ♡♡♡♡♡ のお♡♡♡♡♡ ひっ♡♡♡♡♡ ぐっきゅ♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡ んっぼえ♡♡♡♡♡ おオっ♡♡♡♡♡ おーっ♡♡♡♡♡ ふーっ♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡ んふーっ♡♡♡♡♡」

漸く意識を覚醒させた男に頭をつかまれ、股座にぐりぐり♡ と顔を押し付けられながら、股間の性臭とゴム越しに行われる大量の吐精に目を白黒させる七緒。それでも身体は鳥肌を立てて喜びに打ち震

え、両足はぴーん♡ と突き出して水鉄砲のように潮を吐き出しながら、襲い来る快感を飲み込んでいく。

「——ひゅー♡♡ かひゅー♡♡ うお?♡♡ ほおおく♡♡ ぐ♡♡  
♡ ——つぽん♡♡ おー♡♡ うぎゅ♡♡♡♡ ごえええつぶ♡♡  
♡♡ ——あつは♡♡ おはよ、おじさん♡」

長い長い射精が終わり、デカマラを膨張したコンドームと一緒に喉から引き摺り出される追い打ちでもう一発絶頂し、癖になってしまったイラマチオ後のげつぶを男に見せびらかす。

寝起きと極楽射精のコンボで放心状態の男にご満悦の七緒であったが、ふと自分の撒き散らした体液による足元の惨状に気づくと何とも言えない感情に襲われるのであった。これがあるから朝は裸エプロンにしてバスタオルを何重にも敷いたりしているのだが……。

(……おむついるかも)

男と無言で顔を見合わせながら、とりあえずシートとバスタオルは追加購入が決定したのであった。

「それじゃおじさん、わたし学校行ってくるから皿洗いよろしくね。シャツはアイロンかけたのあるからそれ着るんだよ。あとお弁当忘れないでね、感想期待してるから！ それからAmazonで吸水シートかなんか探して……最悪おむつ買う……。あ、晩御飯なにが良いカラ○ンしてね。んじゃ行ってきまーす！」

——うん、これ一生頭上がらないやつだわ。

慌ただしく出ていくお袋みたいな16歳のJKに、胃からナニから全て掴まれた32歳の無職男は、無精ひげをさすりながらそう思ったらしい。

## #4 世話焼きドMエロJKの親友に詰められたりいきなりキスされたりする話。

「七緒さあ、最近付き合い悪くない？」

「んえ？ ……そ、そんなことなく、ない？」

「いや、それもうあるって言ってるようなもんだろ……」

「……アツハハー→」

自分の席に着いた途端、わたしの机にデカイ尻を乗つけて来た腐れ縁の夏希に言葉を濁したら速攻で怪しまれてしまい、頭を掻きながら変な声が出てしまった。

何時もの事だが、そのモデルのような体型には思わず溜息が出る。人の机で組まれた脚は日本人離れした長く美しい線を描き、いつもの超ミニスカートから覗く小麦色に焼け、適度に筋肉のついた太ももは大層蠱惑的で、女のわたしから見ても尚魅力に溢れていた。あと尻がデカイ。全体的に引き締まった体付きは昨今の女性にとって理想的な曲線を作り出し、わたしのに比べれば控え目だけどDカップの美乳は制服の上からでもその形の良さは隠せていない。背も高く、運動神経抜群で頭も良い。ただし尻がデカイ。すつきりと整った顔立ち、鋭さすら感じさせる切れ長の目、自分で切っているボーイッシュショートが艶のある黒髪と絶妙にマッチし、普段の言葉遣いや態度も相まって男子はもちろん、女子からの人気も非常に高く、下駄箱にラブレターが入ってない日がない。てか今時ラブレターで……。そしてなにより尻がデカイ。

「……なあ、なんか失礼なこと考えてないか？」

「べつつにく？」

「あたしだってデカくしたくてなったんじゃねーよ！」

「わかってんなら聞かないでよね!？」

「あく。それ美苗（みな）も思うなく」

「「……どっちのいど？」」

「七緒ちゃん」

「反応おっそ！ 相変わらずずれてんな美苗は」

「え〜。そんなことないよふつうだよ〜」

「うん、いい加減その無駄にデカイ乳にばっか栄養送んのやめような。腕ぐぞ〜」

「きやく。夏希ちゃん変態さんだ〜」

「美苗にだけは言われたくないんだよな〜……」

「それは……うん、わかるわ〜……」

このどうにもぽやつとしてるのがもう1人の腐れ縁の美苗。夏希とは対照的に、男子からの圧倒的人気とは裏腹に女子受けが悪いタイプだ。本人は全く気にしてないが。……そもそも気付いているのかどうかすら謎である。

ともかく美苗は男受けが良い。肩甲骨辺りまで伸ばした淡い栗色のゆるふわヘアはつやつやのさらつさらで、先端へとゆるく巻いたウェーブの完成度も合わせるともはや雑誌の表紙を飾れるレベルだ。大きなタレ目がちの瞳とあどけなさの抜けきらない小顔が小動物的印象を与えるが、ぽつてりとした厚めの唇がなんとも言い難い難い色気とその童顔に与えている。身体は全体的にむちつとしていてとにかく抱き心地が最柔の最高で、わたしと夏希はよくクツション代わりに使ってるくらいには感触抜群。そしてわたしより10cm、夏希と比べると20cmも低い149cmの小柄な体に不釣り合いなほどのIカップの爆乳がマジヤバイ。今も机にずっしり乗っけてぼえっぺいるくらいだ。おかげで肩はわたし以上に凝って運動神経が絶望的なことになってはいるが勉強はそれなりにできる。なんですよ。

「最近パパ達がね〜。七緒ちゃんが相手にしてくれない〜って泣いてたよ〜」

「ええ……」

「流石に泣きやしないだろ……。でもまあ似たようなことは言ってたな。どうしたんだよ七緒。金いらなの?」

「あー……ううん。お金はあるよ。もっと欲しいくらい」  
「?」

「……ほほーん」

「……なによそのやらしい顔は」

「まーなー、顔は良いもんなー宮西はなー」

「あくそつかあ。宮西君エッチ上手なんだねえ」

「へ？——あーうん。そうだね、そうそう、そうなんだよねーアツハー☆」

よし、ここはとりあえず龍二のせいにしとこうしよう。最近全然会ってないけど。

都合よく勘違いしてくれた2人にほつとしてたらチャイムが鳴り、夏希はやたらとニヤニヤしながら席に着いた。ちなみに夏希は私の前の席で、後ろは美苗だ。

(すごいや最近おじさんとしかしてないな、セックス)

これまではとつかえひつかえ遊んではお小遣いを貰っていたことを考えれば、随分な変わりようだと思つた。そもそもおじさんからは結局お金もらってないし。部屋は提供してもらつてるけど。というかあのちんこ知つたら他じゃ無理でしょ。だからこそ——、

(おじさんのことはこの2人から絶対隠さないと……)

バレたらまず間違いなくあの2人もハマる。確実にハマる。まずもつてわたし自身がどっぷりハマってしまったているのだから100パーそうなる。それに！ そんなことになつたりしたら！ わたしとおじさんの時間が！ なくなる！ あのちんこ独り占めできなくなる！ ヤダ！ そんなのヤダ！

——あと夏希も色々凄いけど、特に不味いのは美苗だ。アレにおじさんの極悪おちんぼなんて見せたりなんかしたら……。うん、想像するだけでヤバイ。マジヤバイ。超ヤバイ。美苗、ヤバイ。

(はく……。パパ活も、最初は美苗が誘ってきたんだっけ)

意識すればするほど高まる後ろの存在感に謎の寒気を感じながら思いつく。

中学の頃、服やら化粧やら遊びやらと何かと金が必要になりだし、エッチなことにも興味を持ち始めた時分に、美苗がわたしと夏希に話を持ちかけてきたのが切っ掛けだった。本当に何の前触れも脈絡もなかったが。

『七緒ちゃんに夏希ちゃんもー。パパ活って興味ないー?』

『……は。』

(あの時は驚いたなー。夏希も見たことない顔しちゃってさ)

幸か不幸か、好奇心も性的欲求も旺盛だったわたしと夏希は、美苗が大丈夫と言うならとほしいほい付いていつてしまった。結果としてわたしと夏希はそこで処女を散らした訳だが、美苗とその時のパパー——今でも美苗の一番のお気に入り——が与えてきたとんでもない快樂に痛みもほぼなく、中学生からしたら恐ろしくなるような額のお金も貰ってしまい、そのまま今に続いている。まあおじさんのおちんぽには負けてるけどね!

——そして美苗は一体いつからやっていたのか、考えるのも怖くなるくらいのネットワークを当時から持っていたし、夏希は頭も要領も良いからさつきと特定の相手を何人か作って上手くやっていた。

わたしと言えば、2人に紹介してもらいながら適当にやってたんだけど——。

(おじさんはさー。びびつときたんだよねー、びびつとさー。よくわかんないけど)

あのクソ寒かった夜。会う予定だった相手が急遽家庭の事情とやらで来れなくなり、どうしようかとふらふらしていたらおじさんを見つけた。放っておいたら本当に死んじやいそうで、気付いたら声をかけていた。だって——。

(一人ぼっちで寒いのは、やだもんね)

ホームルームを適当に聞き流しながら、1時間目の授業の準備を進めて行く。と、ポケットに忍ばせているスマホが震え、バレないようにこっさり覗いてみる。

”今日はカレーでお願いします”

(——お願いしますですって。もお、おじさんのばーか♡)

年上なのに情けないなあと思ってしまいが、悩みながらこのラオンを打ったんだらうなと容易に想像がつく。その光景に思わず頬が緩みながら、なんだか元気を貰えた気がして怠け癖の染みついた心を奮い立たせる。

(1時間目は数学か……うう、頑張ろ！)

いきなりの強敵に気圧されながら、わたしは眠気に負けないうう気合を入れるのだった。

——ここ最近、七緒の様子がおかしい。

「あー。やっと終わったー」

「そんなに難しいことやってないだろ」

「それは夏希だから言えるんだよ……」

「お勉強教えよつか？」

「嬉しいけど美苗に教わるのは嬉しくない……」

「あーひどいんだー」

「……2人見てると気が抜けるわほんと」

今までの七緒はまじめに勉強なんてしてなかった。試験前になるとあたしと美苗に泣きついてきて死にそうになりながらギリギリ赤点回避して喜んでるのが七緒だった。

なのに最近は、授業中に背中からペンを走らせている音が聞こえてくるし、犬みたいな唸り声もしょっちゅう発している。こうして学校終わりにダルそうにすることはあっても、本当に頭を使った疲れでグダっている七緒なんて試験前の追い込みでしか見たことが無い。

そしてなにより——。

「な、駅前に新しいカフェができてたから寄ってこーぜ」

「わー美苗もイクー」

「言い方ア！」

「えへー」

「あーごめん。今日は先約あつてさ」

ほれ来た。先週先々週に続いて今週もだ。

「今日はじゃなくて今日もだろ」

「んんんーほんつとにごめん！ また今度おごるからさ！ それじゃ！」

「あっおい——」

「——七緒ちゃんイっちゃったね。はやくい」

「だから言い方……」

いつもの調子の美苗にツツコミながら、脱兎のごとく鞆を担いで走り去っていく七緒の背中を目で追っかけるが、あつという間に見えなくなってしまう。運動神経は悪くないんだよなあ。ていうかほんとは頭も悪くないんだ、七緒は。この高校に入れていることがそれを証明してる。ま、比較対象があたしと美苗だから仕方ないな。

「まあいいや。でさ、美苗」

「七緒ちゃんのことー？ 相変わらず嘘が下手だよね」

「——話が早いこつて」

目がちよつとマジな美苗に若干ビビリながら、相変わらず何を考えているのかよくわからんが察しの良い女だと感心する。あたしよりよっぽど頭が良い筈なのに、なんでテストではあんな点とってんだか謎だ。十中八九わざとなんだろうけど。

——しかしまあ、七緒のことになると割と本性出るんだよなーこいつ。

「宮西は？」

「真っ白。返事も碌に寄こさないってキレてたよー。ついでにセツクスも大したことなかったよー」

「ええ……」

「だって宮西君はー。今フリーだよー。それに顔は良いよねーほん」と

「ああ、いや、うん。まあそうなんだけどさあ……」

頭の回転も速けりや手も早いな、今更だけど。あと顔のこと言ってるけどそんなもん普段から全然気にしてないだろ。

とりあえず気になつたら手を出すのが美苗だ。クラスの男子は一回は喰ったって言ってたからな。むしろクラスだと顔が一番アレでデブな中田が凄く良かったとかなんとか言っただけ？

「それでー。夏希ちゃんはどうするのー？」

「んあ？ どうするって——」

「七緒ちゃんの新しい相手だよー。会ってみるー?」

「……知ってんの?」

「もうすぐ就活から帰ってくるみたいだからー。この公園で待ち伏せちやおっかなーって思ってたんだけどー。——行く?」

「……………行く」

——美苗、ヤバイ。

——

「……なんとも冴えないおっさんだな」

美苗の言う駅近の寂れた公園でこのクソ寒い中待ってたたら、ふらつと姿を現した男がそうだと言う。新しめのコートと革靴に身を包んだ、どこにでもいそうな中年男だった。

——あれに七緒が? なんかの間違いだろ。

「なあ美苗、ほんとにあのおっさ——ん?」

「ごんにちは、おじさま。ちよつとよろしいですかあ?♡」

「——はあ?!」

隣にいる筈の美苗にほんとにあの男で合ってるのか確かめようとしたら、いつのまにやらベンチに座った例のおっさんにしな垂れかかりながら声をかけている美苗がいた。

おっさんは明らかに動揺してるようで、焦って周りを見渡してる。まあそらそうだよな、端から見れば未成年淫行で即豚箱行きだ。美苗かなり小つちやいし。乳以外は。……てかいきなり攻めるな、流石は現代の淫魔。

「急に申し訳ありません、おじさま。でも私、どうしても確かめないといけないことが——? ♡ ♡ ♡ あっ ♡ ♡ え? ♡ ♡ あ ♡ ♡ すっご♡♡」  
——いやもうなんか様子おかしいだろ、なにやってんだあの爆乳口リサキユバスは…………? ♡

「んっふ♡ ♡ ちゅ♡ ♡ ♡ ちゅっば♡ ♡ ♡ ちゅ♡ ♡ ♡ はむっはむっ♡

♡ ♡ んちゅ♡ ♡ ♡ ♡ ♡

「ええ…………」

めっちゃキスしだしたんですけど……あのおっさん死んだわ……。

「じゅろ♡♡ じゅる♡♡ んべっ♡♡ ふーっ♡♡ ふーっ♡♡  
おじさま♡♡ 舌♡♡ ベロを出してくださいませ♡♡ 大丈夫で  
す♡♡ ちゃんと見張ってますから♡♡ ほらっ♡♡ べっ♡♡  
んべっ♡♡♡♡ ああん♡♡♡♡ いけずですね、おじさま♡♡♡♡」  
「いや、さつきから何やってんだよ……」

「あれ？♡ 夏希ちゃん？♡」

「あれじゃないだろ、いきなりなに盛って……？」

呆れて帰ろうかとも思ったが、見境なくディープキスまでしだしたので流石に一言はかけとこうと2人に近づいておっさんを見下ろしたら――。

「――あっ♡♡ つ♡♡♡♡ へえっ♡♡♡♡ これ♡♡♡♡ そっかあ♡♡♡♡」

「ね♡♡ これすっごい♡♡♡♡ ねっ♡♡♡♡ こんなのお♡♡♡♡ 七緒ちゃん  
ずるいんだあ♡♡♡♡」

「確かにこれは……♡♡♡♡ ふっ♡♡♡♡ ふーっ♡♡♡♡ 独り占めはだめだよなあ♡♡♡♡」

そう言っただけは美苗の反対側に座ると、おっさんが逃げられないよう左腕に抱きついて、脚を絡ませて動きを封じた。

七緒のやつ……♡♡♡♡ そりゃこんなの♡♡♡♡ あたしらには教えたくないよなあ♡♡♡♡

「こくんまでつかいの♡♡♡♡」

「コートまで押し上げちゃってますよ？♡♡♡♡」

「おっさんさあ♡♡♡♡ あたしらちよーっとおっさんに用があんだけど……♡♡♡♡」

「ほんの少しだけ♡♡♡♡ 付き合ってくださいませ♡♡♡♡ おじさま♡♡♡♡」

## #5 世話焼きドMエロJKの親友2人に煽られたり即イキさせたりする話。

(人参……じゃがいもにタマネギつと。あとは……あつ、コーヒー牛乳！)

おじさんのアパートに近いスーパーで手早く買い物を買わせているだけなのに、わたしの心はそれだけで高なり、自然と目尻も下がってしまふ。おじさんに教えてもらったカレーの隠し味であるコーヒー牛乳をカゴに放り込みながら——ちなみにこれは機密事項らしい、どういうこと？

(夏希と美苗には悪いことしちやつてるかなー)

今日も誘いをすつぽかして飛び出してきてしまったが、まあこれぐらいで今更どうにかなる関係じゃないのは互いによくわかっているし大丈夫だろう。近いうちに埋め合わせはしないと、とは思うけれども。

(ま、お菓子でも作って持ってきや許してくれるっしょ。ついでにおじさんにも食べさせてあげよつと)

夏希も美苗も、女子の例に漏れず甘いもの好きだ。特に夏希はそういった物には目がなく、新作スイーツやら新しいお店なんかは目ざとく見つけてくる。それでいて良く食べるのにあの体型なのだから羨ましいことこの上ない。所謂太りにくい体質なのだ、夏希は。美苗は美苗で大体胸に栄養が行って腹にはそこまで付いたりしなかったりする。

(……なんか腹立ってきた。砂糖も卵も山盛り決定)

しようもない八つ当たりを考えながら、おじさんの分は甘さ控えめにする為に別で作らないと。あまり甘すぎる物は胃に堪えるらしい。

ちなみに砂糖も卵も山盛りにした分は自分も食べるので盛大にカロリーブーメランを喰らうことになるのだがこの時のわたしは気付いてなかったりする。

(さてさて、栄養満点カレーでおじさん元気にしちやうからねー!)  
大量の肉とらつきようをカゴに突っ込みながら、わたしは今日もノリノリで買い物を買ませるのだった。

「逃げようとしたら大声出すからな? まあなんにしる無理だけど」

絶対逃がさねーからこんな上玉♡♡」

「大丈夫ですよおじさま♡ ほんの2時間程、私たちに貸して下さいただで構いませんから♡ このお♡ でつかくてえ♡♡ つよつよのお♡♡♡ ぶつといお・ち・ん・ぽ♡♡♡」

ここ最近のあり得ざる幸せの反動として、地獄へのお迎えがとんでもないトランジスタグラマーな美少女の形をして現れたと思ったら、これまたとびきりの褐色美人も加わって両脇から抱き着かれ、柔っこい身体を押し付けられ、若い雌特有の甘ったるい匂いに頭をやられ、しかも無遠慮に股間をまさぐられるという奇天烈な状況に、男の脳内はキャパオーバーを起こして完全に思考が停止してしまった。

「っはあ♡♡ 昼間の公園では流石に不味いですから移動しましょうか♡ ご安心ください、イイ場所を知っておりますので♡♡ あん♡♡ んっふう♡♡♡」

「ふーっ♡♡ ふーっ♡♡ なあ♡♡ 早く行こーぜおっさん♡♡ あたしら2人侍らせるなんて中々できねーんだからな♡♡ ちゅ♡♡♡ ちゅるちゅぱ♡♡ んれれえ♡♡ にゅぷれろお♡♡♡」

七緒というまさに奇跡のような娘が傍にいてくれるのだから、なんとか逃げだそうと全くもって回らない頭で考えるがさっぱり案が浮かばない。本当に大声でも出されたら即死はまず免れないし、世間の目が”絶世の美少女×2 VS. しがない中年男”ではどちらを取るかなど考えなくてもわかる。ゴ○ラ対イグ○ナ並に勝ち目がない。しかも2人の力が思ったより強く、追い打ちとばかりに全身を襲い始めた快感に、所詮無駄なあがきでしかないことを男はすぐにわからされた。右腕をとんでもないサイズの爆乳でむにゅ♡ も

にゅ♡ と揉みしだかれては艶色たつぷりの声で脳はふやけ、片や反対側では発情しきった吐息と唇、そして蛇のように蠢く細長い舌で耳の穴まで犯されていた。追い打ちとばかりに肉棒を2匹の雌の小さな指でカリ♡ カリ♡ と引つ搔かれては欲情を煽られまくる。

「〜♡ はっ♡ はっ♡ あーやつば♡ この大きさ反則だつて…♡♡ こんなフル勃起ちんぽのままじゃ帰れないだろ？♡♡ ふっ♡ フーっ♡ あたしらがた〜っぷり又いてやるからさあ♡♡」  
「ギー汁コキ捨て専用肉便器でえ♡♡♡ いっぱいお精子排泄♡♡してイってくださいませ♡♡♡」

恥も外聞もなく、舌を放り出して中空をれろろお♡ と舐め回し、淫蕩一色に染まった4つの瞳に見染められ発情しきった雌に抗する術など持たず、理性も自制心もぶっ飛んだ男は、連れられるがままに公園を後にしたのだった。

「んむっ♡♡ ちゅっ♡♡ ちゅー♡♡ ちゅりゅろお♡♡ んーま♡♡ ちゅーっば♡♡♡ はむ♡♡ むふう♡♡ じゅるるう♡♡♡」  
「あっ♡ 美苗ばつかずるい♡♡ 私もちゅー♡♡ べろちゅーしたい♡♡ おっさん♡ あたし♡ あたしもお♡♡ んれ〜♡♡♡ へっへっ♡♡♡」

ラブホテルの一室、キングサイズのベッド脇に腰かけた男に小柄な方の少女が真っ先に飛びつき、飢えた獣のようながつつきようで男の唇を貪ってきた。みなと言うらしい娘の甘く極上のベロフェラと、胸板に押し付けられる圧倒的爆乳の感触を楽しみながら、お預けを食らった方——この子はなつきというらしい——を横目に見る。先程までの勝ち気で男勝りな態度が嘘のように鳴りを潜め、男に縋りつきながら媚びへつらい、七緒よりも更に伸びる舌を犬のように垂らしている。

「——ふおっ？♡ ほっへ？♡ おっ？♡ ほおお〜♡♡ ひや

め♡♡♡ ひた♡♡ べろであひよんじやらめえ♡♡♡ オっつ  
ほっ♡♡♡

随分と寂しそうに、そして実に卑猥に蠕動ぜんどうするその舌を、無造作に  
挿んでは捏ねくり回してやるとまるでクリトリスを弄られているか  
のように褐色の長身が嬉しそうにビクつき、だらしなくアへりながら  
快感に浸っていく。

「えあっ♡♡♡ ふゆ♡♡♡ のお♡♡♡ ほっひゆ♡♡♡ ひよほお♡♡♡  
あイツぎゆ♡♡♡ しゆぐいきゆ♡♡♡ べろらへで♡♡♡ しよくい  
きしゆりゆう♡♡♡ いつきゆいつきゆ♡♡♡ くっほおおくく  
♡♡♡」

「んべっ♡♡♡ ぢゆぞぞぞ♡♡♡ つぽん♡♡♡ やあ♡♡♡ やあだ♡  
♡ だめえおじさまあ♡♡♡ わたしも♡♡♡ 美苗のこともちやん  
と見へえ♡♡♡ ちゅーすりゆ♡♡♡ もっといっぱいべろちゅーす  
りゆのお♡♡♡」

舌だけで簡単に絶頂するあまりのクソザコっぷりに感心しながら  
弄り倒していると、美苗が嫉妬したかのようにさらにさらに激しく舌を絡ま  
せ吸い付いてくる。まるで溶け合うような、繁殖欲を猛烈に刺激する  
唇を介しての交尾。そのあまりの勢いに押し倒され、舌から手を離す  
と夏希がベツトに倒れ込む音が聞こえた。と同時に、ぷじゅっ♡ ぷ  
しゅっ♡ と淫靡な水音が中耳を叩く。

「んじゆ♡♡♡ ぐちゆ♡♡♡ くちゆ♡♡♡ じゆぶつくぶ♡♡♡ じゆぞ  
ぞぞぞお♡♡♡ んふー♡♡♡ フーーツ♡♡♡ りゆるちゆっ  
ぱあ♡♡♡ ——ああ♡♡♡ 見てくださいおじさま♡♡♡ 舌を弄ら  
れただけでこんな♡♡♡ ふへっ♡♡♡ 潰れたカエルみたいな姿を晒し  
て…♡♡♡ つはああ♡♡♡ こくんな情けない雌犬はあ♡♡♡ 罰  
としてしつかり躰けないと…♡♡♡ ふふっ♡♡♡ そうは思われませんか  
? ——おじさま」

男に馬乗りになった美苗が、互いの口内で混ぜ合わせ過剰に粘つい  
た唾液をずろろお♡♡♡ と幸せそうに啜りあげ、口吻こうふんを舐めずりなが  
ら夏希を見下ろす。白目を剥いて舌を放り出し、品無く股を開いて潮  
を撒き散らす夏希の耽溺たんできな様に身震いしながら自身を掻き抱く美苗。

サデイスティックに目を細め、とても少女とは思えぬ意図の読めない底無しの瞳に、男は心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥っていた。

無意識に唾を飲み込んで固まる男に薄ら笑いを浮かべる美苗。雄の胸板に透き通るかのような柔肌を預け、大きな乳房を卑猥に歪ませ、天使の様に微笑みながら悪魔が如き囁きを男の耳元で告げていく。

——底冷えしそうな程に勾引で蠱惑的な少女の声に身魂を掻き乱されながら、男は美苗を押しつけて幽鬼のように立ち上がり、空ろな目で夏希を見下ろしていた。

「——ごめんね七緒ちゃん。2時間じゃ済まないかも♡」



すだけのクソザコおまんこ女に成り下がった夏希ちゃん♡♡♡

「ふごっ!?!♡♡♡ ぷぎゅ♡♡♡ スウーーツ♡♡♡ つ  
はああーーツ♡♡♡ おイツギユ♡♡♡ いくつ♡♡♡ ぶっひ  
♡♡♡ いくイツグ!♡♡♡ いぐいぐいつくく——おオッ!♡  
♡♡♡ んっほ♡♡♡ ふっひ♡♡♡ ぶっひゅ♡♡♡ ぶっ  
ひよおおおくくく♡♡♡♡♡」

ぶっしよ♡♡♡ ぶしゃっ♡♡♡ ぶしゅっ♡♡♡ びゅびゅっ♡♡♡ びゅっば  
♡♡♡

一際野太くも甲高い、獣以下のアへ豚アクメを晒してイキ潮を飛ば  
しまくる1匹の雌豚♡ クールで男勝りで魅力的、男女問わず惹きつ  
ける学校のカーストトップ。そんな夏希ちゃんの普段の姿からは、普  
通なら想像もつかないであろう浅ましい雌オナホっぷりを特等席で  
眺めながらのオナニー♡ ——オっ♡♡♡ つふう♡♡♡ フーーツ♡  
♡♡♡ わ、私も軽イキしてしまいましたあ♡♡♡

「——おいつきゅ♡♡♡ つ♡♡♡ っ♡♡♡ っ♡♡♡ ひゅー♡♡♡ フ  
ひゅー♡♡♡ ほおおくくく♡♡♡ あえ? ——んっご!?!  
ぐおっえっ?♡♡♡ オっ♡♡♡ つ♡♡♡ おオっ♡♡♡ ぐぶ♡♡♡  
ごっぽお♡♡♡ ふーっ?♡♡♡ フーーツ♡♡♡ ずろろろ  
ろお♡♡♡ うっおオっ♡♡♡ っ♡♡♡ ぐえっ♡♡♡ あがつ!♡♡♡ ほっ  
ぎよ♡♡♡ のおくくっ?♡♡♡♡♡」

——うっわえっぐ♡♡♡♡♡

健康的な美を象徴するかのような褐色肌の、まるでモデルのように  
美しく、ともすれば凜々しさすら感じられる筈の夏希ちゃん的美貌。  
その色香すら漂わせる首が無理やり押し広げられ、いきり立った肉塊  
で無遠慮にぶち抜いて犯し出したおじさまに、私は子宮がきゅんきゅ  
んと収縮してしまうのをはつきり自覚していました♡ 犯す通り道  
を確保するために顎を反らされ、無様に鼻提灯を膨らませて陰毛塗れ  
の顔に顎骨が外れそうなものもお構いなしに雄の獣欲を受け止め続け  
るしかない夏希ちゃんと、壊れた機械のようにただひたすら快樂を求  
めて鬼畜イラマを続けるおじさま♡♡♡

「いぼほお♡♡♡ っ♡♡♡ ぐっえ♡♡♡ おっぎゅ♡♡♡ ぶんっ

ぎゅ♡♡♡ ひっひっ♡♡ ヒュー♡♡ ふひゅー♡♡ ひ、ひ  
にゅ♡♡♡ ひにゅイツギョ!♡♡♡ の“お”おオ”っ!♡♡♡  
うっオひぎゅっ♡♡♡ ぶっひゅ♡♡♡ ぷぎよおおお♡♡♡  
♡」

女の子の大事な大事な顔とお口を性欲処理の道具としか考えていない扱いを受けているにも関わらず、七緒ちゃんに負けず劣らずのクソザコドMな夏希ちゃんは嬉々として受け入れ、仰向けで寝ている筈の腰は天高く突き上げられ、爪先立ちのガニ股でマゾアクメを決めまくってイキ散らかすメス豚っぷりに私は感動すら思えるのです♡  
はああ♡♡ 夏希ちゃんも七緒ちゃんも開発しといて本当に良かった♡♡♡

——あっ♡ おじさまが唸ってもつと激しく♡♡ もうザーメン  
出ちやうんですね♡♡♡

「おっひよ♡♡♡ おオ”っ!♡♡♡ お”っお”っお”っ♡♡♡ ん  
いっぎゅ♡♡♡ っッグ!♡♡♡ ふっフーっ♡♡♡」

「おじさま♡♡♡ もうお精子出ちやいますか?♡♡♡ 出ちやいますよ  
ね?♡♡♡ 良いんですよ♡♡♡ 思いつ切りびゅー♡♡♡ びゅー♡♡♡  
って射精して♡♡♡」

さつきから噴水みたいにダダ洩れの喉ハメ潮を撒き散らかす夏希  
ちゃんを見下ろしながら、私はおじさまの耳元であまくく囁いて差し  
上げます♡♡♡

「んぽおおっ♡♡♡♡♡♡♡ み、みひゃ♡♡♡♡ たしゅ♡♡♡ たしゅけ  
——っごおえ!♡♡♡ ひひよお♡♡♡ んのイツグ♡♡♡ つぷお♡  
♡ ひっぎゅうう!♡♡♡♡♡」

「ほらおじさま♡♡♡ 見てくださいこのなっさけないメスイキ顔♡♡♡  
おじさまのおちんぽ様で喉マンコどちゅどちゅ♡♡♡ 雌イキし  
まくってます♡♡♡ こんなクソザコお口おまんこはあ♡♡♡ おじ  
さまのつつよっよザーメンでえ♡♡♡ 止めを刺してあげてください  
ませ♡♡♡♡ ほらどっびゅん♡♡♡ どびゅびゅっ♡♡♡ つ  
♡♡♡ ——いいからさっさとだせっ!」

——どびゅるるる!! ぶっびゅ!♡♡ びゅっぼ♡♡ どりゆりゆ

りゆりゆん!!♡

「————♡♡♡♡♡ おげっ?!♡♡♡ っおっ!! ♪ぶぴゅっ  
?♡♡ —♡♡つきゅ♡♡♡ っつきゅ♡♡♡ っつきゅ♡♡♡  
!♡♡♡ フー————♡♡♡♡♡ っつきゅ♡♡♡♡♡  
ぬオっ♡♡♡♡♡ っつきゅ♡♡♡♡♡ っつきゅ♡♡♡♡♡  
「あっは♡♡♡ これすっ♡♡♡♡♡ えっぐ♡♡♡♡♡ —夏希ちゃん嬉  
しいね♡♡♡ っこんなにっばい愛してもらえてるよ♡♡♡♡♡  
「ひゅー♡♡♡ ひゅっ♡♡♡♡♡ ひっ♡♡♡♡♡ ひにゅ♡♡♡♡♡ みにや♡♡♡  
みにやああっぐっえ♡♡♡♡♡ ぐつきゅ♡♡♡♡♡ っつきゅっぐつきゅっ♡  
♡♡♡ っつきゅん!!♡♡♡♡♡ っつきゅ♡♡♡♡♡ —ひにゅ  
うううっオ♡♡♡ アイツギユっ♡♡♡♡♡」

私の一声がトリガーとなって、恐ろしい量の精液を次から次へと夏希ちゃんの胃に流し込んでいくおじさま♡ うっわ鬼畜う……♡♡  
夏希ちゃんの引き締まった綺麗なお腹が無数の精子に犯し尽くされながら、おじさまの痙攣と合わせてどんどん膨らんでいってます♡  
あっは♡♡♡ こんなの人間の射精量じゃないです♡♡♡ お馬さん♡♡ 種付け用の?殖馬でもなきやこんな量出せない♡♡♡ このおじさまやっばあ♡♡♡ 七緒ちゃんがハマる訳だね♡♡♡

「——お♡♡♡♡♡ っつきゅ♡♡♡♡♡ っつきゅ♡♡♡♡♡  
ほっお♡♡♡ フー————♡♡♡♡♡ っつきゅ♡♡♡♡♡  
びゅぐっ!♡♡♡ びゅっ♡♡♡ びゅっば♡♡♡

「んっちゅ♡♡♡ っじゅごごごお♡♡♡♡♡ ちゅっちゅっ♡♡♡ ちゅっばちゅっば♡♡♡♡♡ ちゅーっばあ♡♡♡♡♡ っむっふ♡♡♡♡♡ っんっぎゅ♡♡♡♡♡ っつきゅん♡♡♡♡♡」

「夏希ちゃん全部飲めたね♡♡♡ えらいえらい♡♡♡♡♡ おじさまも気持ちよさそうにお精子排泄してたよ♡♡♡ —お腹はぽっこり膨らんじやってるけど♡♡♡♡♡」

「んっも♡♡♡♡♡ っんっも♡♡♡♡♡ ちゅっばちゅっば♡♡♡♡♡ ちゅーばちゅーっば♡♡♡♡♡」

「あっは♡♡♡ っぜんっぜん聞いてないね♡♡♡このちゃんほ狂い♡♡♡♡♡」  
ぐっちゅ♡♡♡ —ずろろろお……ちゅっ♡♡♡ —っっっっばんー!

「のっお♡♡♡んっほ♡♡♡ほおお♡♡♡——っばああ♡♡♡  
♡♡♡くっうっぐ♡♡♡ぐっぼお!♡♡♡ごっえ♡♡♡お  
ええええっ♡♡♡んっぎゅ♡♡♡——くっくっツ♡♡♡げえ  
ええええっぶ♡♡♡♡♡」

夏希ちゃんの喉奥を使つて最後の一滴まで絞り尽くすように射精しきつたおじさまが、その規格外のおちんぽをゆっくりと引き抜いていきます♡ それだけで情けなく潮を噴き出し、糸で釣り上げられる魚のように浅ましくおちんぽ様にむしやぶりつきながら口をのばしまくる不細工なちん媚びフェラ顔を晒す夏希ちゃん♡ 少しイラついたおじさまに強引に餌を引っこ抜かれて伸びたと思つたら、せっかく恵んで頂いたザーメンを鼻から口から逆流させて、最後は下品な言葉じゃ済まされない特大のゲップを披露してくれました♡♡

はあああ♡♡♡♡♡ もう最っ高♡♡♡♡ ———あいつク♡♡♡

「ひゅ————♡♡♡♡♡ ひゅ————♡♡♡♡♡ つ♡♡♡♡ おくくく♡♡♡♡」

「はっ♡♡♡はっ♡♡♡はっ♡♡♡お、おじさま♡♡♡おじさまあ♡♡♡♡」  
もうだめえ♡♡♡もうむり♡♡♡もうむーり♡♡♡がまんできない♡♡♡  
犯して♡♡♡♡♡ 美苗のこともっ♡♡♡早く犯してえ♡♡♡♡♡

「——ああ♡♡♡♡♡ おじさま♡♡♡♡♡ どうかこの哀れな雌牛も使つて♡♡♡  
♡♡♡ まだバッキバキのつよつよおちんぽ様でえ♡♡♡♡♡ お好きなように♡♡♡ 犯してくださいませ♡♡♡♡♡♡♡♡」

## #7 世話焼きドMエロJKの親友にドスケベポーズさせたりガチハメしたりする話。

「はっ♡ はっ♡ おじさまぁ♡♡ 早くっ♡ 私♡ 美苗のおまんこ♡♡ 恥ずかしい本気汁でとろつとろのJKマンコ♡♡ 準備できてます♡♡ 夏希ちゃんが滅茶苦茶にされてるのを見てこんなにしてるはしたない雌穴をっ♡♡♡ 思いつきり犯してください♡♡」

自分でもわかります。ここのところなかった、いいえ、もしかしたら初めてかもしれないくらい。それくらいに私の身体は、蕩けて火照っておかしくなりそうなレベルで発情しきっています♡ 使い捨てオナホよりも酷い使われようでイキ散らかして失神している夏希ちゃん♡♡ 怖いくらいに目の据わったままの、凶器のように太く、大きく、逞しい、精力に満ち溢れたおじさまのおちんぽ様♡♡ 膣壁をこそぎ落とす為だけにあるような、異常に反り返ったカリ首♡ 血管が浮き出てでっぷりと太った陰莖部♡ 私を孕ませるために精子を作り続けているのが見て取れるように大きな金玉袋♡♡ この一室にいる私以外の雄と雌の存在が、この上なく性欲と繁殖欲と駆り立てては煽り倒してきます♡♡ ——ああもう♡♡ 危険日じゃないのに排卵しちゃいそう♡♡♡

「あぁん♡♡ おじさまぁ♡♡♡ お願いします♡♡ 焦らさないで♡♡ ねっ♡♡ ほら♡ 早くっ♡♡ おまんこっ♡♡ どちゅどちゅして♡♡♡ おちんぽはんっ♡♡♡ 大事なザーメンまんこにびゅっびゅ♡♡♡ 子宮にいつぱいごっくんさせてえ♡♡♡ ——えっ? あ、そんな♡♡ やっ♡ やあだ♡♡ わ、わかりました♡♡」

おじさまの足元で仰向けに転がって、脚を開き切って服従の雌犬ポーズ♡ おっぱいが重力に負けてだらしなく脇に垂れ、女の子の一番大事な弱点を晒してのちん媚びアピール♡♡ それでもおじさま

はおちんぼ様を入れてくれませんか♡♡ それどころか、もつと下品に  
情けなくアピールしてハメ乞いしないと帰るだなんて♡♡ そんな  
の酷すぎます♡♡♡ だからしょうがなく♡♡ これからすること  
はしようがなくなんですよ？♡♡ いつもなら絶つっつ対こんなこ  
としないんですからあ♡♡♡♡ ふへっ♡♡♡♡  
「ふーっ♡♡ フーッ♡♡♡♡ み、見てくださいおじさま♡♡ 美苗の  
おまんこ♡♡ ふっう♡♡ いっつぱいっつぱがあつてとおつても気  
持ち良いんですよ♡♡♡」

下手くそアピールしかできないダメな雌犬を見下ろすおじさま♡  
そんな蔑んだ視線にぞくぞくしながら♡ 私はおちんぼ様が挿入  
して頂きやすいように限界まで腰を押し上げます♡♡ さらに爪先  
立ちに加えて、くっそ情けないガニ股でおまんこの中までよく見える  
ように必死です♡♡♡ あ、これきつつ♡♡ 下半身全部ぶるぶるして  
る♡♡

「へっへっ♡♡ あ、穴もちっちゃくてちゅうちゅうザーメン催促♡♡  
おちんぼ様に媚びへつらつて吸い付いちやうんです♡♡ |  
| おっ♡♡ 背も低いからお手軽ちんコキ肉オナホ♡♡♡ おじさ  
まのいらぬザーマン扱き捨て専用オナティッシュ♡♡♡ ほっ♡  
♡ ほっ♡♡♡ 149cm Iカップの淫乱JKオナドールでえ♡♡  
♡ 無責任中出し孕ませ交尾でいっぱいどぴゅどぴゅ♡♡♡ お精  
子たっぷり恵んでください♡♡♡♡」

思いつく限りの下品な単語をひたすら並べたてて蜜壺に誘惑♡  
ただただおじさまの交尾欲を高めて犯してもらおうとする為だけに  
腰をカックカクにヘコらせ♡♡ デカ乳揺らして♡♡ 尻を振りたくつ  
ては愛液を飛ばす私の姿は、この上なく滑稽で浅ましく見えることで  
しょう♡♡♡ でも仕方ないんです♡♡ 全部おじさまが悪いんです  
♡♡ あんなグロくてえっぐいおちんぼ目の前にして♡♡ お預け  
なんて絶対無理——？

「——おっ?」

ぷっちゅん♡♡ みちみちっ♡♡

「——?..?♡♡♡♡」



おオっ？♡♡♡ おじしやま？♡♡♡ はいっちやだめなとっこ♡♡♡ しきゆ♡♡♡ なか♡♡♡ なかあっおイックいぐ♡♡♡」  
ぼっちゆぼっちゆ！♡♡♡ どちゆどちゆどっちゆん♡♡♡ ぼりゆ！  
「ごりゆ！ ぼりゆりゆりゆりゆんっ！！♡♡♡

「っほおおお♡♡♡ ふっへ♡♡♡ おかしやれ♡♡♡ おっあでりゆ♡♡♡ なかつ♡♡♡ ひっひっ♡♡♡ ひきづりだしやれ——ぬおオっくくっ♡♡♡ ほっおでっつりゆ！♡♡♡ なかみじえんぶ♡♡♡ でゆううううっオっいっつぐうっ！！♡♡♡」  
びゅっぶー！ びゅっばー！ びゅち♡ ぷしっ♡ ぷしやあああ♡♡

と♡♡♡ とまんない♡♡♡ 潮吹き♡♡♡ ずっ♡♡♡ ずっひよ  
出てる♡♡♡ おああ♡♡♡ おっぱいい♡♡♡ ぼっちん♡ ぼっち  
ん♡ ってへえ♡♡♡ ぴしゅとん♡♡♡ ガチピスしゅごしゅぎ♡♡♡  
お乳跳ね回っつてりゆ——？♡♡♡ のオっ？♡♡♡

ぎゅむ！ ぎゅつちー！ ぎゅううううう！！

「びっ！♡♡♡ あっぎや♡♡♡ ぐっオっ♡♡♡ ぐっ？♡♡♡  
やっ♡♡♡ やめっつ♡♡♡ やめへえ♡♡♡ おっぱ♡♡♡ おっぱひっ  
かんひや♡♡♡ オっオっイクっ♡♡♡ ちぎれ♡♡♡ おっぱい  
ちぎれりゆう！♡♡♡」

ひ♡♡♡ ひっどお♡♡♡ こ、腰じゃなくておっぱ♡♡♡ おっぱい掴ん  
でガチハメピストン♡♡♡ のおオっくくっ♡♡♡ 伸びりゆ♡♡♡  
♡ ちゅぶれりゆ♡♡♡ おっぱいもぶっ壊されりゆのおおお！♡♡♡

ぎゅりー！ ぎゅつちいー！ ばっこー！ ばっちゆばっちゆー！♡

どっちゆどっごんー！♡♡♡ どぢゆどぢゆどぢゆどっちゆんー！♡♡♡  
「あ——♡♡♡ あ——♡♡♡ イクイクイク♡♡♡ イック  
イック♡♡♡ のおあいつぎ♡♡♡ ぎっひ♡♡♡ ひっ♡♡♡  
ひよっほ♡♡♡ っほオっイグっ♡♡♡ オっ♡♡♡ オっ♡♡♡  
♡♡♡ んほおお——♡♡♡」

もっ♡♡♡ もおわけわかんない♡♡♡ あ——♡♡♡ むりっ♡♡♡  
む——り♡♡♡ しぬ♡♡♡ とぶっ♡♡♡ くっほ♡♡♡ くるっひや

♡♡♡ のうみそがらっどがらう♡♡♡

ばっちゅばっちゅばっちゅばっちゅ！♡♡♡ どっっっっ——りゅりゅん

!!♡♡♡

「んのおオ”~~~~♡♡♡♡♡」

ぼっびゅー！ぶびゅるるるる！！どっぼーっぼーっぼー

びゅー♡♡♡ びゅー♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「——っはっくえ？♡♡♡♡」

——あっ、これ、とどめ——。

びゅっぼー！♡♡♡ びゅちちちっ♡♡♡ びゅば♡

♡♡♡ びゅ~~~~♡♡♡♡♡

「~~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡ おあっちゅー！♡♡♡ あっちゅ

あっちゅ♡♡♡♡♡ あいっ？♡♡♡ のオ”いっぎゅ♡♡♡ イクイ

クいっぎゅんっ♡♡♡ うオ”イっっぐ！！♡♡♡♡♡ あー

ちゅー！♡♡♡♡♡ イッ~~~~っ「♡♡♡♡♡」

——♡♡♡♡♡~~~~♡♡♡♡♡ オ”っ♡♡♡♡♡ いっ♡♡♡ あえ♡♡♡

♡♡♡ しっぎゅ♡♡♡♡♡ やっけ入え♡♡♡♡♡ ——っ？♡♡♡♡♡ ??♡♡♡

♡♡♡ ——。

## #8 世話焼きドMエロJKとお風呂でイチヤイ チャしたりする話。

「もう、おじさん遅いよー。せつかくリクエスト通りにおいしーカレー作ったげたのに。いらなの？ ねえ、わたしの真心こもったステキなカレーはいらなんですかあ？」

帰った途端に頬を可愛らしく膨らませてまくしたてる七緒に平謝りしながら、玄関に漂うカレーの良い匂いに男の腹の虫が盛大に鳴いた。なんせさつきまでかなりハードな運動をしてきたばかりで腹は減ってしょうがない。

何はともあれ――。

「あー、やっぱバレてたかー……ってちよつと！ 土下座なんかしなくていいから！ いいよ別に、いつかはこうなるとは思ってたしき、うん」

ほらほら立って、と優しく覗き込んでくる七緒に涙が出そうになる。随分さらつと流してくれる目の前の少女に対して、本当にこの子は天使か女神なのではないのかと男は本気で信じ始めていた。友達に手を出した訳だから、最悪今度こそ警察に突き出されてもおかしくないと感じはしていたつもりだったのだが――。

「なんで怒らないのかって？ おじさん、わたしちゃんと怒ってるよ。なんでかわかる？ ——違うよー、あの2人はもうどうしようもないからいいの、性欲のカタマリだし。そもそも美苗に隠し事しようとしたわたしがバカだったわ……。とにかく！ 遅くなるなら一言ラ○ンでもなんでもいいから残しといてよ。心配になるでしょ、せつかくご飯作ったのにいらなのかってさー」

どこことなくばつが悪そうに、綺麗な金の髪を指で弄りながら横目に訴えかけてくる七緒。

「ほら、もうわかんと思うけど美苗ってやばいんだよ。何が、って言わ

れると難しいんだけど——って、おじさんめっちゃお腹鳴ってんじや  
ん。とりあえずご飯食べよ。わたしもお腹空いちやった」

いじらしい七緒が愛おしく、安心したところでまた腹の虫が鳴き出  
した。七緒に促されるままりビングに腰を下ろすと、七緒がよそつて  
くれた絶品のカレーに舌鼓を打つのだった。

「はー、食べた食べた。どう、カレーも最高だったでしょ?」

流しで皿洗いをしているおじさんに問いかけると、満面の笑みで泡  
だらけの親指を立ててくれた。期待通りの反応に気を良くしながら、  
それでもやつぱり夏希と美苗のことが頭をよぎる。

聞けばおじさんは、伸びてしまった2人をホテルにほったらかして  
急いで帰って来たそうさ。あの2人ならその方が喜ぶだろうと思っ  
たらしい。

(いやー、そりや確かに大喜びだろうけど本当にそうするって中々さ  
……。やつぱスイツチ入ったおじさんも大概ヤバいって)

そもそもあの2人を相手にして一方的なのもかなりヤバい。夏希  
はそもそも体力オバケだし、美苗もセックスの時の搾り取りっぷりは  
それはもう凄まじく、並の男が1人相手じゃまず話にならないし、そ  
のせいでもっと数を呼んで乱痴気騒ぎになることがザラにある。そ  
れをコテンパンにして平気な顔でやり捨てとか。

(あーあ。やつぱこれ、夏希も美苗も絶対ハマっちゃってるなー)

夏希は真性のDMだし美苗はどっちでもいけるから、間違いなくお  
じさんに入れ込むだろう。だから嫌だったんだけど……。ま、今更  
言ってもしょうがないか。

「ね、おじさん。それ終わったら一緒に風呂入ろ」  
おじさんと最初に出会ったのはわたしだし、心も胃袋も掴んでいる  
のはわたしだ。

流しに立つおじさんの意外と大きな背中に抱き着いては胸を押し  
付け、おちんちんを優しく撫で擦る。



て♡ ってへっこへこの屈服雌犬ダンスを踊っちゃうのお♡♡  
「はっひ♡♡ ひっ♡♡ のお♡♡ い、いつひやったあ♡♡  
ちよっひよちくびちゆねられたらくれえ♡♡ 即イキアクメ決め  
ちやいましたあ♡♡ あ、ひやい♡♡ ちゃんとお身体洗いましゆ♡  
♡ ふーっ♡ んふーっ♡ 前、失礼しましゆ♡♡ おおっ?♡♡」  
ああ♡ おじさんスイツチ入っちゃったあ♡♡ はー好き♡♡ こ  
うなったおじさん大好きなお♡♡ いっぱい虐められちゃう♡  
いっぱい屈服アクメ決めるのお♡♡

低い声で命令されて、おつきくてぶつとい♡ 凶器みたいな雌殺し  
のおちんぼ様を定規みたいにお腹に押し付けられて♡ ここまでぶ  
ち抜いて犯すんだぞって♡ 言われてるみたいでえ♡♡ 想像した  
だけで軽イキすりゆう♡♡

「んんーっ♡ んっふ♡ はーっ♡ はーっ♡ んしよ♡ んっあ  
♡♡ おじさん♡♡ あしっ♡ おまんこ押し潰しちやダメ♡♡  
オっっ♡♡ おまんここしゆれりゆ♡♡ クリ♡♡ クリちゃん  
ちゆぶれりゆ♡♡ はひっ♡ ひっひっ♡ のおっ?♡♡ ん  
ぶっ!♡♡ んちゆ♡♡ ちゆっちゆ♡♡ じゆりゆれるお♡♡ ん  
れえ♡♡ じゆるじゆば♡♡ ちゅーば♡♡ ちゅーっば♡♡  
♡ すきっ♡♡ おじさんしゆきなお♡♡ んっぶ!♡♡  
へっへっ♡♡ じゆるろろお♡♡ えあゝゝゝ♡♡♡♡」

おじさんと向かい合って、おっぱいでいっぱい洗ってあげたいのに  
♡ おじさんが意地悪ばっかりして全然できない♡ ぽっかり開き  
切ったガニ股をゴツゴツした脚で押し上げられて♡ 泡でぬめって  
おまんこクリトリスをゴシゴシされちやってる♡ たまらず頭が  
仰け反って舌が天井向けて突き出ちゃう♡ おじさんはすぐ羽交い  
絞めにくれてえ♡ いっぱいいっぱい♡ 貪るみたいなキス♡  
♡ お口とお口でセックス♡♡ 唾液混ぜっこ交尾してくれるの好  
き♡♡

「んっんっ♡ だめ♡ らめえ♡♡ 洗えな♡ んっひゆ♡♡ ぢゆ  
ゝゝゝ♡♡♡」

あっ♡ はっ♡ も、だめ♡ なんにも考えられな♡ 好き♡ すき

すきつ♡ おじさん♡ あイツク♡♡ キス♡ べろちゅーでい  
ぐう♡♡

「んんっ♡ んちゅ♡ きゅ♡ んっぱあ♡♡ はへくく♡♡ はく  
く♡♡ んっ♡ ふっ♡ ——ね、おじさん」

全身を擦り合わせて、溶けて1つになつてしまいそうな感覚に酔い  
痴れながら、わたしはおじさんの目をじつと見つめる。聞いても答え  
なんてわかり切っている、そんな質問をする為に。

「夏希も美苗も、すっごくいい子だから。2人と何したって、わたしは  
構わないの。でも、でもね、おじさんを一番最初に見つけたのはわた  
しだから。だから——」

わかり切つていてもやっぱ怖い。そんな気持ちに蓋をする為に、  
おじさんの身体を手繰り寄せて縋りつく。

「——わたしのこと、捨てないでね。ちゃんと帰って来てね。わたし、  
なんでもするから。ずっとちゃんと……良い子で待ってるから——」  
言い終わる前に、おじさんが震えちやつてるわたしを抱き締めてく  
れた。いっぱい謝りながら、わたしとおんなじで震えながら。

「——ごめんねおじさん。エッチって空気じゃなくなっちゃった。で  
も……ありがとう」

—  
その後は普通にお風呂に入つて、おじさんが泣いちゃったのを布団  
の中で散々弄繰り回してたら、わたしも散々鳴かされちゃいました。  
おまけにうるさ過ぎて退出勧告まで出されちゃって——。

「だーいじょーぶだつておじさん！ 美苗に頼んで良い部屋見つけよ  
！ ほーら！ 縮こまってるじゃないでシャキッと立つ！ わたしとおじ  
さんならなんとかなるつてばー！」

いつものベンチで黄昏るおじさんをいつかみたいに引っ張り上げ  
て。

手を繋ぎながら、わたしたちはまた歩き出したのでした。

## #9 世話焼きドMエロJKと精液ボテセツクスしたりする話。

「ほおおっ♡♡♡♡♡んっお♡♡♡♡♡っお♡♡♡♡♡ あーいつく♡♡♡♡♡  
イツグイツグ♡♡♡♡♡んのお?♡♡♡♡♡オっっ♡♡♡うっオっっ♡♡♡  
♡♡♡♡♡きつく♡♡♡♡♡おじしやんのつよつよおちんぽお♡♡♡♡♡な  
おのよわよわおまんこじゃぜんぜんかてないのお♡♡♡♡♡っほ  
おおおっ♡♡♡♡♡おオっくくまらイグうっオっっ♡♡♡♡♡」

七緒が男の部屋に転がり込んでからもう3ヶ月が経っていた。

なんやかんやで盛り上がると歯止めが利かなくなりがちな2人の情事に耐えかねた隣人からの悲鳴により、前の部屋からは退出せざるを得なくなってしまうていた。その後は美苗に口利きしてもらい、移った新居は防音もしっかりした良い部屋であり、しかも賃料も手頃という素晴らしさに男は愕然とした。

——あの娘何者なんだ、本当に。

勘ぐったとて得られぬ答えに背筋を冷たいモノが伝った男であったが、年相応に無邪気なはしやぎような七緒を見るとそんなことは瞬間にどうでもよくなっていた。所詮は単細胞の一般庶民である故に。精力は除くが。

「おっっ♡♡♡♡♡ふっーっ♡♡♡んっフーっ♡♡♡も、もうりやめ♡♡♡♡♡しぬ♡♡♡♡♡これいじょうしやれひやら♡♡♡♡♡わらひ♡♡♡♡♡へっへっ♡♡♡♡♡おかひく♡♡♡♡♡ゆるひて♡♡♡♡♡おじひやん♡♡♡♡♡えへっ♡♡♡♡♡おねがいします♡♡♡♡♡このままじゃあ♡♡♡♡♡オっっ♡♡♡♡♡のうみしよくるっひや——っおおおオっっ!?!♡♡♡♡♡」

眩いばかりの金髪を振り乱し、芸術品の如く整った美貌は見る影もなくアヘリ、獣のように鳴き喘ぐ七緒。こんな、世の男全てが望み羨むような美少女が己に組み伏せられて情けなく股を開き、屈服し媚びへつらって許しを乞う様は、何度味わっても決して飽きることはない

だろう。

分身たる雄の象徴で眼下の少女を貪り墮とし、少女もまた言葉で拒むことはあっても、その実心からこの男が与える快樂の虜であり、共依存のような関係にどっぷり浸かっているという、まやかしのようない現実が男の獸欲を無限に掻き立て続けていた。

「ひっひっ♡♡♡ おじしや♡♡♡ にゃんれ♡♡♡ はげしっ♡♡♡  
もっろはげしいのおおオっ!!♡♡♡ つ♡♡♡ オっ♡♡♡  
おっほ♡♡♡ しきゅ♡♡♡ しきゅうちゅぶれりゅ♡♡♡  
おまんここわれりゅ♡♡♡ あかひやんのへやいじめちややらあ♡♡♡  
ふっほっ♡♡♡ んのおっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
ぼっちゅ♡♡♡ ぐっちゅん♡♡♡ どっちゅどっちゅ♡♡♡  
りゅっぐりゅん!♡♡♡ どちゅどちゅどちゅどっちゅん♡♡♡  
ごりゅりゅりゅん!♡♡♡♡♡♡

「ひゅっ♡♡♡ かひゅっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ のオっ♡♡♡  
♡♡♡ あっぎや♡♡♡ んきゅ♡♡♡ ふっほおおおっ?♡♡♡  
♡♡♡ しにゅ♡♡♡ しにゅっ♡♡♡ おちんぽ♡♡♡ おちんぽお♡♡♡  
♡♡♡ あっ♡♡♡ いっ♡♡♡ つっ♡♡♡ ぐ!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡ いくイクイツギユ♡♡♡♡♡♡  
——っのっほおお?♡♡♡♡♡♡

白目を剥き、舌を放り出しては涎を垂らし、豊かに実った双丘は男の胸板に押し潰され、自分を欲望のままに犯す男に必死に縋りつき、暴力的な快樂を受け止め続ける七緒。もはやほとんど言葉になつていない音を喉から絞り出しながら、それでも若く健康的な孕み頃の恵体は雄から精を恵んでもらえるよう、舐りまわすかのように吸い付き決して離そうとはしなかった。

そんな、己の所有物たる雌の健気で愛らしい求愛行動に男も遂に限界を迎え——、

だっばんだっばんだっばんぐっちゅん♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ぐっちゅぐっちゅ♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
ごっちゅ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ぐりゅん♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
「うっオっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ びっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ おっひよ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ぬオっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
♡♡♡ ひゅっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ぶっひゅ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ あっ——♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
どっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ぶびゅ♡♡♡♡♡♡♡♡♡ びゅるるるる♡♡♡♡♡♡♡♡♡

びゅっば♡♡ びゅちちっ♡♡ びゅーー♡♡♡

「あっえ?♡♡♡?♡♡??♡♡ うっオっ♡♡♡ のオっ♡♡♡」

ぶっちゅー!♡♡ ぐっつぢゅん!!♡♡ ぐりゅぐりゅぐりゅ♡♡

♡ びゅっば♡♡♡ びゅる♡♡ どりゅりゅりゅりゅ♡♡♡♡♡

「~~~~~っ!?!♡♡ いっつっく♡♡ オっああっ♡♡♡

あっぎや♡♡♡ ひゅっ♡♡♡ ひっひっ♡♡♡ うっオっ♡♡♡

おオっ♡♡♡ お、おにやか♡♡♡ ふくりゃん♡♡♡ むり♡♡♡

おじさ♡♡♡ ぐっオっ♡♡♡ もうむーり♡♡♡ おお♡♡♡

♡ むりっでいっへりゅのおお♡♡♡ イッグっ♡♡♡ イッグ

ぬううっオっ♡♡♡ イッギユ~~~~♡♡♡♡♡♡

雄の長い長い射精で腹を妊婦のように膨らませながら、あまりの強烈な快楽に全身が痙攣して弓反りになり、鼻血まで垂らして終わらない連続絶頂を味わわれる七緒。

男もまた、極上の肉壺に遠慮も配慮も一切なく吐精する極上の悦楽に脳天を貫かれ陶酔しながら、一滴も零すまいと七緒の細くくびれた腰を鷲掴みにし、腰を押し付け、食べ頃の女体を貪り喰らうのであった。

「ご、ごめんねおじさん、ちよつと休ませて……ほんとに死んじゃうーっひゅ?♡♡ くっお?♡♡ んちゅ♡♡ はあっぷ♡♡ ちゅっちゅっ♡♡ ちゅっぽちゅっぽん♡♡ おオっ~~~~♡♡♡」

その後も更に1度射精を終え、まるで男のザーメンタンクのような姿となってしまうた愛しい少女の姿に興奮冷めやらぬ男であったが、

流石に失神から戻ったばかりで息も絶え絶えの七緒を犯す気にはならなかった。それでも七緒の顔に互いの愛液でコーティングされ

切った肉棒を乗せてお掃除フェラさせる辺り、この男も中々籬が外れ

ている。七緒も七緒で嬉しそうに、それでいて器用に舐めしゃぶっているので大概である。

「んん〜〜♡♡ ちゅーっぽちゅーっぽん♡♡♡♡ つはああく♡  
♡ んぐっ♡♡ ちゅ♡♡ ぐちゅ♡♡ ごつきゅん♡♡♡♡ つけぷ♡♡  
ご、ごちそうさまでしたあ♡♡♡♡」

相変わらず劣情の煽り方が天才的な七緒に再度襲い掛かりそうになるが、肩で息をして限界が見える少女に流石にこれ以上無理をさせるわけにもいかなかった。

「あ、あの……あのね？ ごめんねおじさん……。その、ほんとはもつとしてあげたいんだけど……」

何も悪いことはしていないのに、不安そうにする七緒の頭を撫でて労わってやる。

一緒に過ごす時間が長くなるにつれて、七緒はこういつた弱い部分を良く見せるようになってきていた。どうにも彼女は、男の機嫌を損ねたりすると捨てられるのではないかと恐れているようで、捨てられた子犬のような目で見つめてくるのである。当然、男がそんなことをする可能性なんぞ100億%ないのだが。

そもそも、何度も何度も身体を重ねる内に男が七緒も知らなかった弱点を見つけては開発している為、七緒の体力がどうしても持たなくなっているだけなのだ。なので、男は気にする必要はないと七緒に伝えてはいるのだが――。

「うん……。ありがと、おじさん。でも……ごめんね、もうちよつと体力つけるから！ ――ていうかおじさん生意気なだけけど！  
ちよつと前まで童貞だったくせにさー」

努めて明るく振る舞う七緒に幾ばくかの不安を感じつつ、流石に少々自制をせねばいかんと心に誓う男。とはいえ、七緒が魅力的過ぎるが故に上手くいった試しなど一度もないのであるが。悲しいかな雄の性には逆らえない性欲の塊な男は、どうしたものかと無い頭で考えるのであった。

――ともあれまずは、

「そ、それでねおじさん。その、もうそろそろお腹が限界っぽいんだけ

どー……。えっと、トイレまで運んで欲しいな〜って——きやつ」

この時ばかりは恥ずかしくてしようがないのか、もじもじと可愛らしく焦れる七緒をお姫様抱っこしてやり、トイレまで運んでやる。散々腹に詰め込んだ己の精液を、顔を真っ赤にしながらひり出してイキまくる七緒の唇を貪りながら眺めるのが、最近の男の一番の楽しみでもあった。やはりこの男、論ずるに値しないゲスである。

「おじさんさー！ 今日こそはどっか行つててよほんとに恥ずかしいんだからね！ え？ 今まで散々見られておいて今更？ あーっもううっさい！ 嫌なものは嫌なの！ ほら！ もういいから出てって——っくおオゝっ!?」

お、おじさん？　おオゝっ？　だ、だめだつてば　りやめ　んのお　おにやかおしちや　あ　やっ　やだ　やあだ　でりゆ　おんなの　こなの　いっぱいしやせい　おっおっ　おまんこからせーし　びゅっびゅしちやうのお　ふーっ　フーっ　も、もうむり　むーり　がまんでき　にや　——あ」

#10 世話焼きドMエロJKを虐めたり逃げられなくなったりする話。

「ほおお？♡♡♡んおあ♡♡ひつひつ♡♡も♡むり♡がまんむり♡♡んおオ♡♡♡♡♡でりゆ♡♡♡せーし♡♡♡おまんこからひりだしちゃうのほお♡♡♡♡♡んむっ!?!♡♡♡」

絶妙な力で七緒の腹を押しては虐めてやりながら、必死に今にも決壊しそうな所を堪える美少女の歪んだ表情を愉悦たつぷりに眺める男。

七緒にとつては非常に恥ずかしいことこの上ないので、毎度かなり頑張りをするのだが、そもそも勝ち目のない勝負なのだ。しかも質の悪いことに恥辱に耐えれば耐える程、ダメになった時の快感が跳ね上がってしまったのを彼女は知ってしまったている。当然、そんな快樂地獄に七緒が逆らえるはずもなく――。

「んちゅ♡♡♡ちゅっちゅ♡♡くちゅぐちゅ♡♡ちゅっぷちゅっぷ♡♡♡ちゅーっば♡♡んっばあ♡♡♡おオ♡♡♡ふっひ♡♡♡も♡おじひやんのばかあ♡♡♡あとでひどいんだか…:…らあ…:…うっオ♡♡♡♡♡あ♡♡♡ふへっ♡♡♡えへへっ♡♡♡♡♡お、おねがいます♡♡♡もおゆるしてえ♡♡♡♡♡ほんとにむ、りい♡♡♡――っほおん♡♡♡」

凄まじい快樂の濁流にのみ込まれながら、男が軽く口づけしてやると七緒は救いを求めるかのように必死にしゃぶりついてくる。甘く柔らかい極上の唇と舌を蹂躪し堪能し、恨めしそうに悪態をつく小娘にトドメを差してやる為に、腹に添えた手に力を籠める。

そんな男の心底意地の悪い笑顔を見た七緒は無意識に許しを乞うて媚びへつらう情けない笑みを零すが、それが最後の一押しとなってしまう。

――ぐみゆ♡♡♡ぶびゆ♡♡びゅっびゅ♡♡♡  
「――くっひゅ？♡♡♡んのおお♡♡♡♡♡おっ？♡♡おっ？♡♡

ほおお~~~~♡♡♡」

「ぼっ♡♡♡ びゅっぷ♡ びゆるる♡♡ びつちや♡♡ びゅっ  
ばあ♡♡♡

「おあ~~~~♡♡♡ くっほ♡ ほひゅ♡♡♡ ぶりゅう♡♡♡ おじさん  
のせーし♡♡♡ ざーめん♡♡♡ しきゆうからこきすてちやうのほお  
♡♡♡ つお♡♡♡ ひー♡♡♡ ひー♡♡♡ うっオ♡♡♡ イツグ♡♡♡  
あーいつくイツグ♡♡♡ しゃせいしながらいつぐうううっオ  
っ♡♡♡♡♡♡」

妊婦のように膨らませたぼってぼての腹から、半固形レベルの白濁  
液を次から次へと吐き出し無様イキしまくる七緒。

「ひゅうお♡♡♡ あー♡♡♡ と、とまんにや♡♡♡ せーしも♡♡♡  
イクのもおっ♡♡♡♡♡ おっう?♡♡♡ くっひゅ♡♡♡ ぬおオ♡♡  
グっ♡♡♡♡♡ いつくいつく♡♡♡♡♡」

己の力加減一つで面白いくらいに絶頂に達しては、年頃の娘がして  
いい筈もない喘ぎようを眺めて大層満足したのか、男は軽く頷いて七  
緒のおなかに当てている手に一気に力を込め、まだまだ自身の精液が  
大量に詰まって膨張している腹を押し潰すという暴挙に出た。

「——おオっ?!♡♡♡♡♡ っ?!♡♡♡♡♡ っ?!♡♡♡♡♡ っ?!♡♡♡♡♡  
~~~~♡♡♡♡♡」

突然腹部を襲った凄まじい圧に七緒は目を白黒させながら、空気を  
求める魚のように口を開いては閉じを繰り返すと——、

びゆるるるるっ♡♡♡♡♡ ぼっびゅ♡♡♡ びゅっぷ♡♡♡ どりゅ  
りゅ!♡♡♡ ぶっびゅ♡♡♡ ぶっびゅ♡♡♡ どぼっ♡♡♡ どぼぼほ  
ぼっ♡♡♡♡♡

「ふっぎいっいっいっ?!♡♡♡♡♡ ひっっ?♡♡♡♡♡ おああアっ?!♡♡♡♡♡  
お、おじや♡♡♡♡♡ おおっ!♡♡♡♡♡ おお♡♡♡♡♡ おしすぎ♡♡♡♡♡  
のおオっ♡♡♡♡♡ ばかあ♡♡♡♡♡ へんたいっ!♡♡♡♡♡ うっオっ♡♡  
?!♡♡♡♡♡ ぶぎゅ♡♡♡♡♡ ぶっっいっぎゅ♡♡♡♡♡ いくいくイツグ♡♡  
♡♡♡ おオ~~~~でりゅでりゅでりゅうっ♡♡♡♡♡ っごめんな  
しや♡♡♡♡ のオあイツグ♡♡♡♡♡ オっいつぎゅいつぎゅん♡♡♡♡♡  
♡ なかみじえんぶでるうっオっ♡♡♡♡♡ のっほおおっ!♡♡♡♡♡

「「はあ……」」

七緒がいつも通り情けなくイキ散らかされた翌日。彼女が通う学校の教室内で、男女問わず眺めるだけで溜め息をつきたくなるような美少女3人組が揃って息を吐いた。それだけで年齢にそぐわぬ気も大量に吐き出されては周囲を魅了していくのだが、当の本人たちはそんなことを気にかけるでもなく、物憂げな表情でぼんやりと黒板を眺め続けているのだった。

「……なんかさ、夏希も美苗も最近溜め息多くない？ 幸せ逃げちゃうよ」

「あー……？ いや、七緒には言われたくないんだけど」

「え、そう……？」

「ソウダネー」

「美苗さあ……」

「いつにも増して何考えてんのかわかんねえな……」

「ソウダネー」

（ほんとに大丈夫かこれ……）

なんとも間の抜けたやり取りをする3人は、ここ最近いつもこんな感じであった。特に美苗の抜けようが常の比ではなく、思わず2人が心配になる程にはおかしかった。まあ、美苗がおかしいのは大概なのでそこまで心配しているわけではない……、と思っていたのだが、こゝも毎回半角のみで返答されると気にはなるわけで。

「ちよつと美苗、ほんとに大丈夫な——」

「七緒ちゃんも夏希ちゃんも」

「ひえっ」

「うわっ」

虚ろな目で遠くを眺め続ける美苗に流石に気になった七緒が問いかけた途端、急に目に光が戻った美苗がいきなりはっと通る声を発し

たので、2人は思わず素っ頓狂な声を出して驚いてしまった。

「び、びつくりしたあ……な、なに？」

「いきなり脅かすなよなあ……心臓に悪いだろうが」

「あゝ、2人ともひどいんだあゝ」

「な、なんか急に調子戻してきたね……」

「いやもうほんと怖えよ。で、なんかあったの？」

あまりにもな変わりように早まった鼓動を落ち着かせながら、七緒と夏希はいつも通りに戻った美苗に先を促す。

「今日の放課後さー、例の公園で待ち合わせねー。あ、拒否権はないから」

「ええ……」

「まった急だなお前は……」

「どうせ暇でしょ？」

「ひ、暇じゃないし」

「ケンカ売ってんのか？」

「えっへへ〜」

なんとなくだが美苗の意図が読めた七緒と夏希は、いくらか無然としながらも頷くのだった。

（美苗の話って、きつとおじさんのことだよね）

一足先に例の公園に着いた七緒は、いつものベンチに腰掛けながら手持無沙汰にその美しい脚をぶらぶらさせながら考えに耽っていた。

美苗と夏希がおじさんを誘ってホテルでやり捨てられて以来、あの2人はおじさんに執着することなく今に至るまで、関わってくることはなかったのだ。これは七緒にとって本当に意外だったし、嬉しい誤算だった。絶対に自分と同じでおじさんが与えてくれる快樂の虜になると思っていたのに。

そうやって喜んでいたのも束の間、最近はおじさんの性欲と精力に七緒自身がついていけず、忸怩たる想いが日に日に募っていくのが、

少しずつだが七緒の心に暗い影を落としていた。

(いや、そもそもおじさんがあんな性欲モンスターなのがいけないだよ。うん、あんなの普通じゃないもん)

どう考えても日本人、いや、もはや人間離れしているようなアレと射精量は、控えめに見積もってもおかしいことこの上ない。なんというかもう、ファンタジーの領域に片足どころか両脚まで突っ込んでるレベルな気がする。

そんなヤバイ男相手にこの2ヶ月間、1人で相手が出来てきたのは寧ろ褒められるべきではないか。

(でも、もうおじさんじゃないと絶対満足できない身体にされちゃってるしなあ……)

とは言っても七緒の心境の通り、毎回毎回天高く突き上げられるような強烈無比な快楽を散々その身に仕込まれた彼女にとって、あれはもう麻薬よりも質が悪い代物だろう。麻薬なんてやったことないからよくわかんないけど。

(……そういえば)

美苗も夏希も、あの恐怖すら感じられる快楽を一度味わっている。それも性癖に思いつき突き刺さる様な形で。もとより男子中学生の猿みたいな性欲が霞むレベルのあの2人が、どうやってこの2ヶ月もの間我慢できているんだろうか――。

(あー……)

そうして七緒は、天を仰いで完全にベンチに身を預けていた。

もしかしなくてもあの2人は、こうなるとわかっていたから、どうにかこうにか今日まで我慢してきたのかもしれない。わたしが最初におじさんを見つけたから、この2ヶ月は花を持たせてくれたんだ――。

「お、いたいた」

「七緒ちゃん」

声のした方に視線を向けると、おじさんを両脇からがっちり掴んで、心底嬉しそうに雌の顔をした2人がこっちに向かってきていた。おじさんはなんとというかも、困り果てた顔をしてぐったり青ざめて

いる。そんなおじさんの情けない様子に、わたしは思わず笑ってしまっていた。

「なあ七緒。あたしら頑張って我慢してきたからさあ♡」

「もう我慢、しなくてもいいですよね?♡」

全身をくねらせては擦り付け、もう触れているだけで堪らないという表情を浮かべながら熱い吐息を漏らし、太ももまで愛液を垂らす夏希と美苗。2人の気持ちがそれはもうよくわかるわたしを、心底申し訳なさそうに見つめてくるおじさんを見て、わたしの心にあつた僅かな影はすつと消えて行つたのでした。

「もう、みんなしようがないなあ」

口ではそう言いながら笑みを抑えられない私は、おじさんの空いている胸元に飛び込んで困り果てた顔を覗き込む。あれもこれもぜんぶ、おじさんが悪いんだからね♡

「ね、おじさん、わたしたち全員♡」

「腰が抜けるまで♡」

「たくつぶり♡ 可愛がってくださいませ♡」

#11 世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4P  
する話①

「はっあつ♡ わ、わたしたち並べてこんな格好させるなんてえ♡」  
「ふっふっ♡ おっさんマジで変態すぎ♡ あとで覚えてろよ—  
—おっ♡」

「くっふ♡ んんう〜♡ き、きつつ…♡ おじさま酷い…♡」  
いつかのホテルの一室。

例の公園で花も恥じらう美少女3人娘に拘束され、甘ったるい雌の  
発情臭と媚び媚びの声にほだされて脳髓まで蕩けさせられた男は、1  
周どころか2周3周廻って却って冷静になっていた。というよりも  
う色々と考えるのも面倒になって本能に従う事にしたただけだったり  
もする。

今も男の足元で己の男根をぶち込まれて種付けされたいが為に、裸  
の方がよっぽどマシな格好で仰向けに寝転がり、雌にとつて最も大事  
な秘所を懸命に突き上げては爪先立ちでガニ股を曝け出す—など  
という、最早人としての尊厳すら容易く投げ打ってまで自分にへりく  
だってちん媚びできてしまうこの雌オナホを3匹も相手にして、理性  
や倫理が勝る男などこの世にいよいよものか。

「んにい!?!♡ お、おじさん触っちゃダメ♡ これきつついのお♡  
ふっひゅ♡ 腰落ちちやう♡ すぐ負けちやうよお♡」  
「おっぐ♡ ぶぎっ♡ クッソこのエロオヤジが…うっひ♡ この  
あたしにこんなあ♡ —おオっ!?!♡♡ か、顔踏むにやあ♡」  
「んっぎいいいいい〜♡ ひゅっ♡ ひゅー♡ おっおっ♡  
も、むりい♡ おじさまの鬼畜う♡ こんな体勢むーり♡ むりで  
すう♡」

まるで打てば響く楽器のように、虐げれば虐げる程良い声で鳴く眼  
下の3人に異様な程の征服欲を刺激される男。本来ならば大枚をは  
たいてすら話すこともままならないであろう、若く美しく健康的な雌

を手中に収め好きにできるといふ事実が、男に危険な全能感すら抱かせていた。

「うう〜♡ いつまでこうしてるのお♡ おじさんもう許してえ♡  
——あつ♡ ご、ごめんなさいご主人様♡ はしたない雌犬の分際  
でえ♡ 生意気言つちやうペットの七緒を♡ いっぱいいっぱい♡  
ご主人様のおちんぽで躰けてください♡♡ へっへっ♡♡  
うつオゝきつつ♡♡♡ お、おねがいます♡♡ ごしゅじんさ  
まあ♡♡♡」

軽く触れただけで面白いくらいにビクつき、いつも愛らしい反応で魅せてくれる七緒。白磁のように透き通った肌を際立たせるように、生地が極限まで薄い黒の穴開きブラとショーツ、そしてガーターベルトを着せ、彼女のとことん従順で人懐っこいイメージに合う犬耳のカチューシャと犬の尻尾を模したアナルプラグに彩られた七緒は主人からの加虐に打ち震え、本物の犬のように尻尾を振りたくって悦び盛っている。

「ぴっ♡ ふっぎゅ♡ な、なんであたしだけこんなあ♡ おっ?♡  
うぎゅ♡ お、おいおっさん! 踏むのやめっ——ひっ♡ つ  
ぷおお?♡♡ にや、にやんれえ♡♡ おオゝっ♡♡ つつよ♡ 顔  
ふみしゅぎい♡♡ んっぎゅ♡ やめ♡♡ もうやめへえ♡♡♡  
うつオゝっ♡♡♡ これ♡♡♡ きつつ♡♡ さすがにきついっ  
てえ♡♡♡ つほおお♡♡」

いつもは勝ち気で男勝りな夏希だが、実はこの中でもぶっちぎりのマゾ女である。期待に応えられるよう豚の耳と尻尾をつけさせ鼻フックまでかけてやった時は、それだけで軽く潮を噴いたくらいだ。普段の反動なのかなんなのか、口ではなんやかんやと文句を垂れてはいるものの、その声には被虐に溺れる色欲がたっぷり含まれている。無理やり着させた、サイズの合っていない白のスクール水着も胸が露出するように丸く切り抜かれており、小さすぎて恥丘に食い込んだ生地の色が完全に透けてしまう程に大量の愛液を垂れ流し続けている。

「お、おじさまあ♡ も、もう無理♡ 許してください♡ 私力ないんですう♡ 七緒ちゃんと夏希ちゃんみたいに体力ないのお♡♡

あつあつ♡ ささえてられない♡ んっぐううううー！  
……っお♡ やーだ！♡ やだやだやだっ♡ 一番最後やだ♡ ほ  
んどに辛かったの♡ 2ヶ月いっぱい我慢したのお♡♡

今でも一番掴みどころがないのがこの美苗という娘だ。小柄で小  
動物的な顔立ちと、七緒以上に豊かに実りまくった爆乳のアンバラ  
ンスを強調させるピンクの逆バニー衣装と黒の網タイツ、そしてハ  
ト形のニツプレスシールが乳首と秘部を辛うじて隠すだけで、男の性  
欲を異様に掻き立ててくる。しかも自ら進んで嬉しそうにうさ耳を  
頭に着け、バニーテール型のアナルプラグをこれ見よがしに尻穴に押  
し込んで軽イキする様を見せつけてきたこの小娘は男への媚び方  
——というより操り方を完璧に把握しているかのようだ。

「ふーっ♡ フーっ♡ や、やっどどけやが——ぐむっ?!  
??♡♡ ♪♪♪っっお♡♡♡」

「——んきゅっ?♡ くっお??♡♡♡ ひゅっほ♡♡♡ んのおおおお  
♡♡♡♡♡♡♡♡」

クソ生意気にも挑発し続けるこの万年発情鬼を躰けねば。男はお  
もむろに夏希を踏みつけていた足をどかしたかと思えば、あろうこと  
かその顔面に腰掛け、方やだらしなく両脇に垂れる美苗の長乳首を  
ニツプレスごと思いっきり摘まみ上げてしまった。

「んっぐう!♡♡♡ むぐう!♡♡♡ ーっ?!♡♡♡ おお♡♡♡  
っ♡♡♡ つぐむううおっあ♡♡♡ ふぎっ♡♡♡ ふぎゅう  
♡♡♡ ひっ♡♡♡ ふぎいっ♡♡♡ ——んれろれろお♡♡♡ ぴっちや  
にっちや♡♡♡ くっちゅちゅちゅーっば♡♡♡ んっぱんっぽお♡  
♡♡♡ りゅろりゅろじゅるじゅろろお♡♡♡ ——っうっお  
♡♡♡♡♡♡♡ つくっおおおオ♡♡♡♡♡♡♡」

「いっひ♡♡♡ んっひや♡♡♡ つおあア♡♡♡ お、おじしやま♡♡♡  
ちく♡♡♡ ちくび♡♡♡♡♡♡ みなちくびいっオ♡♡♡♡♡♡ ひっ  
ぱっちやりやめ♡♡♡ くみゆ♡♡♡ のっお♡♡♡ ——あ♡♡♡ だ、だ  
め!♡♡♡ はなしちやらめ!♡♡♡ おちる♡♡♡ こしおちちやうう♡♡♡  
び、びよん♡♡♡ ぴよんぴよん♡♡♡ お、おじさまあ♡♡♡♡♡♡ みな  
なっさけないがちくびっ♡♡♡♡♡♡ ぜったいはなしちやだめびよ

「んっのほおオオ」っ♡♡♡♡♡ ぢからちゅよいい♡♡♡  
ぐつみゆ♡♡ も、ほんろに…:…む、りい…:…——っあ♡♡♡♡」

もはや生き物としての扱いですらない仕打ちを受け、窒息しかけて  
いようが構わず男の肛門や金玉を舐めしやぶり、嬉しそうにマゾ潮を  
撒き散らしてイキまくる夏希に感動すら覚える。こんな状態に追い  
遣られても尚腰を下ろすことのない彼女の体力に感服しながら、なに  
やらぴーぴー騒いでいるメスガキの長乳首を好き勝手に弄繰り回し、  
すぐに飽きて来たのか最後に渾身の力で捻じり上げてやると、こちら  
も嬉ションを漏らしながらいとも簡単に陥落したのだった。

「はっはっ♡ う、うわあ…:…♡ おじさ——ご主人様、ほんとに容赦  
ないね…:…♡ えっ? あ、はいっ♡♡ ご主人様♡♡♡ んっ♡  
」

無様に伸びた美苗を見下ろし、夏希の顔面騎乗奉仕を楽しみなが  
ら、七緒にもういいからとベロフエラをせがむ男。まさしく横暴、傍  
若無人な主に求められて蕩けきった笑みを浮かべながら、七緒は男の  
首にしな垂れかかつて精一杯奉仕する。

「そ、それでは失礼しますね♡ ——んっちゅ♡ ちゅっちゅ♡♡  
んーっばちゅーっば♡ ちゆるれるろお♡♡ んっむ♡ むっ  
ちゅ♡♡ ああっ♡ ご主人様あ♡♡ すき♡ 大好きなお♡♡  
七緒のこと一生飼ってえ♡♡♡ つじゆるるるろろおくく  
♡♡♡♡♡」

「ぐっむ?!♡♡♡ んっっ♡♡♡ ぶっぎ♡ ぶぎい♡♡♡ じゅ  
るるじゅっばあ♡♡♡ ぶっちゅじゆるるる♡♡♡ つオゝく  
く♡♡ ひっひぬ♡♡♡ もっゆるひっ♡♡♡ ふむっぎゆ♡♡♡ つ  
ぶぎゆ?♡♡♡ ぴぎい♡♡♡ ——うっオゝっしっぬいッぎゆ  
んっ♡♡♡♡♡」

「あっへ♡♡ ひっ♡♡ ひゅー♡♡ ひゅーっ♡♡ ひ、ひっどお♡  
おじさまのケダモノお♡♡♡ こんなのみじめすぎ——んっぶう!♡  
ぶぎゆ♡♡ むっぐう♡♡♡ ひっ?♡♡ ひへっ?♡♡ あっうそ♡♡ ぶ  
まにやいで♡♡♡ おじしやまあ♡♡♡ (ハハ)ごめ♡♡♡ (ごめん)なしゃ♡♡  
ゆ、ゆるしてくださいぴよん♡♡♡♡ んっぶぶう?♡♡♡ にゃ、にゃ

んれえ？♡♡♡ くっほおオゝゝゝ♡♡♡」

幸せいっぱい男の舌と唾液を貪り尽くす七緒。

七緒の体重まで掛かって本気で死にそうにも拘らずイキ散らかす夏希。

あまりの仕打ちに明晰な頭も狂って無様イキが止まらない美苗。  
宴はまだ始まったばかり――。



ちや♡♡ くつちやくつちや♡♡ ぐつきゆん♡♡ んあく♡♡

それでもなお、己の顔と男の臀部を繋いだ粘着質に過ぎる唾液だったものを啜り上げては舐りまわし、口内で美味しそうに味わって嚙下した彼女の表情は、とても物扱いされていたとは思えない程に至福に歪んだ笑みを浮かべて陶醉しきっている。

「うっわ♡ 夏希えつろ♡♡ いつもはあんなにカッコいいのにひっどい顔……♡ おっ♡♡」

普段の、そして乱れた時の夏希もよく知る七緒だったが、ここまで酷い有様なのは流石に初めてであり、そんな夏希の様子に中てられて股間をまさぐる七緒。

「えへっ♡ あっへ♡♡ おイツぎゆ♡♡♡ いくイクいつぐ♡♡ぶっひ♡ ぶぎい♡♡♡」

「なんにもしてないのに潮吹いちやってる♡♡ これじゃほんとに雌豚みたい……カワイイ♡ ね、美苗？」

人以下の扱いをされたことが嬉しくてしょうがないのか、白目を剥いて無駄にデカイ尻たぶを何度も何度もたっぱん♡ だぱん♡ とへこらせスプリングを軋ませる夏希。本当に豚に成り下がったかのように鼻を鳴らす夏希の脇で、美しい顔を踏み荒らされて頭がバグリ出した美苗に、七緒は素知らぬ顔で問いかける。

「おっあ♡ な、なおちや♡♡ や、やめつくむう♡♡♡ やめひやへてえ♡♡ ——うっぎゆ？♡♡ むおおおオっ♡♡♡」

「そんなの無理だって、美苗ならわかってるでしょ♡ ペットはご主人様に逆らつちやいけないんだよ？♡」

「ペ、ペット……♡♡ わ、わたしがおじさまのペットなんてえ♡♡♡ おっぎゆ?!♡♡ ふっほおおお♡♡♡」

好き勝手に顔を踏まれ続けるという異常事態に流石の美苗もプライドを傷つけられたか、口では必死に抵抗しようとするものの、どうあがいても覆せない力の差に身体は媚びてしまう。腰は快樂でへっこへこ♡ に揺らし続けては駄々洩れの愛液でベットに液溜まりを作る始末である。普段の美苗であれば逆らえば逆らうだけ激しく責





しい脚を開き切って腰を突き出し、おまんこ子宮を差し出すかのよう  
に下半身を揺すり、自分を見下ろす雄に求愛する夏希。

「あ、あの……♡ えつと……♡ ……♡ ご、ごしゅ、じんさま……♡♡♡  
ふ、普段はがさつで、可愛げもないメスガキですけど……♡ ……♡ ご、ご  
主人様の前ではちゃんと♡ ……♡ こ、こうして精一杯ちん媚び♡♡ おつ  
♡ 上の口も下の口もお♡♡ 涎垂らして犯されるのお待ちしてま  
す♡♡♡ いつでもどこでも♡ おちんぼ様がイライラしたら呼び  
つけて下さい♡♡ ……♡ すぐに足元で這いつくばってえ♡♡♡ へっ  
へっ♡♡ おまんこも♡ 子宮も♡♡ アナルもお♡♡♡ た、卵  
だつて差し出します♡♡♡♡ だから♡ だからおねがいます♡  
♡♡ 犯して♡♡ いっぱいおちんぼして♡♡♡ 夏希のことぶっ  
こわしてえ♡♡♡♡」

男の脛におまんこを擦り付け、マーキングするかのように白く濁つ  
た本気汁を塗りたいくりながら、これ以上ないような屈服宣言で雄に媚  
びへつらう夏希。

「な、夏希……やばいよそれ……♡ ……♡ もうペットですらないよ  
……♡ おじさんの性処理道具……オナホになっちゃうつてば  
……♡♡♡」

「い、いいの……♡ ……♡ もうオナホでもなんでもいい♡♡ になりたい♡  
ご主人様の♡♡ 性処理用マゾ豚メスオナホにしてください♡♡  
♡ なんでも……♡ ……♡ なんでもするからお願います♡♡ お願  
いだからもう……♡ ……♡ ちんぽで犯してえ！ ねえ我慢できない！ つ  
らいの！ 苦しいよお……あたまおかしくなっちゃうよお!!」

「……♡♡♡♡♡  
「ああ……あの夏希ちゃんが……♡ ……♡ あんな……♡♡♡♡」

もはや女どころか、人としてすら終わってしまうような叫びを残し  
て男に泣き継る夏希。初めて見せた親友の姿に七緒と美苗は息を？  
み、見悶えて無意識に子宮をさする。

2人の良く知る夏希は、行為の最中で被虐の快楽に屈することは  
あつても、相手の男に心から屈するようなことは決してなかった。快  
感に溺れながらもどこか冴えた思考が必ず残っていて、相手の男を値

踏みしている——文武両道で、頼りがいのある姉のような存在。それが、夏希という少女だった。

「もう意地悪しないでえ……ひぐつ。あたしだけまだおまんこしてもらってない………ひどいよお………——んむっ?! んっちゅ? ——ふむう♡ ちゅっちゅ♡♡ ちゅっばちゅっば♡♡ んじゅ♡ んれろれろお♡♡ つばああ♡♡♡ き、キス……♡♡ ご主人様あ♡♡」

だが今日の前にいる夏希はどうだ。幼子のように駄々をこねて泣き、キスひとつで救われたかのように男にしがみついては甘え、すぐさま機嫌をなおしてしまうような有様だった。

「ちゅぶっじゅりゅりゅ♡♡ んっばんっばあ♡♡ ——っあ♡♡ は、はい♡ やります♡♡ いっぱいっばいっばい頑張るからあ♡♡♡♡ 夏希のおまんこ♡♡ がばがばになるまで犯してえ♡♡♡」

舌を貪り、唾液を舐め尽くすようなディープキスを楽しんだ男は、夏希に何事かを呟く。途端に目を輝かせてはしゃぐ夏希は男に念を押すかのように懇願すると、男の目の前で前屈みになり、四股を踏むように膝に手を乗せて開陳する。南米の血が入っているかのようにたっぷり肉のついたデカ尻を男に目一杯突き出し、脇目も振らずに上下左右に振りたくってはだばん♡ だっぽん♡ と品なく雄を誘い、えぐいガニ股で丁度雄の怒張が待ち構えている位置で固定し、重そうな尻肉を両手で掴んでゆっくり開いていく。溢れ出る本気汁でむわあ♡ と特濃の雌臭が強烈に嗅覚を刺激し、ネバつきぐちやついてぎつとぎと♡ の尻肉は尻たぶどうしで白濁の橋を何本も掛け、垂れ落ちてはシートに濃い沁みを無数に作り続けていく。

「ふっふっ♡ フーーツ♡♡ おっほ♡ み、見られてる♡♡♡ あたしのエッグいガニ股ちゃん媚びおまんこお♡♡♡ ふっほやつば♡♡ これだけでいぐっ♡♡♡ おっおっ♡♡ ご主人様あ♡♡♡ 夏希のクソザコメス豚オナホまんこお♡♡♡ もうとつくに準備完了♡♡♡ 受け入れ態勢整ってます♡♡♡ ご主人様の極太つよつよおちゃんぽ様でえ♡♡♡ いっぱいおまんこ削り取ってえ♡♡♡ やめてとかほざくと思えますけど♡♡♡ 絶対やめなideくください♡♡♡

とつくに降り切ってる子宮まとめてえ♡♡♡ 死ぬほど突いて犯してください♡♡♡♡♡」

つぷっ♡ ぐちゅくちゅ♡ ぬりゅっずりゅん♡♡

「んおっほきたっ♡♡ ちんぽっ♡♡♡ おちんぽっ♡♡♡ んのっおじらしやないでえ♡♡ はやつ♡ はやぐううう♡♡♡♡♡

おオっ♡♡♡♡ 腰へこ止まん♡♡♡♡♡ あっ入るう♡♡♡♡♡ もういれちや——」

バッチイイイイン!!

「——ふっひゅ?」

バチイイイ!! べしっ! ぴしゃ! ツパアアアン!!

「うオっ っほひよおおおおオっ!?♡♡♡♡♡」

へっこへっこ♡ ぶっしゅっ♡♡ びゅぼ♡ ぶしよお♡ カクカクカク♡♡

「おぎよお!♡♡♡ んっぎゅん♡♡ ぐっごめんなしや♡♡ ふんのおっ?!♡♡♡ しゅみ♡♡ しゅみましえ♡♡♡ ——オオオっ♡♡♡♡♡!?♡♡♡♡♡ やめっ♡♡ おゆるしっ♡♡♡ うっオっ♡♡

ギツツ♡♡♡ ケツ叩ききくっ♡♡♡ ぐっおごめんなさい!♡♡♡♡♡ 勝手にいれようとしてもうしわけっ♡♡♡ っほおおおおく♡♡♡♡♡」

躰けのなつていない雌豚に対して一切手加減なく、無駄にデカイ爆尻を全力で引っ叩きまくる男。真っ赤なもみじが尻にいくつも浮かび上がる程叩かれて、それでも嬉しそうに舌をピン立ちさせて無様に腰をカクつかせながらイキ潮を噴き出しまくる夏希。

「うっオっ っ……♡♡♡♡♡ あっ——♡♡♡……♡♡♡ ひっひっいつく♡♡ っ おいっぎゅん♡♡♡」

ようやく男が手を降ろした頃には、小麦色の豊かな丸尻が真っ赤に染まりあがつてしまっていた。

「ほおおくくく♡♡♡♡♡ オっ っいつく!♡♡♡♡♡ あっへ♡♡♡♡♡ ——へあ?」

あまりの衝撃とマゾ快楽の連続に上体が突っ伏して、無様に腫れ上がった尻だけ突き上げる形となってしまう夏希。そんなマゾ豚の尻

「ほおおくくく♡♡♡♡♡ オっ っいつく!♡♡♡♡♡ あっへ♡♡♡♡♡ ——へあ?」

あまりの衝撃とマゾ快楽の連続に上体が突っ伏して、無様に腫れ上がった尻だけ突き上げる形となってしまう夏希。そんなマゾ豚の尻



「うオ、おお?!♡♡♡♡ おいつぎゆいつぎゆん♡♡♡♡ おあア、イツグ♡♡ ほっひゆ♡♡♡♡ んびよお?!♡♡♡♡ お、おぐううつ♡♡♡♡ しきゆ♡♡ 子宮潰れりゆ♡♡♡♡ いくイック♡♡♡♡ おおくく♡♡♡♡」

ずるるろろろろくくくく♡♡♡♡

「おオ、っほなつが♡♡♡♡ ちんぽながいい♡♡♡♡ うオ、っおまんこけじゆれりゆ!! ぞりぞりしゆっ♡♡♡♡ ぶっひ♡♡♡♡ おまんこぜんぶ引っこ抜かれるのおオ、っ♡♡♡♡♡♡ おちんぽ様しゆごいい♡♡♡♡ ちんぽちんぽちんぽお♡♡♡♡ ぶっひよお♡♡♡♡」

どっつっつちゆりゆん!!!♡♡♡♡ ほっちゆぼっちゆぼっちゆぼっちゆぼっちゆ!!

「おぎやつ!♡♡♡♡ ぶぎっ♡♡♡♡ ぶっぎよ♡♡♡♡ ぶっひい♡♡♡♡ オッ♡♡ オッ♡♡ オッ♡♡ オッ♡♡ オッ♡♡ ぶひっ♡♡♡♡ ぶっぎゆ?」

寝バックで夏希を押し潰す勢いで犯しながら、あまりの快楽に口を限界まで縦に開き豚のように悲鳴をあげ、絶頂のたびに上半身を弓反りにしてまで感じ出した彼女の首を、男はあろうことか両手で締め上げてしまった。

「かつは?! おっひゆ?♡♡♡♡ ぐっえ♡♡♡♡ ぶっひゆ♡♡♡♡ ひゆっ♡♡♡♡ ひゆっ♡♡♡♡」

骨の軋む音が脳内で木霊し、それでも首を絞められれば膣壁が嬉しそうにぎゆっ♡♡ ぎゆ♡♡ とおちんぽ様にご奉仕してしまう夏希。

「おっ!♡♡♡♡ ぐぶっ♡♡♡♡ ひっ、ひぬ♡♡♡♡ やめ♡♡♡♡ やめへえ♡♡♡♡ おオ、っ♡♡♡♡」

あまりの快感と男の容赦のなさは無意識に命乞いする夏希。だが男は、先程夏希が発した言葉を忘れていなかった。“やめてと言っつても絶対やめるな”。男はわざとらしく確認するかののように、耳元で冷たくゆっくり言い放ってやる。

「~~~~~♡♡♡♡ ア、♡♡♡♡」  
ぶしっ♡♡ ぶっしゆ♡♡ びゆば♡♡ びゆっびゆっ♡♡ びゆっぶぶ

♡♡

酸素の足りない、快樂の奴隷と化した頭であつても男の言葉が反芻して思い出し、もう本当に壊れるまで使い潰されると理解した夏希の身体は、完全に屈したかのように今日一番のマゾ潮を盛大に嘖き出して恭順の意を示すのだった。

「しゅ、しゅみましえんおイツグ♡♡♡ お、おにやほの分際で♡♡♡  
しやりやつてごめんなしやいつぎゆイツギユんのお♡♡♡♡ お  
ゝーゝーひぬ!!♡♡♡ つくびしめアクメでイギ死にゆ……………  
ぐつぶ♡♡♡ つおゝおオゝーゝー♡♡♡」

絞め上げる力を絶妙に調整し、それに合わせて蠢き舐り回してくる膣壁の快樂に感嘆する男。完全に堕ちきった夏希に満足しながら、溜めに溜めてぐつぶつに煮えたぎった精子をご褒美としてくれてやる為に、子宮口をこじ開けるようにスパートをかけ始めた。

「ごちゅー！ ぼっちゅん！ ぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅ  
ぼっちゅ!!

「ふっぎやっ?!♡♡♡ おっぎゆ♡♡♡ ぐっへ♡♡♡ ぐっぐっぐっ  
くっほおおゝイグイグイグイツグ!!♡♡♡ あいつぎゆ♡♡♡  
いつぎゆ♡♡♡ ぶっひ♡♡♡ ぶひゅんのあゝイツグ♡♡♡ イツ  
グ♡♡♡ しゅごいのぐりゆうオゝイツぎゆん♡♡♡」

びゅぶ……つぶびゅ♡♡♡ びゅっば！ ぶりゅりゅりゅ!♡♡♡

「————ほっへえっ…♡♡♡」

びゅるるるる♡♡♡ ぼっびゅー！ ぶっぼー！ びゅちちちち!♡♡♡

どっほ♡♡♡ ぶっぶぶぶぶ♡♡♡

「~~~~~つつひゅ♡♡♡ つんのおゝおオアゝ♡♡♡ うつオ  
ゝイツグ♡♡♡ イツグイツグイツグイツグ♡♡♡ ひーゝーっ  
♡♡♡ ひーゝーっ♡♡♡ や、やめっへオゝっ♡♡♡♡ おっも♡  
♡♡♡ せーしおっつもお♡♡♡♡ うゝおゝあっづ!♡♡♡ あっ  
ぢゅあっぢゅ!♡♡♡ ひ、ひっ♡♡♡ ひっ♡♡♡ お、お腹もおいっ  
ぱあい♡♡♡ ごしゅじんしやまあ♡♡♡ ほ、ほんろに死ぬ♡♡♡  
ぎーめん扱き捨てられてしっつぬうっオゝっいぐいぐいぐっ!♡♡♡  
♡♡♡ のゝおゝあゝイツギユ!!♡♡♡♡♡」

#14 世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4P  
する話④

ぼっびゅ♡ びゅるるる♡♡ びゅちちっ♡ びゅぐっびゅぐ  
んっ!♡ どぼどぼどっぽん♡ びゅーっ♡♡ びゅーっ♡♡

「うゝおオゝおっ♡♡♡ くっほおおゝ♡♡ せ、せーしでしゅぎ  
………っオゝイクっ♡♡♡ いくイクいつぐう♡♡♡ お、お  
にやか♡♡ ぎ、ザーメン袋にい♡♡ も、ぱんぱん♡♡♡ ミチミ  
チいっでゆぬゝっおいつぎゅー!♡♡♡ ぶっひ♡♡♡ あ  
ゝーっーっーイクイクイクイクイク!!♡♡♡ と、とめへえ  
!♡ もうはいりやないっぎゅ♡♡ ほっひよ♡♡ ぶっひい♡♡  
♡ ぬおゝおっっっぎゅん!!♡♡♡ うっオゝ………おゝおゝ  
くくくく………♡♡♡♡」

うつ伏せの状態で男に組み敷かれ、体重の乗った猛烈なピストンに  
殴られ続けて柔らかくなつた子宮口に龟头をぶち込まれ、精子のたっ  
ぱり詰まったぎっつとぎと♡ の白濁液を次から次へと子宮目掛けて  
注ぎ込まれる夏希。破滅的な快感から逃れる為にへっこへこ♡ の  
ガックガク♡ に暴れまわる腰を、ぺしゃんこにされた尻肉ごと押し  
潰されて固定され、逃げ場の失つた快楽信号が頭に殺到して脳細胞を  
焼き切っていく。背骨が折れそうな勢いで弓反りになる上半身を男  
に羽交い絞めにされ、両手で頭部を鷲掴みにされて全身を固定された  
夏希は、詰め込まれる精液でドクン♡ ブクン♡ と膨らみ続ける子  
宮と腹部を、放心状態で自慰に耽る七緒と美苗に見せつけるようにひ  
けらかすのだった。

「夏希………すゝい………♡ 夏希………なつきい………っお♡♡♡  
「はっへっ♡♡ ふっふっ♡♡ フーっっ♡♡ おっへえ♡♡♡」

涙と涎と鼻水でぐっちやぐちやの顔に普段の面影など欠片もなく、  
眼球は完全に裏返って白目を剥き、細長く艶やかな舌は重力に逆らえ

ずに力なく垂れ下がってしまった。親友のあられもない姿を未  
来の自分と重ねながら、男の孕み袋となってしまった夏希を呆然と眺  
めて無意識におまんこを捏ね繰り回し、淫靡な音を響かせ続ける七緒  
と美苗。

「お………おっへ………ひゅーっ ひゅっ?」

ふっへ?」  
ぐっびゅ ぐぐっ………ずろろりよりよりよ………

「——んのっほおオっ?!」 うっオッ っなっが ち  
んぽなっがいい っきゅ!!」 のオ ぉおあ ぬけりゅ!  
♡ 中身全部引っこ抜けるうっオ っほいつぎゅいつぎゅん!!  
♡ おくくくイっ——ぶっぎゅ?!」 ぐえ……えっ  
しゅ、しゅびばぜ………おギツツ ぐれ……マジでぎまつで  
………おっへ……… かつひゅ……… ぶぎゅ ぶぎい  
………っつ♡♡♡」

恥も外聞もなく、最早理性の欠片もない豚の鳴き声をやかましいと  
思ったのか、気まぐれな男は夏希の細い首にアームロツクをかける  
と、完全に嵌ったそれで雌豚を絞めあげる。ギリギリと絞める程にマ  
ゾ肉オナホが肉棒に絡みつき、引き抜こうとしても尻が追いついてく  
る様は、まるでちんぽでおまんこを釣り上げられているかのような無  
様っぷりだった。確かに極上の快楽と征服感だがそろそろ別の雌も  
味わいたい男は、浅ましくむしゃぶりついて離れない媚肉壺から強引  
に剛直を引っこ抜いた。

「………おっぎよほオっ っ♡♡♡」  
ぶっびゅ ぶっび ぶばっびゅっばあ ぶりよりよりよ  
り♡ ぶりゆりゆりゆりゆりゆりゅん♡♡

力任せに愛しいおちんぽ様をぶっこ抜かれ、媚びついていたまん肉  
が引き摺られて少し外に飛び出してしまふ。人としての尊厳などそ  
こらの道端にでも投げ捨てて来たかのような、情けないにも程がある  
おほ声を喉から絞り出すと、腹に詰め込まれた孕み汁をえぐい音を奏  
でて漏らしながら夏希は意識を手放してしまった。

「んじゅっ♡ちゅっぱ♡ぴちゅちゅぶ♡すーっ♡♡♡  
すはーっ♡♡♡すっはすっは♡♡オっ♡♡♡美苗  
♡みなあ♡♡ぷちゅ♡ぶぢゆるるる♡♡」  
「んおっ♡すん♡すんすん♡♡くっお♡♡ぶちゅ  
ちゅーばちゅーっぱあ♡♡んれろれろお♡♡な、なおちや♡は  
げしんっむ♡♡ちゅっちゅ♡♡すっはあ♡♡♡」

夏希が男のザーメンタンクと化してダウンしてから。

男は次の余興として、七緒と美苗の2人を向かい合わせるとデー  
プキスをするよう命じた。雌同士が盛ってベロフェラし合っている  
間に、己の精液と夏希の本気汁でぎっとぎとの肉棒をねじ込むように  
2人の鼻っ面に差し込んで、ちんぽに対しては臭いを嗅ぐ以外禁止、  
と付け加える。

既に発情しきっている2人にとって、空腹状態で大好物を目の前に  
したのにお預けを喰らった形となり、疼いて狂いそうな欲求を発散さ  
せる為に、互いの舌を貪り合い、鼻を鳴らして必死に濃厚な交尾臭を  
肺と脳に送り続ける他なかった。

「んっぐうううう♡♡すはーっ♡♡♡ふっふっ♡  
フーっ♡♡んふーっ♡♡♡じゆるるるう♡♡ぶ  
ちゅ♡♡んれあゝゝゝ♡♡♡ちゅっぽちゅっぽちゅっぽ  
ちゅっぽ♡♡♡」  
「っくおおお♡♡♡すううううっ♡♡っの♡おっ♡♡んっ  
べえ?!♡♡なおひゃ♡♡まっひえ♡♡ふっす♡♡すんっすんっ  
!♡♡くっおオっくっさ♡♡♡臭いきっっ♡♡♡おっっ♡  
おっっ♡」

子宮が痛いくらいに縮んでは膨らんでを繰り返す。強烈な雄の交  
尾後の性臭に完全に理性をやられてしまった七緒は限界まで鼻を広  
げ、浅ましく臭いを吸い込みながら、身体の疼きを紛らわせる為に美  
苗の舌に猛烈に吸い付いてくる。

「な、七緒ちゃんまつへ♡♡♡ おオっ♡♡♡ んりよつれりゅ  
お、落ち着いて♡ そんなすわれひやらあつくつオっ♡♡♡ つくつき♡♡♡  
わらひのひたとれひやうよお♡♡♡ すつはすつは♡♡♡ おオっ  
くくくつき♡♡♡ 脳みそきつく♡♡♡ これきつくう！♡♡♡  
フーーツ♡♡♡ んつぐふうイツギユ♡♡♡ いくいくつ♡♡♡ オ  
っおー♡♡♡」  
「んつぶふう♡♡♡ くつおオっ♡♡♡ ご主人様のつよつよお  
ちんぽお♡♡♡ 夏希の臭いも混ざって♡♡♡ くつきくさで最高な  
のお♡♡♡ オイツグ♡♡♡ ちん嗅ぎで無様イキシゆりゆつオっ  
♡♡♡ あっ♡♡♡ みーな♡♡♡ 舌引つ込めちやダメ！ もつとべ  
ろちゅー♡♡♡ 美苗のべろおいしいの♡♡♡ 唾液甘いの好き♡♡♡  
ほらっ、もつとんべっつてしてして♡♡♡」  
「ふつひゆ♡♡♡ んつきゆ♡♡♡ んべっくくく♡♡♡」  
「あっは♡♡♡ 美苗は良い子だねえ♡♡♡」

「くくくお♡♡♡ つ♡♡♡ おっあ……………ひゅっ♡♡♡」

ちん嗅ぎさせるのにも飽きたのか、男は夏希の尻を枕に寝そべると、微かに反応する夏希を無視して指示を出す。

「んっしょ……………♡♡♡ んつぶふう♡♡♡ お、おじさま？♡♡♡ 美苗のく、くっそ  
下品でだらしないうし乳パイズリセックス……………♡♡♡ き、気持ち良い  
ですかあ？♡♡♡」

「んつもんつもんつも！ ちゅっぽちゅっぽちゅっぽちゅっぽちゅっぽ♡♡♡  
あっいつ♡♡♡ ぶぢゆるるりゆるりゆるじゆるじゆるお♡♡♡ オ  
っつらめっ♡♡♡ ご主人様あ♡♡♡ おまんこ弄られるとフェラチオで  
きないのお♡♡♡ ぢゅっばぢゅーっぽお♡♡♡ じゅっぞじゅっ  
ぞ♡♡♡ つほお♡♡♡ じゅりゅりゅりゅりゅる！！♡♡♡ フーーツ  
♡♡♡ んふー♡♡♡」

美苗には男の脚を抱え込ませてのパイズリを、七緒には69を命じて眼前の完全に濡れそぼった秘所を好き勝手に弄り出した。

「な、七緒ちゃんのフェラチオえっぐ……♡♡♡ んっふっ♡ ん  
んっ♡ そ、そんなの私教えてないよ……♡ ひっどいおちんぽ顔  
……♡♡ 女の子がしちやいけない顔だよ……♡♡♡」

自慢の乳房で挟んでいるのに余裕で飛び出してしまふ亀頭を目の  
当たりにし、既に目も当てられない有様の股間を本気汁がさらに粘つ  
かせるのを感じる。その亀頭を、まるで蛇のような長舌で無茶苦茶に  
舐り回し、頬を窄ませ、鼻下と口をみつともなく伸ばしきってむしや  
ぶりつく七緒に気圧されながら、美苗は焦っていた。

いくらなんでも一方的過ぎる。こうなることは薄々わかっ  
たものの、それでもこれは度が過ぎている。

さつきだって、たっぷり30分のちん嗅ぎ強制でこの男の臭いを脳  
髓と肺と嗅覚に散々に覚え込まされ、あと一歩でちんぽ臭狂いにさせ  
られそうになった。道端でこの臭いを嗅がされたら一瞬で腰が砕け  
てなりふり構わずちん媚びしそうだが、まだ大丈夫。

その前も、顔だけですら凄まじい屈辱だったのに、それだけでは飽  
き足らず胸と乳首まで踏み荒らされるとは思わなかった。しかも兎  
の真似事までして余計に踏み付けられた。思い出しただけで子宮が  
痛い程きゅんきゅん♡ してマゾ潮吹いて軽イキしてしまうレベル  
だが、まだ大丈夫。

私の体力が無いのは見てわかるだろうに、あんな下品なんてレベル  
じゃない恰好をさせられ、あまつさえ軽々と陥落させられて情けなく  
腰へこしてしまった。あれは最高にきつかった。でもまだ大丈夫。

2か月前だって、”当たり”程度にしか思っていなかったのに、雌  
犬みたいに屈服の腹出しポーズを取らされて、おかしな量の精子を子  
宮に詰め込まれてイキ散らかし、挙句の果てにはヤリ捨てられるとい  
う有様。お陰でこの2ヶ月間は本当に大変だった。もうこの凶悪つ  
よつよおちんぽじゃないとおまんこ全然満足できなくなつて、疼きが  
収まらないから、それはもうがむしやらにアナルをケツマンコに開発  
して他の男で寂しさを紛らわしてきた。だからまだ大丈夫——。

ぼっびゅー！ ぶびゅるるるるる!! ぶりゅりゅりゅん！ どっ  
びゅどっびゅん♡



しゅぽおおおっイッグ♡ うっオッイッグイッグ♡♡♡ ま、  
待つて待つて待つてまつへえ!! で、出ちや♡ うつぶ♡ ぐつぶ  
♡♡ ♪♪♪♪おっえ♡♡♡  
「えっえっ……………な、七緒ちゃん?」

凄まじいアへ顔で口を縦に割り、舌をほっぽり出して喘ぎまくる七  
緒。全身から玉のような汗を噴き出し快感に震える七緒に魅入られ  
ていたら、なにやら様子がおかしいことに気づくと、美苗は恐る恐る  
目の前の親友の名を呼ぶ。

「も、もお……………出ぢやう……………おっほ♡♡♡ んぎよおおおお  
くくく!!♡♡♡ おっ♡ おっ♡ おっ♡ おっ♡ ご、ご  
しゅじっさ、まあ♡♡♡ ほ、ほんろにやめ——っへえええ♡♡♡  
も、むり♡♡♡ むーり♡♡♡ むりむりむりむりむりい!!♡♡♡  
「……………う、嘘……………じよ、冗談、だよね?」

「みなっ♡ みなあ♡♡♡ ご、ごべっん、なしや——うつぶ♡♡♡  
おオッぐいっぎゅ♡♡♡ ほんろに、ごめっ♡ んんっほお!  
♡  
「えっちよっ……………やだっ! んみゅ!!」

何事かを察した美苗は逃げ出そうと後退る。が、途端に表情から色  
が抜け落ち、怖いくらいに澄んだ瞳の七緒が美苗の頬を両手で捉え、  
ニタア♡ と底冷えるような笑みを浮かべて口を開く。

「ご主人様の命令だから♡ ごめんね?」  
「や、やめっ——んぶうっ!!」  
「んくつちゅ♡」

七緒が美苗に口づけしたのを確認し、男は七緒のそれより数段上の  
下碑た笑みを浮かべ、七緒の形の良い尻を思いつきりぶっ叩いた。

「うっびゅ?!♡♡♡ ——ぐっぶえ♡♡♡ うっおぼろろ  
ろろお♡♡♡」

「む——っ!! んむ——っふんぎゅ?! んっ!! ひゅっ?!♡  
~~~~~っ〇×△▽※E±  
S⊕?!」

「うおっぐ♡♡♡ ぶっぎゅ♡♡♡ うっおぼろろ♡♡♡  
ぐっえおっぼお♡♡♡」



#15 世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4P  
する話⑤

私は小さい頃から出来が良かった。相手が自分に何を求めているのかはすぐにわかったし、それに応えられるだけの能力や機微も備えていた。勉強も好きだし苦にならず、成績は常に上位だった。唯一苦手なのは運動だが、これも小学校高学年の頃から殆ど伸びない身長と、その分の栄養が全て吸われていくかのように膨らみ続けた胸のせいで、そうなる前は運動だつて得意だった。

世間一般の極めて平凡な両親にとつて、私はまさに理想の娘だろう。別に両親を嘲っているわけでもなく、見下しているなんてことは欠片もない。これまで関係を持ってきた人間も含めて、世にいう秀でた者全てが必ずしも幸福であるとは限らないことを、私は年の割によく知っている。そういった、“他人から見ると劣等感を感じさせる程に優秀な存在”は時に畏敬を集め、時に憎悪も集めるモノだと、私は身をもって知っていた。理想の娘を盲目に愛してくれる両親に手間を掛けさせたくはなかったし、同年代の子どもらしい容赦のなさ、少しずつ私の心を蝕んでいった。

中学生になつても背は伸びず、胸の成長は止まるどころか加速する一方だった。なるべく目立たないよう成績をわざと抑えたりもしたがあまり効果はなく、中学生という多感な時期も相まって悪戯は過激さを増していった。寄る辺のないまま街をふらついていた時に声をかけて来た身なりの良い中年の男が、私の初めての相手だった。すれ違う男達の判り易い視線にはとつくに慣れていたが、見るからに金も社会的地位もありそうな、父とあまり変わらない年の男が今の自分に何をもちたしてくれるのか。性的な行為にも興味があつた私は、軽く会話を交わすと連られるがままに高級マンションの一室で処女を散らした。

そこでも私はすこぶる出来が良かった。男が何を求めているのか、





「♡」  
「ひっひっ♡ フーーツ♡ うう~~~~♡♡♡」  
な、夏希ちゃんが……♡ 夏希ちゃんが♡ あ、あんなにイッ  
て……おまんこから精液噴き出して……♡ 豚みたいに鼻鳴らし  
て喜んでる♡♡♡ ——ズルイ………違う！♡ 私はあんな  
……私もあんなあ………♡♡

「っおああア♡♡ ご主人様あ♡♡♡ もっとして！♡♡ 七緒の  
生ハメ専用オナホいっぱい使ってえ♡♡♡ おっおっおっ♡♡ ち  
んぽ♡♡ おちんぽお♡♡♡」  
「うっわ♡ 七緒の腹ぼっこぼこ♡ あれでアクメしない女いないっ  
て………♡♡」

「——ふっく♡~~~~♡♡」  
「ぐっおえ♡♡ おっぼ♡♡ ぢゅっこっぢゅっこっぢゅっこ♡♡  
おっぎよ？…♡ つほぎよおおおオっ?!♡♡♡」  
「ご主人様のイラマえっぐ♡♡ 見てあれ、夏希の喉♡ 無理矢理広  
げられちゃってる………♡♡」  
「ひゅ♡♡ ふっぎゅ♡♡ んん————♡♡」

「っのおおおおオっ♡♡♡ イグイグイグイグ!!♡♡♡ 中出  
ししゅいのお♡♡ ぎーめんだししゅぎ！♡♡ うっオっ♡♡  
♡ ぐっぶ？…♡♡ また孕むう♡ おじさん精子でボテ腹アクメく  
りゅううううう♡♡♡」

「あ………う♡………♡」  
「じゅちゅ♡♡♡ うっ~~~~♡♡♡ ぐっぼぐっぼぐっぼ♡♡  
ぶっぎゅ♡♡♡ ぶっぎゅ♡♡♡ んぐっつっぎゅんおオっ♡♡♡  
ぶっひよおおおおっ♡♡♡♡♡」



#16 世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4P  
する話⑥

「んっふう~~~~♡♡♡ すっはすっは♡♡ すううー~~~~♡♡♡  
♡♡♡ んんっぎゅん♡♡♡ ふっぎゅ♡♡♡ んっの♡♡♡ おふっ♡  
ふっほ♡♡♡ おお~~~~♡♡♡♡♡♡♡」

七緒と夏希の体液という体液を吸い取って異様な性臭を放つデカマラを美苗の顔にのせ、それだけで腰が制御不能に陥るクソザコ雌兎のちん負けっぷりを存分に楽しみつつも、男はのんびり思考に耽っていた。

「ほっ♡♡♡ ほっ♡♡♡ ほっ♡♡♡ んのっへえ♡♡♡ くっひゅ♡♡♡  
う~~~~♡♡♡ へっへっ♡♡♡ んれえ~~~~♡♡♡……………♡♡♡  
♡♡♡ ——— んんっ！ だ、だめっ♡♡♡ だめなの♡♡♡ 自分からおちんぽしちやらめ♡♡♡ ちんしゃぶ禁止！♡♡♡ こんなおつきいだけの勃起ちんぽ……♡♡♡ クソでかカリ太おちんぽなんかあ………♡♡♡  
ふっぐ♡♡♡ ま、負けない！♡♡♡ フー~~~~♡♡♡ ふぎゅ♡♡♡ んっすうう~~~~♡♡♡……………オ~~~~♡♡♡ お~~~~♡♡♡ んべえ♡♡♡♡♡ ——— ふんっむ♡♡♡ だめだめだめだめえ♡♡♡ んふっすうっオ~~~~♡♡♡♡♡」

だらけ切ったトロ声で涎を垂らしながら何事かをほざいているが、この雑魚雌は一体何と戦っているつもりなのだろうか。愛らしい小顔は男の特濃カウパーやらなんやらで見える影もなくぐつちやぐちや♡♡♡ にアへり散らかし、エロ蹲踞で開陳しきって止まらないへっこへこ♡♡♡ のちん媚びダンスで懸命に孕ませアピールしてくるムチ肉に覆われた子宮と、それに連動してどっぷん♡♡♡ だっぽん♡♡♡ と跳ね回って自己主張の激しい爆乳を雄の足元で晒しておきながら。極めつけに口では嫌々言うものの、嬉しそうにちん嗅ぎする度に肉厚で卑猥に蠢く舌がレロレロオ♡♡♡ と顔を出しては引っ込ませを繰り返す様は無様を通り越して滑稽ですらある。

「うっぎゅ♡ ま、負けにやおオ♡ まらいぐっ♡♡ 雄くっさ♡♡ このおちんぽ臭すぎなのお♡♡ ふっおいつぎゅ♡♡♡ すううう♡♡♡ うっおイツグ♡♡♡ ちん嗅ぎでいぎゅうう♡♡♡」  
へこへこへこへこっ♡♡♡ かっくかっくかっく♡♡♡ ぴゅ♡♡ ぶしっ♡♡♡ ぶっしよお♡♡♡

ここまでこの男の生殖器が与えるあらゆる刺激の虜になっているというのに、まだ負けていないとはどういう見なのか。被虐と性欲でとつくに身体は支配されているだろうに、それでもギリギリの所で踏ん張る、年の割に掴みどころのないこの小娘の心境に沸々と興味を抱かされた男は底意地の悪い笑みを浮かべる。このまま完全に折れるまで待つのも楽しそうだと。

「ほんっぎゅ♡♡ も、もおおちんぽどけへえ♡♡ うっオ♡っいつぐ♡♡♡ すーっはすーっはすーっはすーっはあゝゝゝ♡♡♡♡♡ つぬ♡おオ♡イツギユイツギユンツ♡♡♡ んっべええゝゝゝ♡♡♡♡♡ れろれろんれゝゝ♡♡♡ ——ふっぐ♡♡ むっぎゅう♡♡ が、我慢！♡♡ まだ負けてないのお♡♡ おじさんちんぽなんかに負けないのほおゝゝ♡♡♡ おオ♡っ?♡♡ や、やめてえ♡♡ ぷぎゅ?♡♡ むおオ♡♡♡ 美苗の顔でちんずりしちやらめえ♡♡♡ ふっほお??♡♡♡」

「おっふ……………♡♡ ふっひゅ……………♡♡ ひゅ————♡♡……………♡♡ ほひゅ————♡♡……………♡♡」

己の愛液とイキ潮で作った液溜まりにへたり込み、極太ちんぽで顔を釣り上げられているかのように力なく腕を垂らす美苗に対し、男は素直に感心していた。

あれから30分程美苗の顔に散々肉棒を擦り付けてやったが、美苗は鼻を鳴らしてイクだけで自分から触れようとも舐めようともせずには堪え続けていた。年頃の娘が絶対に許してはいけない、女の顔に対する淫靡に極まらない蹂躞。既に全身も思考も繁殖欲に支配されて



ばって耐える美苗。せつかくの美貌は痴辱に歪み、肉付きの良いむち尻が限界まで押し上げられ、踏ん張る為に開き切ったガニ股の下品極まりないドスケベポーズを目の前に差し出された男の逸物は、今にも張り裂けんばかりに膨張して血管が浮かび上がり、精子のような濃さの我慢汁を垂れ流し続けていた。

「あつは♡ ご主人様の我慢汁すつごお♡♡ これだけでも絶対孕んじやう♡♡♡ んれあゝゝゝゝ♡♡♡ ちゅっちゅ♡ ちゅっぽちゅっぽ♡」

「うっわ美苗の恰好えつぐ♡♡ 女どころか人として終わってるって♡♡ おつくう♡ 見てるだけでイキそ♡♡」

美苗の獣も逃げ出すような喘ぎ声で意識が戻った2人が男に摺り寄り、七緒は垂れ流しになっている我慢汁を啜り上げ、夏希は美苗のあまりの痴態に全身を震わせ悶え、美苗が今一番聞きたくない言葉を無慈悲にぶつける。

「うぎゅいいいい♡♡♡ ひっひい♡ 夏希ちゃん酷いよおっ♡♡ おわっでない!♡ まだおわっでえつうおいつぎゅ♡♡♡ ほっひよ♡♡ イグイグイグイツツグ!!♡♡♡ も、もおむりい♡♡♡ 助けてえ♡ 七緒ちゃん♡ 夏希ちゃん♡ おねがいします♡♡ お尻のごれもどちでえ!!♡♡♡」

「んっふ♡ 美苗つてば可愛い♡ ね、ご主人様あ?♡♡」  
「どうする?♡ 助けてやんの?♡ 鬼畜でサイテーなご主人様♡」

「あああだめ!♡ その人に聞いぢやだめえ!!♡♡ ふっぎゅおオああっ♡♡♡ うっオゝマジでるっ♡♡♡♡ ひっ♡♡ ぴぎゅっ♡♡♡」

ぶびっ♡ ぶしやっ♡ ぶっしょ♡♡ むりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり♡♡♡

流星に限界の美苗がガニ股爪先立ちで尻を限界まで突き上げて3人に差し出す形となると、男は七緒と夏希に何事かを囁く。それを聞いた2人がへらつくようにニタア♡♡ と口角を釣り上げると――、  
「――もっでりゆうううう!!♡♡♡♡ けちゅあにやめくれ





最終話 世話焼きドMエロJK3人とドスケベ4P  
する話⑦

「ふぎゆ……♡ んつきゆ♡ おつあ……♡ かひゆ♡  
ひゅー……♡ ひゅー……♡♡」

背骨が折れんばかりに小さな体を弓なりに反らし、脱肛アクメをキメまくった美苗が漸く落ち着いたころには完全に全身が弛緩しきり、息も絶え絶えと言った風でベットに身体を預けて伸びてしまっていた。

「あはっ♡ 美苗のアナルぽっかり開いちやった♡ えつろ♡♡」

「うっわ中の肉出ちやってんじやん♡ これでお尻も犯してもらえんな♡♡」

「うっぎゆ♡ ひっ……ひっ……♡ だ、だめえ♡ 今そんなことしひやらあ……♡ おっふ♡♡ ほんとに終わる♡ おわっぢやうう♡♡」

「まだそんなこと言う美苗にはあ♡♡」  
「お仕置きしないとな?♡♡」

こんな状態にまで堕ちてもまだ抗おうとする美苗に対し、いつの間にやら鼻フックを外した夏希と七緒がぽかあ♡ と開き切った美苗のアナルに舌を這わせ、腸壁を擦り上げる。

「ふっぎい♡♡ ら、め♡ やめへえ♡♡ お尻いじつちや♡♡  
っっオっ♡♡♡」

「んっちゆ♡ ちゅっぷちゅっぱ♡ ちゅむ♡ れろれろんれえくく♡♡」

「じゅっるるるう♡♡ んっぱんっぽ♡♡ ちゅっちゆ♡ ちゅろろろろお♡♡♡」

「ほああ!?!♡♡ おっひゆ♡♡ な、舐め♡♡ そんなひよこ舐めにやいでえくくく♡♡ あっういつきゆ♡♡♡ ふつきゆいつきゆいつきゆん♡♡♡ ひいっくくく♡♡♡」

ぶっし♡ ぶじゅ♡ ぴゅっぴゅ♡ ぷしゅっぷしい♡♡

全く抵抗もできず、ぽっかり開いたアナルを親友2人に優しく舐め回されるといふ状況にも美苗の身体は快楽を堰き止められず、今日何度目か知れぬイキ潮を漏らして絶頂してしまう。なんとも背徳的な光景にまだまだ性欲を刺激された男の逸物は益々血管が浮き出て硬さを増すのだった。

「ひっ♡ ひぐっ♡ も、もうやだあ……♡ お願い、もう許してえ

……♡ このままじゃ私……私………——れなくなっちゃう」

「……………みーな♡」

「しようがねえなあ♡」

遂には大粒の涙を零して泣き始めてしまった美苗が何事かを呟くと、傍でそれを聞いたらしい七緒と夏希は顔を見合わせ柔和に微笑み、突っ伏して動けない美苗を優しく抱き上げてやる。

「な、七緒ちゃん……夏希ちゃ——んっむ!? ふむ♡ ぷちゅ♡

ちゅ♡ ちゅ♡ んっちゅ♡ ちゅる♡ ちゅっぱちゅっぱ♡♡」

「んちゅ♡ んっ♡ ちゅるちゅる♡ 美苗可愛い♡ 美苗♡ み

なあ♡♡」

「ちゅろちゅろ♡ ちゅっぷちゅっぷ♡ はっふ♡ こんなしおらし

いとこもあるんだな♡ んっちゅ♡」

女の子座りで心配そうに2人を見る美苗の唇を交互に啄み、柔らかかに舌を絡めながら唾液を混ぜ合う美少女3人の姿は実に官能的で余計に性欲を刺激される男。が、いつの間にもやら割って入って襲うような空気ではなくなっており、途端に蚊帳の外となった男はどこか居心地の悪さを感じつつも口出しせず、大人しく待機する事に決めたのだった。妙なところで空気の読める男である。

「美苗、もう1人で頑張らなくて良いんだよ。私と夏希がちゃんと守ってあげるから」

「——え?」

「悪かったな、薄々気づいてたんだけどさ。美苗だから、って安心してた。美苗も意外と弱っちいところあんだな」

「ち、ちが……私は………」

「美苗が弱い所見せたつてさ、嫌いになつたりしないよ。むしろもつと好きになつちゃうって」

「そうそう。とつくに腐れ縁なんだから、んなこと一々気にする訳ないだろ」

「……………」

まるで赤子をあやすかのように優しく諭す七緒と夏希に対し、困惑して俯いてしまう美苗。一方で、更にしつとりとしてきた空気に益々居たたまれなくなってきた男も軽く困惑しつつ、とりあえず落ち着こうと待機姿勢を正座に変更する。全裸で。

「…………もう、頑張らなくても…………。我慢しなくても、良いの…………？」

「うん、いいよ」

「わがまま言つても……………嫌いに、ならない？」

「ならないって言つてるだろ」

「……………」

恐らく初めて見せるであろう年相応に不安を吐露し、捨てられた子犬のような姿の美苗と、それを聖母のように見守る七緒と夏希。そして、そんな光景を息を呑んで見守る全裸で正座待機の中年のおっさん。台無しである。

「……………私が初めて負ける男が、そこで居心地悪そうにしてるおっさんだなんて……………変なの」

「へ？——ちよつとおじさん、そんな隅つこで正座なんて……………ぶふっ」

「おっさんさあ……………やっぱセックスの時以外は冴えないよなあ……………」

何やら憑き物がとれたような表情で流し目を送ってくる美苗、自分の姿を見て嘔き出す七緒と呆れる夏希に対し、男は頭を掻きながら苦笑する他なかった。

ほっちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅ!! どっちゅどっちゅ!!  
♡ ごりゅん!♡ ぐりゅりゅん!♡ だっぱんぶっぱん!!









♡ ご主人様好き！♡♡♡ おじさん大好きなの♡♡♡ おオ  
~~~~~♡♡♡

ほっびゅ♡♡♡

「んっのお??♡♡♡」

びゅるるるっ♡♡♡ ほっびゅどっびゅん！♡♡ びゅっぐ

びゅっぐー！♡♡♡ どぐっどぐっ♡♡♡ びゅーーー♡♡♡

びゅーーー♡♡♡

「ほあぁあぁっ♡♡♡ うっオっ♡♡♡ おっも♡♡♡ おじさんせーし  
おっっも♡♡♡ ふっぎゅ♡♡♡ ぬうオっ♡♡♡ いくっ♡♡♡ ひっ  
ぎ♡♡♡ お、おにやかぶらみゅ♡♡♡ おお~~~~だしすぎ♡  
♡♡♡ ギーめんできゅぎっらっぐ♡♡♡ らくらくらく♡♡♡  
♡♡♡ イッグイッグイッグ♡♡♡ うっ(??)♡♡♡ ぐっぶ♡♡♡  
♡♡♡ フーッ♡♡♡ んふーーっ♡♡♡ ~~~~~っ♡♡♡  
ええええ♡♡♡ おオ~~~~っ♡♡♡」

「ねー聞いている？ 朝ご飯できたよー？」

キッチンから何度も何度も呼んでるのに返事も寄こさないのはい  
つものことで、盛大にため息が出る。今日は私が当番なんだからしよ  
うがないっちゃんしようがないんだけど……。

「くおら聞いてんのかこの万年発情期ども!!」

「んっふ♡ ちゅっぶぐっぽお♡♡ んれろれろれろれえ~~~~♡

「♡」

「ちゅっちゅっちゅっ♡ すーっーっーっ♡ ♪  
ふーっーっ♡ ♪ んふーっ♡」

寝室の扉をバァン!! と勢いつけて開け放つと、朝っぱらから濃密な性臭がわたしの鼻をついて子宮をきゅんきゅん♡ に疼かせてくる。くっその性悪どもめ……いやまあわたしが当番じゃない時は逆になるからあんまり強く言えないんだけど……。

「ご飯の時くらい盛るの止めてよねほんと……。せっかく作ったのが冷めちやうでしよーが」

「んんん♡♡♡ ごっきゅごっきゅん♡♡♡ んげえっぶ♡♡♡  
朝から御馳走さまですおじさまあ♡♡♡」

「ふっぎゅいっく♡♡♡ 臭いだけでイツグ♡♡♡ —— あ、美苗  
ずりいぞ! 一人で全部飲んじまいやがって……」

「おーい。いい加減にしないと怒るぞー」

「あ、七緒ちゃん当番ご苦労様♡」

「おー。もう朝飯できたの?」

「だからできたって言ってんでしょうがさっさとシャワー浴びて歯磨  
いて♡♡」

「きゃ〜七緒ちゃんこわ〜い」

「へいへい。おっさんも早く起きろよー」

ようやつと痴女2人を寝室から追い出すことに成功したわたしは、  
相も変わらず朝から元氣一杯なおじさんを見下ろすと、ほう♡ と思  
わず吐息が漏れる。——だめだだめだ。流石にこの時間だと講  
義に間に合わなくなる。耐えろわたし。これ以上は冗談抜きで出席  
日数がヤバい。

「ほらー。おじさんもしゃきつと起きて! 仕事遅れちやう——っ  
むう!♡」

~~~~~♡ おじさんのばかあ♡♡♡ 抱き寄せてちゅーなん  
かされひやらあ♡♡♡

「んっむ♡♡♡ んっちゅ♡♡♡ ちゅっちゅっちゅっ♡♡♡ んんん♡  
~~~~♡♡♡ つぱあ♡♡♡ もうばか♡♡♡ おじさんのばーか♡♡♡」

が、がまん♡ 我慢我慢我慢♡♡♡ あーもう♡ またシヨ  
ツ変えなきや♡♡

「ほらっおじさん♡ 早く立って！ そんな顔しないの！ お仕事頑  
張ったら夜いっぱいしてあげるから♡♡ だから、ね？♡ 朝ご飯食  
べよ？」

きつと3人揃っていっぱい泣かされちゃうけど♡

………あーこれ、講義集中できるかな……。もう、ほんつとにど  
うしようもないんだから……。

でも——、

「ね、おじさん」

——好きだよ、あの日からずっと。

「今日も1日、頑張ろうね」